第５章　考古学的考察

第１節　八橋第８・９遺跡における６～７世紀の土器編年

小口英一郎　　北島大輔　　原あづさ

１．はじめに

東伯耆は、古墳時代前期～中期にかけての土師器編年が一定の水準に達しながらも（牧本1999ほか）、古墳時代後期～終末期となると須恵器・土師器のいずれの変遷も十分な整理がなされていない。そのため、古墳時代後半の年代決定にあたっては近畿や近隣地域（西伯耆・出雲など）の須恵器編年に頼らざるをえないのが現状である。土師器の変遷もその実態は依然として不透明である。

しかし、山陰の須恵器には、一見古そうな形態が新しい段階まで残存する事例や、山陰内でも地域差が認められるとの指摘もある（山本1960）。例えば、高台坏の出現は近畿よりも一・二段階遅れ、出現後も古墳後期的な蓋坏が根強く残存する（萩本・佐古1984）。また、坏蓋の肩部にみられる２条沈線は、出雲から西伯耆にかけては一般的で、６世紀代須恵器の細分基準のひとつにもなっているものの（大谷1994）、東伯耆ではあくまでも客体的な存在にとどまる。こうした現状を踏まえると、他地域の編年を無批判に援用するだけではおのずと限界があろう。東伯耆の実態に即した時間軸の整備が必要とされるのはそのためである。また、土師器の変遷や器種構成を把握することで、当時の生活復元に役立てるべきであろう。例えば、弥生時代以来連綿と続いてきた有段口縁甕がいつ消滅するのか、竈の導入時期や普及過程といった基本的な事柄を明らかにする必要がある。

今回の調査では、住居跡をはじめとした古墳時代後期～終末期の遺構から各時期の一括資料が得られた。埋土中からの出土で破片資料が中心であり、年代幅をもつ遺構もあるものの、６・７世紀代の土器の大まかな変遷を追うことができる。そこで本稿では、本遺跡出土資料に周辺遺跡の資料でも補完しつつ、東伯耆西部における古墳後期の土器編年を整理し、地域構造を把握する一助としたい。（北島）

２．分析の視点と方法

対象地域　須恵器・土師器の編年にあたっては、八橋第８・９遺跡の出土資料のほか、東伯郡西部（赤碕町・東伯町・北条町・大栄町）での出土資料を用いる。『和名類従抄』記載の「八橋郡」の想定範囲にほぼ相当し、竪穴式系横口式石室や狭長プランの石室が分布するなど東伯耆のなかでも独自の地域的なまとまりを有している（土生田1975、近藤1987ほか）。

型式組列と組成　まず、蓋坏（坏蓋・坏身）や高坏を基軸として、須恵器の変遷を整理する。饗膳用の３器種を重視する理由は、これらの出土頻度がきわめて高く、型式変遷も比較的明瞭なためである。また、坏蓋と坏身とはセット関係を捉えやすく、それぞれの型式変化の同時性を検証しやすいとの利点もある。

次に、土師器においては、最も安定的に出土し形態変化が追いやすい甕を基軸として住居跡一括資料を重視して変遷を整理する。

なお、今回は八橋第８・９遺跡の遺構変遷の分析を行う便宜上、八橋Ⅰ期を弥生後期、八橋Ⅱ期を古墳前期としている。以下では八橋Ⅲ期以降の土器変遷について述べる。（小口・北島）

３．須恵器・土師器の分類

編年試案を提示する前に、須恵器および土師器の器種分類を示しておく。

（１）須恵器

①坏蓋、②坏身、③高坏、④瓶、⑤提瓶、⑥横瓶、⑦甕、⑧壺などがある。①～③をさらに細分する。

坏蓋Ａ類　口縁部にカエリをもたない。坏身Ａ類とセットをなす。ただし、天井部にツマミが付く場合は高坏Ａ１類・Ｂ１類に伴う場合が多い。

Ａ１類　肩部の稜が明瞭で、口唇部を面取りする。天井部は回転ヘラケズリ（Ａ２類を除く）。

Ａ２類　Ａ１類のうち、肩部直下をヨコナデして稜を表現するもの。口唇部面取り。

Ａ３類　肩部の稜が明瞭で、口唇部の面取りを省略する。天井部は回転ヘラケズリ。

Ａ４類　肩部の稜が不明確で、天井部は回転ヘラケズリ。

Ａ５類　肩部の稜が不明確で、天井部はヘラギリ未調整。

坏蓋Ｂ類　口縁部にカエリをもち、ツマミをもつ。坏身Ｂとセットをなす。小型品。

坏蓋Ｃ類　環状ツマミをもつ。大型品。坏身Ｃ類とセットをなす。

Ｃ１類　口縁部内面にカエリをもつ。

Ｃ２類　口縁部が屈曲して垂下する。

坏身Ａ類　口縁部にカエリをもつ。坏蓋Ａ類とセットをなす。

Ａ１類　口唇部を面取りする。底部は回転ヘラケズリ

Ａ２類　口唇部の面取りを省略する。底部は回転ヘラケズリ。

Ａ３類　口唇部の面取りを省略する。底部はヘラギリ未調整。

坏身Ｂ類　逆台形の坏身となるもの。坏蓋Ｂ類に伴う。脚部が付く場合がある。

坏身Ｃ類　底部に高台がつくもの。坏蓋Ｃ類に伴う。

高坏Ａ類　短脚の高坏。カエリをもつ有蓋高坏（Ａ１類）とカエリのない無蓋高坏（Ａ２類）とがある。

高坏Ｂ類　長脚の高坏。カエリをもつ有蓋高坏（Ｂ１類）とカエリのない無蓋高坏（Ｂ２類）とがある。

（２）土師器

土師器は、①甕、②高坏、③脚付埦、④埦、⑤甑の５器種が認められる。⑤の甑を除き、これらの器種を細分すると以下のようになる。

甕Ａ類　有段口縁を呈するもの。

Ａ１類　口縁端部が平坦面を形成し、ほぼ直立する。

Ａ２類　口縁端部が外剥ぎ状を呈し、直立する。

Ａ３類　口縁端部が平坦面を形成し、やや内湾する。

甕Ａ′類　有段口縁を呈するもので、甕Ａ類の小型のもの。

甕Ｂ類　有段口縁部が短くなり、稜が形骸化するもの。

Ｂ１類　口縁端部が外剥ぎ状を呈し、外反する。

Ｂ２類　口縁端部が外剥ぎ状を呈し、直立する。

甕Ｃ類　口縁部が大きく外反し、肩部が張り球胴形になるもの。口縁部には有段部の痕跡がわずかに残るものも認められる。頸部内面の稜が、外面の括れよりも下部に位置する。

Ｃ１類　口縁端部が平坦面を形成する。

Ｃ２類　口縁部が先細りし、内面が丸味を帯びる。

甕Ｄ類　口縁部が大きく外反し、頸部内面が「く」字状を呈して胴部が直立するもの。口縁部径が胴部径よりも大きくなる。頸部内面の稜が、外面括れより上部に位置する。

Ｄ１類　口縁部が先細りし、頸部内面に稜を形成する。

Ｄ２類　頸部がやや丸味を帯びながら大きく外反する。

高坏Ａ類　口縁部が直線的に外反し、坏部と底部との境界に稜を形成するもの。

高坏Ｂ類　口縁端部内面が外剥ぎ状を呈し、内面に稜を形成するもの。

脚付埦Ａ類　口縁部が丸味を帯びて直立するもの。

脚付埦Ｂ類　口縁部が丸味を帯び内湾するもの。

埦Ａ類　口縁端部内面が外剥ぎ状を呈し、内面に稜を形成するもの。

埦Ｂ類　口縁部が先細りして立ち上がるもの。

埦Ｃ類　口縁端部が肥厚して立ち上がるもの。

埦Ａ類　口縁部内面が外剥ぎ状を呈し、内面に稜を形成するもの。

４．須恵器・土師器の変遷

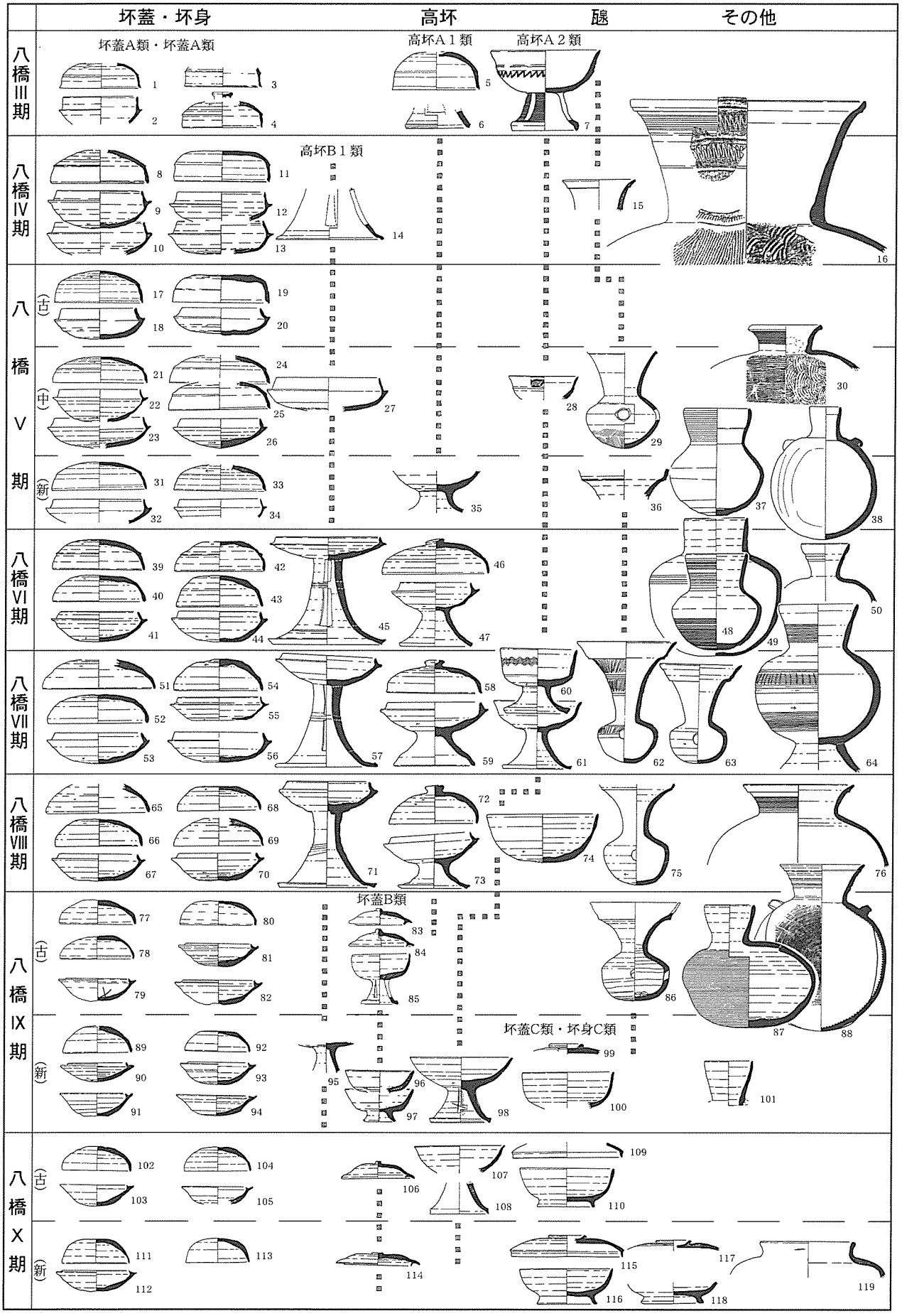
上記の視点と方法に基づき、須恵器・土師器の各分類群の変遷を概観したい（第148・149図、表77）。

八橋Ⅲ期　上種第６遺跡SI６・SI７（馬渕・根鈴1985b）や別所５号墳周溝Ａ地点（大谷1995）の出土資料をもとに設定する。須恵器坏身Ａ類のカエリはほぼ垂直に立ち上がり、口唇部には内傾した端面をもつ（Ａ１類）。坏蓋Ａ類の口縁部もほぼ直角に接地し、肩部の稜が明確である。稜の作出にあたっては、稜をつまむようにヨコナデしたＡ２類や、肩部直下に沈線を施したＡ３類などがある。このうちＡ２類には、粘土を貼付けて稜を成形した事例が観察される。また、坏蓋・坏身ともに口唇部が面取りされ、内傾端面をもつ。坏身・坏蓋の内面には、当て具痕が認められることがある。また、高坏には有蓋高坏と無蓋高坏の両者が存在するが、いずれも短脚で、長方形の一段透孔を３方に穿つ（高坏Ａ類）。長脚二段透孔高坏（高坏Ｂ類）の出現以前の土器群と考えられる。本遺跡では、遺構出土ではないものの、北谷部・南谷部の包含層中にこの時期のものが散見される。東伯耆を見渡すと、初期須恵器の出現から長脚二段透孔高坏の成立直前までの期間はさらに細分できるが、今回の考察では保留しておく。

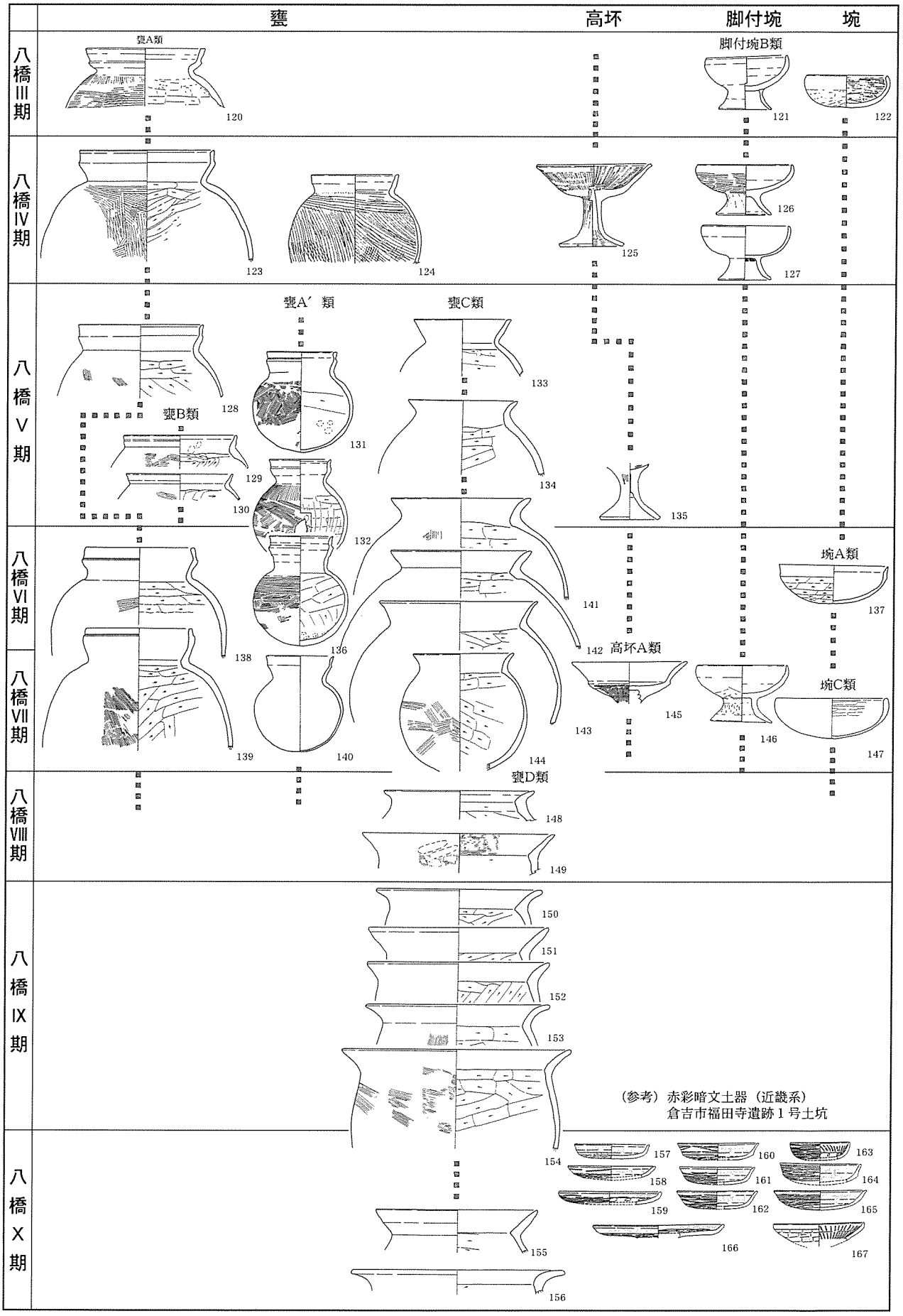
土師器については、甕Ａ類が該当しよう。とくに口縁端部を平坦化し、直立する甕Ａ１類が顕著である。口縁部外面はヨコナデ、胴部はハケメ、内面は口縁部がヨコナデ、頸部の稜以下にヘラケズリ調整を施している。

八橋Ⅳ期　Ⅲ期に比べ、坏蓋・坏身ともに口径の大型化が進む。わずかではあるが、坏蓋Ａ類の口縁部は外開きとなり、坏身のカエリは内側に傾く。Ⅲ期に引き続き、坏蓋や坏身の口唇部には内傾端面が認められるが、内傾の度合いがさらに強まる。確実な共伴資料はないが、この頃には長脚高坏（高坏Ｂ類）が出現し、短脚高坏（高坏Ａ類）と並存した可能性が高い。坏蓋・坏身の内面には当て具痕が認められることがある。上種第５遺跡土器溜（馬渕・根鈴1985a）・上種第６遺跡SI12（馬渕・根鈴1985b）・別所19号墳第２埋葬施設（大谷1995）をもとに設定する。八橋第８・９遺跡では、南谷部包含層L10cグリッドにⅣ期を中心とした土器集積が認められる。またSI３の須恵器は、Ⅳ～Ⅵ期と年代幅をもつが、床面直上出土の坏蓋１・２や高坏３はⅣ期となる可能性が高い。

土師器は甕Ａ類が該当する。口縁部に平坦面を有するＡ１類、口縁内面が外剥ぎ状を呈し直立する



第148図　６～７世紀の土器編年１（須恵器）



第149図　６～７世紀の土器編年２（土師器）

表77　土器対照表

No.	遺跡・遺構名	No.	遺跡・遺構名	No.	遺跡・遺構名	No.	遺跡・遺構名	No.	遺跡・遺構名	No.	遺跡・遺構名
1	八橋第8・9遺跡暗褐ａ（2）★	29	八橋第8・9遺跡 SI14（28）	57	大高野3号墳西側周溝（13）	85	塚本8号墳土坑（74）	113	八橋第8・9遺跡土集3（1）	141	八橋第8・9遺跡土集1（7）
2	上種第6遺跡 SI7（88）	30	八橋第8・9遺跡 SI14（29）	58	大高野3号墳西側周溝（10）	86	代代1号墳周溝（4）	114	八橋第8・9遺跡 SI4（2）	142	八橋第8・9遺跡土集1（12）
3	上種第6遺跡 SI6（76）	31	八橋第8・9遺跡 SI20（1）	59	大高野3号墳西側周溝（15）	87	塚本8号墳墳丘Ａ地点(49)	115	八橋第8・9遺跡 SI4（4）	143	八橋第8・9遺跡土集1（10）
4	上種第6遺跡 SI7（87）	32	八橋第8・9遺跡 SI20（3）	60	大高野3号墳西側周溝（17）	88	代代1号墳第2土壙墓（15）	116	八橋第8・9遺跡 SI4（9）	144	八橋第8・9遺跡土集1（11）
5	八橋第8・9遺跡暗褐ｂ（3）★	33	八橋第8・9遺跡 SI20（2）	61	大高野3号墳西側周溝（14）	89	八橋第8・9遺跡 SI1（1）	117	八橋第8・9遺跡 SI4（5）	145	八橋第8・9遺跡土集1（2）
6	八橋第8・9遺跡 SI9（4）★	34	八橋第8・9遺跡 SI2（3）	62	大高野3号墳西側周溝（19）	90	八橋第8・9遺跡 SI1（5）	118	八橋第8・9遺跡 SI4（10）	146	上種第6遺跡 SI25（260）
7	別所5号墳周溝底面（15）	35	上種第6遺跡 SI17（215）	63	大高野3号墳西側周溝（20）	91	八橋第8・9遺跡 SI1（8）	119	八橋第8・9遺跡 SI4（12）	147	八橋第8・9遺跡 SI21（2）
8	上種第5遺跡土器溜（573）	36	上種第6遺跡 SI17（212）	64	大高野3号墳西側周溝（22）	92	八橋第8・9遺跡 SI1（2）	120	上種第6遺跡 SI6（67）	148	上種第6遺跡 SI22（246）
9	上種第5遺跡土器溜（576）	37	上種東3号墳石室内（19）	65	上種第6遺跡 SI22（249）	93	八橋第8・9遺跡 SI1（4）	121	上種第6遺跡 SI7（83）	149	上種第6遺跡 SI22（245）
10	上種東第6遺跡 SI12（145）	38	上種東3号墳石室内（20）	66	大高野2号墳周溝（24）	94	八橋第8・9遺跡 SI1（6）	122	上種第6遺跡 SI6（71）	150	八橋第8・9遺跡 SI1（20）
11	八橋第8・9遺跡 SI3（1）★	39	大高野5号墳墳丘内（2）	67	大高野2号墳周溝（30）	95	上種第5遺跡 SI9（139）	123	八橋第8・9遺跡 SI19（11）★	151	八橋第8・9遺跡 SI1（17）
12	上種第5遺跡土器溜（574）	40	大高野5号墳墳丘内（14）	68	大高野2号墳周溝（22）	96	上種第5遺跡 SI9（138）	124	上種第6遺跡 SI12（136）	152	八橋第8・9遺跡 SI1（21）
13	上種第5遺跡土器溜（575）	41	大高野5号墳墳丘内（21）	69	上種第6遺跡 SI22（250）	97	上種第5遺跡 SI9（137）	125	上種第6遺跡 SI12（140）	153	八橋第8・9遺跡 SI1（19）
14	八橋第8・9遺跡 SI3（13）★	42	大高野5号墳墳丘内（1）	70	大高野2号墳周溝（29）	98	八橋第8・9遺跡 SI1（10）	126	上種第6遺跡 SI12（143）	154	八橋第8・9遺跡 SI1（22）
15	八橋第8・9遺跡 SI3（12）★	43	大高野5号墳墳丘内（12）	71	大高野2号墳周溝（50）	99	八橋第8・9遺跡 SI1（3）	127	八橋第8・9遺跡土集2（3）	155	八橋第8・9遺跡 SI4（16）
16	上種第5遺跡土器溜（577）	44	大高野5号墳墳丘内（24）	72	大高野2号墳周溝（42）	100	八橋第8・9遺跡 SI1（9）	128	八橋第8・9遺跡 SI2（8）	156	八橋第8・9遺跡 SI4（20）
17	八橋第8・9遺跡 SI15（1）	45	大高野5号墳墳丘内（38）	73	大高野2号墳周溝（44）	101	八橋第8・9遺跡 SI1（13）	129	八橋第8・9遺跡 SI2（6）	157	福田寺遺跡1号土坑（12）
18	別所15号墳周溝内埋葬（7）	46	大高野5号墳墳丘内（35）	74	大高野2号墳周溝（64）	102	八橋第8・9遺跡 SI22（2）	130	八橋第8・9遺跡 SI2（5）	158	福田寺遺跡1号土坑（15）
19	別所15号墳主体部（5）	47	大高野5号墳墳丘内（36）	75	大高野2号墳周溝（54）	103	八橋第8・9遺跡 SI22（6）	131	八橋第8・9遺跡 SI14（33）	159	福田寺遺跡1号土坑（16）
20	別所15号墳主体部（6）	48	大高野5号墳墳丘内（40）	76	大高野2号墳周溝（59）	104	八橋第8・9遺跡 SI22（3）	132	上種西14号墳2号棺（14）	160	福田寺遺跡1号土坑（1）
21	八橋第8・9遺跡 SI14（7）	49	大高野5号墳墳丘内（42）	77	塚本8号墳土坑（66）	105	八橋第8・9遺跡 SI22（7）	133	八橋第8・9遺跡 SI14（41）	161	福田寺遺跡1号土坑（7）
22	八橋第8・9遺跡 SI14（17）	50	大高野5号墳墳丘内（39）	78	塚本8号墳土坑（68）	106	八橋第8・9遺跡 SI22（5）	134	八橋第8・9遺跡 SI14（38）	162	福田寺遺跡1号土坑（3）
23	八橋第8・9遺跡 SI14（14）	51	上種第6遺跡 SI25遺跡(262)	79	塚本8号墳土坑（69）	107	八橋第8・9遺跡 SI22（9）	135	八橋第8・9遺跡 SI2（10）	163	福田寺遺跡1号土坑（10）
24	八橋第8・9遺跡 SI14（3）	52	大高野3号墳西側周溝（4）	80	塚本8号墳土坑（67）	108	八橋第8・9遺跡 SI22（12）	136	上種西14号墳1号棺Ｂ(11)	164	福田寺遺跡1号土坑（2）
25	八橋第8・9遺跡 SI14（10）	53	大高野3号墳西側周溝（8）	81	代代1号墳第2土壙墓（10）	109	八橋第8・9遺跡 SI22（4）	137	八橋第8・9遺跡 SI6（23）	165	福田寺遺跡1号土坑（9）
26	八橋第8・9遺跡 SI14（18）	54	大高野3号墳西側周溝（2）	82	塚本8号墳土坑（70）	110	八橋第8・9遺跡 SI22（8）	138	八橋第8・9遺跡土集1（6）	166	福田寺遺跡1号土坑（18）
27	八橋第8・9遺跡 SI22（11）★	55	上種第6遺跡 SI25（267）	83	塚本8号墳土坑（72）	111	八橋第8・9遺跡 SI4（1）	139	八橋第8・9遺跡土集1（5）	167	福田寺遺跡1号土坑（11）
28	八橋第8・9遺跡 SI14（25）	56	大高野3号墳西側周溝（9）	84	塚本8号墳土坑（73）	112	八橋第8・9遺跡 SI4（6）	140	大高野3号墳西側周溝（24）	（　）の数字は各報告書での遺物No.	

★印は一括性に乏しい資料

表78　各編年との併行関係

時期		基準資料（旧八橋郡内）	坏蓋A 1	坏蓋A 2	坏蓋A 3	坏蓋A 4	坏蓋A 5	坏蓋B	坏蓋C 1	坏蓋C 2	坏身A 1	坏身A 2	坏身A 3	坏身B	坏身C	高坏A 1	高坏A 2	高坏B 1	土師器 甕A	土師器 甕B	土師器 甕C	土師器 甕D	変化の特徴	近畿 陶邑 田辺1981	東伯耆 天神川 牧本1999	西伯耆 陰田 絵本・佐古	西伯耆 青木 清水1978	出雲 高広 足立ほか	出雲 大谷 大谷1994	山陰 山本 山本1971
八橋Ⅲ期		上種第６遺跡６号住居 上種第６遺跡７号住居 別所５号墳周溝Ａ地点 (八橋８・９遺跡南谷部・北谷部)																					坏蓋・坏身ともに口唇部を面取り。 坏蓋はＡ１ａとＡ１ｂとが並存。 高坏は短脚１段透高坏のみ。	TK47	天神川Ⅸ期	陰田１ (＋)	青木Ⅹ期 (古)		出雲１期	山本Ⅰ期
八橋Ⅳ期		上種第５遺跡土器溜 上種第６遺跡12号住居 別所19号墳第２埋葬施設 八橋８・９土集２（・南谷部L10c）																					長脚高坏（高坏Ｂ）の出現。 坏蓋・坏身の大型化。 坏蓋の口縁部は外開きに。 坏身のカエリは内傾する。	MT15	天神川Ⅹ期	陰田２	青木Ⅹ期 (新)		出雲２期 (Ａ)	山本Ⅱ期
八橋Ⅴ期	古	別所15号墳主体部 別所15号墳周溝内埋葬施 八橋８・９遺跡 SI15・SK10																					坏蓋Ａ２（肩部直下ヨコナデ）主流に。 坏身口唇端面省略のＡ２出現。	TK10		陰田３	(＋)		出雲２期 (Ｂ)	
	中	八橋第８・９遺跡 SI14 井図地中ソネ遺跡 SI18																					坏身Ａ１客体化。Ａ２が主流に。							
	新	八橋８・９遺跡 SI20 (上種東３号墳石室内) (八橋第８・９遺跡 SI２)																					坏身Ａ２の口唇部先細り傾向が進む。	MT85					出雲２期 (Ｃ)	
八橋Ⅵ期		大高野５号墳墳丘内 上種第６遺跡20号住居 (八橋第８・９遺跡 SI６)																					坏蓋Ａ３・Ａ４出現（口唇面取りの省略）。肩部稜をもつＡ３主流に。	TK43		陰田４		高広 ⅠＡ期	出雲 ３期	山本Ⅲ期
八橋Ⅶ期		大高野３号墳西側周溝 上種第６遺跡 SI25 (八橋第８・９遺跡 SI21)																					坏蓋Ａ３の客体化。Ａ４類主流に。 肩部直上が浅くくぼむ。 ハソウ長頸化のピーク。 土師器有段口縁甕（甕Ａ類）はⅧ期まで存続。	TK209		陰田５		高広 ⅠＢ期	出雲 ４期	
八橋Ⅷ期		大高野２号墳墳丘・周溝 上種第６遺跡 SI22 笠見第２遺跡１号墳石室内 下斎尾１号遺跡第３トレンチ																					坏蓋肩部直上のくぼみが弱く、天井部と口縁部の境界不明瞭に。 ハソウは頸部は外反傾向、屈曲弱く。 土師器甕Ｄ類が主流に。	TK217		陰田６ 陰田７ (古)			出雲 ５期	山本Ⅳ期
八橋Ⅸ期	古	代代１号墳周溝・第２土壙墓 塚本８号墳前提部・土坑 八橋第８・９遺跡 SI10																					擬宝珠ツマミ坏蓋出現。 坏身・坏蓋の小型化。 ハソウ頸部はさらに強く外反。	TK46		陰田７ (新)	奈良１期	高広 ⅡＡ期	出雲６期 (Ａ)	
	新	八橋第８・９遺跡１ SI １																					環状ツマミ坏蓋・高台付坏出現。 口縁部にカエリ。	TK48		陰田８	奈良２期	高広 ⅡＢ期	出雲６期 (Ｂ)	
八橋Ⅹ期	古	井図地頃遺跡 SD４・大谷10号墳 (八橋第８・９遺跡 SI22)																					環状ツマミ坏蓋のカエリ消失。	MT21		陰田９	奈良３期 ～４期	高広 ⅢＡ期	出雲 ７期	
	新	(八橋第８・９遺跡 SI４・SI16)																					坏蓋Ａ５・坏身Ａ３最小に。			陰田10		高広 ⅢＢ期	出雲 ８期	

（　）は基準資料に準じる資料

Ａ２類、内湾するＡ３類がそれぞれみられる。口縁下端上部に棒状工具による沈線もしくはナデ調整を行い、稜を形成する。また、口縁帯をヨコナデ調整するために口縁端部が外側にやや張り出しているものも存在する。外面は胴部がハケメ、内面はヘラケズリ調整である。その他の器種として、口縁部がやや外傾し、胴部にハケメ調整がみられる椀、口縁端部が先細りして、緩やかに立ち上がる脚付椀が存在する。SI３埋土、SI19床直、南谷部土器集中ブロック２出土資料が該当しよう。

八橋Ⅴ期　坏蓋Ａ１類が依然として存続するが少数派となる。そのかわり、肩部の直下を強くヨコナデすることで肩部の稜を形成したＡ２類が主流となる。Ａ２類の登場はⅣ期にまで遡る可能性がある。Ａ２類のヨコナデはＡ１ｂ類にみられた肩部直下の沈線が転化した結果とみられる。一方、坏身Ａ類は口唇部に端面をもつＡ１類も存続するが、丸みを帯びたＡ２類が主流となる。坏蓋・坏身内面の当て具痕は、例が少ないが存続する。また、Ⅴ期を境として坏身のカエリが次第に短小化していく。瑳は頚部のしまりがゆるく、胴部は中位に最大径があり、沈線や列点文を省略する場合もある。底部は丸底である。

さて、Ⅴ期はさらに細分できる。古段階は、口唇部を面取りした坏身Ａ２類とこれを省略した坏身Ａ３類とが並存する。別所15号墳主体部や周溝内埋葬施設（大谷1995）の供献須恵器を指標とする。八橋第8・9遺跡SI15・SK10はこの段階に相当しようか。中段階は、坏身Ａ１類がほぼ姿を消し、Ａ２類が大半となる時期で、本遺跡のSI14や井図地中ソネ遺跡SI18（君嶋2003）をもとに設定する。新段階は、中段階に比べて坏身Ａ２類のカエリの短小化や口唇部の尖鋭化が進む。八橋第８・９遺跡SI20・SI２が指標となるほか、上種東３号墳石室内出土須恵器（土生田1976）もこの時期の可能性が高い。

Ⅴ期の土師器には甕Ａ・Ｂ・Ｃ類が位置付けられよう。Ａ類は依然口縁部が直立するものの、段部が緩くなってくる。Ａ類の小型器種であるＡ′類もみられる。口縁端部が外剥ぎ状を呈していることが特徴である。Ｂ類は口縁部が直立もしくはやや外反し、短小化する。口縁下の稜が明瞭に残存するものと、痕跡化したものに分かれる。本例は、Ａ類に比べ頚部の括れが小さく、口縁が外反していることが特徴であり、Ａ類とＣ類の中間形態として位置付けられる。ただし、Ａ類→Ｂ類→Ｃ類という単純な変遷をとるのではなく、次期においてもＡ類は残存する点に注意したい。その他、口縁が緩やかに外反し、端部を平坦化するＣ１類、先細りするＣ２類が当該期にみられるが、前者がやや古相を帯びると思われる。器形は頚部径が広く、胴部は球胴形となる。調整は外面胴部がハケメ、内面は頚部に一部指押さえ、胴部ヘラケズリが観察される。SI２・14出土資料を指標とする。

八橋Ⅵ期　大高野５号墳墳丘内出土資料（大賀1990）・上種第６遺跡SI20・上種西15号墳（馬渕・根鈴1984）をもとに設定する。蓋坏Ａ類は、引き続きＡ２類も残存するが、口唇部の面取りを省略したＡ３類が主流となり、肩部直下のヨコナデさえも省略したＡ４類も現れる。坏身は、Ⅴ期よりもカエリの内傾度がさらに強まる。蓋坏に認められる当て具痕はほぼこの段階をもって終息する。高坏には短脚の高坏Ａ類と長脚二段透孔の高坏Ｂ類とがある。このうち高坏Ｂ類には、上・下段の透孔の間に２条の平行沈線がめぐる。この段階の沈線は、むしろ沈線間の稜を強調するために施文されたとみられる。このほか、下段の透孔の直下にも１条の沈線がめぐる場合がある。八橋第８・９遺跡SI６はⅢ～Ⅹ期と年代幅をもつが、Ⅵ期に中心が求められる。

土師器は前段階同様に甕Ａ・Ｂ・Ｃ類が共存関係にあるが、Ｃ類が主要器種となってくる。甕Ｃ類は、頚部の括れが小さく、胴中位に最大径を有する球胴形に変化する。口縁端部が先細りするＣ２類

が安定的な組成を示してくることがⅥ期の特色である。SI３・６・25出土資料が該当しよう。

八橋Ⅶ期　大高野３号墳西側周溝（大賀1992）・上種第６遺跡SI25を基準とする。坏蓋Ａ２・Ａ３類はほぼ姿を消し、肩部の稜が不明瞭なＡ４類が大半となる。この時期の坏蓋Ａ４類は、肩部直上を浅く窪ませることで肩部を表現した事例がほとんどである。つまり、調整段階（三次成形）でのヨコナデを省略し、遠心力を伴う回転ナデ（二次成形）だけで肩部の境界を表現しようとしたためであろう。坏身Ａ２類は、カエリの短小化とともに口唇部の先細り傾向が強まる。Ⅵ期から引き続き、長脚二段透孔の高坏Ｂ類の脚部には２条の平行沈線がめぐる。ただし、１条の幅が広く浅くなり、沈線間を突帯状にしようとの意識が薄れる。瓶は頚部のすぼまりが強くなり、胴部最大径の位置が肩部付近へと上昇する。胴部下半は回転ヘラケズリが一般的になる。底部は依然として丸底ではあるが、胴部との境界も識別できるようになる。八橋第８・９遺跡SI21は出土量が少ないものの、床直出土の頚部がこの時期の形態と類似し、Ⅶ期に所属する可能性が高い。

土師器については、本遺跡では南谷部土器集中ブロック１一括資料が該当する。その組成は甕Ａ類とＣ類が共存関係にあるが、前者の有段部は丸味を帯びて退化し、むしろ胴部が球胴形を呈する甕Ｃ１類が主体となってくる状況を示しており、前段階と基本的な変化はないものと考えられる。他の器種として、同様な変化を示す甕Ａ′類、口縁部が緩やかに立ち上がる埦Ｃ類も認められる。

八橋Ⅷ期　大高野２号墳墳丘および南側周溝（大賀1991）・笠見第２－１号墳石室内（大賀1995）・上種第６遺跡SI22のほか、下斎尾１号遺跡試掘第３トレンチ検出の落込み状遺構（大賀1987）などの出土資料がある。坏蓋は、引き続きＡ４類が主流だが、Ⅶ期に比べて肩部直上のくぼみが浅く弱くなり、肩部をただ屈曲させただけの事例も増える。瓶は、頚部のすぼまりがさらに強まり、口縁部に向かうにつれて急速に外反する。また、肩部の張りがさらに強くなる一方、外面では頚部から胴部への移行が連続的となる。底部はさらに平底に近づくが、依然として凸面をたもつ。

土師器は、甕Ｃ類からＤ類へ移行する変換点である。上種第６遺跡SI22では、口縁部径が胴部径よりも大きく、頸部内面に明瞭な稜を形成するＤ１類と頸部内面が丸味を帯びるＤ２類がみられる。Ⅶ期をもって甕Ａ・Ｃ類はみられなくなり、以後甕Ｄ類が主要器種となってくる。Ⅷ期に至ると土師器の器種構成に大きな変化が起こり、高坏・脚付埦・埦などの他の器種は本遺跡においてみられなくなる。

八橋Ⅸ期　Ⅵ・Ⅶ期以降、坏蓋Ａ類・坏身Ａ類は次第に小型化してきたが、さらにその傾向が顕著になる。しかも坏蓋天井部や坏蓋底部の回転ヘラケズリに代わって、ヘラギリ未調整が主流となる（坏蓋Ａ５類・坏身Ａ３類）。坏身・坏蓋のヘラ記号や高坏脚部の擬似透孔が目立つようになるのもこの頃である。瓶は、頚部の外反がさらに強まる。注目すべきは、新器種の参入によって器種組成に大きな変化が生じることである。すなわち、口縁部にカエリを持ち天井部に乳状のツマミを付けた小型の坏蓋Ｂ類が出現する。さらに高台坏（坏身Ｃ類）が参入する。環状ツマミの付いた坏蓋Ｃ類は、高台坏に伴うものである。Ⅸ期の坏蓋Ｃ類の口縁部形態が分かる資料を欠くが、口縁部内面にカエリが付いたＣ１類が主流とみられる。いずれにしても、新規参入した器種の出土頻度はきわめて低い。

さて、Ⅸ期はさらに細分できる。古段階は坏蓋Ａ４類・坏身Ａ３類がともに幅広・扁平で、坏身の最大径が12㎝前後のものが多い。代代１号墳周溝や第２土壙墓（亀井1977）・塚本８号墳土坑（大賀1987）出土資料を基準とする。塚本８号墳前提部もこの時期を中心とする。八橋第８・９遺跡ではSI10がこの段階に属する。また新段階では、坏蓋Ａ４類・坏身Ａ３類ともに口径がさらに小型化が

進み、幅狭となる。坏身の最大径が10cm前後のものが多い。八橋第８・９遺跡SI１・上種第５遺跡SI９・井図地頭遺跡SI３・同SK33出土資料が基準となる。

本遺跡からは、SI１・南谷部土器集中ブロック３で土師器の一括資料が得られている。口縁部が大きく外反し、頸部内面が「く」字状に屈曲する甕Ｄ類は、胴部径よりも口縁部径が大きくなり、口縁部外面はヨコナデ、胴部はハケメ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリ調整が施される。頸部内面に稜を形成するＤ１類と丸味を帯びて外反するＤ２類の二者が認められるが、前者が多い傾向である。口縁部径の大型化とともに胴部が球胴形から長胴形へ変化する点が、大きな指標となろう。

八橋Ｘ期　坏蓋の小型化がさらに進むほか、環状ツマミの坏蓋Ｃ類や高台坏（高坏Ｃ類）が安定的に出土するようになる。坏蓋Ｃ類は、口縁部が屈曲したＣ２類が主流となる。また、擬宝珠ツマミの坏蓋Ｂ類も依然として存続する。Ｘ期はさらに細分できる。古段階は、坏蓋Ｂ類のツマミの形状がボタン状を呈する。井図地頭遺跡SI４・SD４のほか、八橋第８・９遺跡のSI22・SI16がこの時期を中心とする。一方、新段階になると坏蓋Ｂ類は全体に扁平化が進み、ツマミの形状も扁平化する。本遺跡のSI４が相当する。

土師器は甕Ｄ１・２類が存続し、前段階と大きな変化はみられない。八橋第８・９遺跡SI４の資料が該当しよう。また、本遺跡で欠如する坏・皿・鉢の一群として倉吉市福田寺遺跡1号土坑一括資料（Ｘ期古段階）を参考資料として提示しておきたい。（小口・北島）

５．併行関係と地域色

（１）「八橋編年」の併行関係

上記の変遷を踏まえ、先学によって構築された東伯耆・西伯耆・出雲地方の諸編年と須恵器編年の骨格となる「陶邑編年」との併行関係を見ていきたい（表78）。

八橋Ⅲ期　長脚高坏出現以前で、天神川編年Ⅸ期（牧本1999）・陰田編年１期（萩本・佐古1984）・青木編年Ｘ期古段階（清水他1978）・大谷編年１期（大谷1994）・山本編年Ⅰ期（山本1971）・TK47（田辺1981）にあたる。

八橋Ⅳ期　蓋坏は大型化し、長脚高坏が出現する。この時期は、天神川Ｘ期・青木Ｘ期新段階・陰田２期・大谷２Ａ期・山本Ⅱ期・MT15～TK10に想定される。出雲地方では先駆けて稜の形骸化が始まる。

八橋Ⅴ期　古・中・新の３段階に分かれ、本遺跡では古段階から稜の形骸化が始まる。坏蓋の肩部直下をヨコナデして稜を表現するものが主流になり、西伯耆では出雲地方と同じ２条凹線で表現する。この特徴は天神川Ｘ期・陰田２～３期・大谷２Ａ～２Ｂ期・山本Ⅱ期に該当し、TK10に推定されよう。中段階は蓋坏にみられた口縁端部の面が蓋には残り、身は端部が丸みをもつ傾向を見せる。この時期は陰田３期・大谷２Ｂ期・山本Ⅱ期に相当する。新段階は古・中段階でみられた特徴がより顕著になり、坏身カエリの口唇部が先細りする傾向がみられる。この時期は陰田３期・大谷２Ｃ期・山本Ⅲ期に対応し、MT85に想定される。

八橋Ⅵ期　坏蓋は肩部の稜が残り、身は口縁端部の面が消失する。長脚高坏に二段透孔が安定的にみられる。これは陰田4期・大谷３期・高広編年ＩＡ期（足立・丹羽野1984）・山本Ⅲ期に該当し、TK43に推定される。

八橋Ⅶ期　蓋の稜がほぼ消失する。当地域では肩部直上を強くナデて窪ませることで天井部と口縁

との境界を表現し、西伯耆・出雲地域では２条沈線の退化がみられる。瓹は長頸化し、肩部の張りが目立つ。この特徴は陰田５期・大谷４期・高広ＩＢ期・山本Ⅲ期に比定され、TK209に想定されよう。

八橋Ⅷ期　天井・口縁部の境界が不明瞭で、陰田８期・大谷５期・山本Ⅲ期・TK209～217に推定される。

八橋Ⅸ期　古・新の二段階に分かれ、古段階は坏蓋の小型化が進み、蓋に宝珠ツマミが現れる。この特徴は青木の奈良１期・陰田７期・大谷６古期・高広ⅡＡ期に該当する。新段階は、坏蓋が最小化し、高台坏・環状ツマミが現れる。これらは青木の奈良２期・陰田８期・大谷６新期・高広ⅡＢ期・TK48に相当する。

八橋Ⅹ期　古・新に分かれ、坏蓋はカエリが退化し、環状・乳頭状のツマミがみられる。この特徴は青木の奈良３期・陰田９期・大谷７期・高広ⅢＡ期に該当する。新段階は高台坏が多く、ボタン状のツマミも現れる。この特徴は青木の奈良４期・陰田10期・大谷８期・高広ⅢＢ期に相当し、Ⅹ期はMT21に推定されよう。　（北島・原）

（２）須恵器の地域色

つぎに、八橋編年をふまえ、東伯耆における須恵器の地域色を述べる。

西伯耆・出雲に一般的な坏蓋肩部の２条沈線は、東伯耆の八橋第８・９遺跡ではあくまでも少数派で、肩部直下のヨコナデが主流をなす。ただし東伯町内の笠見３号墳周溝では、八橋Ⅵ～Ⅶ期の須恵器に２条沈線の坏蓋が多く含まれていた。大谷編年の出雲３・４期に相当する資料である。遺跡によって受容差が認められる点は興味深い。

このほかにも西伯耆・出雲との相違点を指摘できる。例えば、長脚高坏（高坏Ｂ類）をみると、東伯耆ではラッパ状に大きく外反して開き、脚部の付け根はほぼ垂直に坏底部と接した例が多い。一方、西伯耆以西では直線状に開いた後、脚裾付近で短く強く外反し、脚部の付け根はわずかに開く傾向がある。しかも、東伯耆の長脚高坏の透孔はほとんどが長方形で、透孔を省略した場合も多い。ところが西伯耆以西では長方形透孔のほか縦長三角形のものも多く、透孔を省略した例は少ない。さらに東伯耆の長脚高坏は有蓋高坏がほとんどで、小型の凵字形坏部をもつ無蓋高坏はさほど多くない。一方、西伯耆以西では両者が安定して出土する。このほか西伯耆以西では、半球形の坏部をもつ高坏には長脚のものと短脚のものとがある。ところが東伯耆では、短脚のものだけでほぼ占められる。また東伯耆では、短脚の有蓋高坏（高坏Ａ１類）が八橋Ⅳ期以降も存続するが、出雲・西伯耆では類例に乏しい。このほか、瓹にも地域差を指摘できる。すなわち、西伯耆以西の瓹は頸部が比較的短く、底部も平底傾向が顕著である。その一方、東伯耆では頸部が比較的長く、底部も平底化を志向しつつも凸面を残す。ただし、頸部の長大化のピークや肩部の張り具合の変化は、両地域で連動した動きをみせる。

こうしてみると、東伯耆の須恵器は西伯耆・出雲からの影響がさほど顕著でないか限定的である。その要因としては、松江市大井窯跡群やその影響を受けた地域色の強い製品が西伯耆・出雲で流通したのに対し、東伯耆はその流通圏の外縁地域にあたるためであろう。土師器をみても、西伯耆以西では有段口縁甕が八橋Ⅲ期併行にはほぼ消失するのに対し、東伯耆ではⅦ期まで根強く残存する点も興味深い。むしろ西伯耆との関係が強まるのは、環状ツマミの坏蓋を共有する八橋Ⅸ期からではないか。擬宝珠ツマミの坏蓋が普及した因幡とは対照的であり、高台坏の形状も因幡とは異なるようである。ただし、環状ツマミの蓋坏の広域普及が、流通圏の拡大によるのか、製品の移動を伴わない製作規範

の共有を意味するかは検討すべき課題であろう。同様のことは、東伯耆出土の肩部２条沈線の坏蓋にもいえる。そのためにも製作技術の微視的な観察と、自然科学的な胎土分析との連携が望まれる。(北島)

６．おわりに

本稿では八橋第８・９遺跡の住居跡や集積ブロックなどの一括資料に加え、周辺地域の資料を補充しながら、６～７世紀の土器変遷をⅢ～Ⅹ期に８大別し、さらにⅤ期を３細分、Ⅸ・Ⅹ期をそれぞれ２細分した。また、周辺地域の土器様相との対比から、東伯地方の地域色について指摘を行った。資料が蓄積されつつあるなかで、当該期の土器編年はようやく緒についたばかりである。

今後は、さらに周辺遺跡の資料を援用しながら編年の整備を図っていくとともに、本成果から集落論や地域社会の構造といったテーマに取り組んでいきたいと考える。　　(小口・北島・原)

【参考文献】
足立克己・丹羽野裕　1984　『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会
相原嘉之　1997　「大和―都城―」『７世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会
植野浩三　1981　『三保遺跡発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
大賀靖浩　1987　『下斎尾１号遺跡・塚本８号墳発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
大賀靖浩　1987　『東伯町内遺跡群ほか発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
大賀靖浩　1990　『大高野５号墳・塚本７号墳発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
大賀靖浩　1991　『大高野古墳群発掘調査報告書（大高野１号墳・大高野２号墳発掘調査報告）』鳥取県東伯町教育委員会
大賀靖浩　1992　『大高野３号墳発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
大賀靖浩　1995　『笠見第２遺跡、笠見第３遺跡、田越第４遺跡発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
大谷晃二　1994　「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根県考古学会誌』11、島根県考古学会
大谷浩史　1995　『別所古墳群・別所女夫岩峰遺跡発掘調査報告書』鳥取県赤碕町教育委員会
亀井熙人　1977　『代代古墳発掘調査概報』鳥取県東伯町教育委員会
君嶋俊行　2003　『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
小林俊寛　1997　「陶邑―陶器山・高蔵寺・光明池地区―」『７世紀の土器（近畿西部編）』古代の土器研究会
近藤哲雄　1987　「東伯耆における横穴式石室の様相」『島根県考古学会誌』４、島根県考古学会
清水眞一　1978　「第Ⅳ章　考察編」『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ（本文編）』鳥取県教育委員会
田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群』平安高校考古学クラブ
田辺昭三　1981　『須恵器大成』角川書店
谷口恭子　1991　「土器」『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取県鳥取市教育委員会
中原　斉　1996　「Ⅳ山陰（鳥取、島根）」『須恵器集成図録』第5巻西日本編、中村浩監修、雄山閣
中村　浩　1981　『和泉陶邑窯の研究』柏書房
中山和之　1989a　『百塚53・105・106・107号墳・百塚第1遺跡・原田遺跡発掘調査報告書』鳥取県淀江町教育委員会
中山和之　1989b　「Ⅳ．小結」『百塚第1遺跡』鳥取県淀江町教育委員会
中山和之　1992　『百塚古墳群発掘調査報告書Ⅰ』鳥取県淀江町教育委員会
萩本　勝・佐古和枝　1984　「須恵器について」『陰田』建設省・米子市教育委員会
土生田純之　1976　『上種東古墳群第３号墳発掘調査報告』鳥取県大栄町教育委員会
土生田純之　1983　「伯耆における横穴式石室の受容」『古文化談叢』７、九州古文化研究会
原田雅弘　1989　「第２節　湖山第１遺跡出土土師器編年案」『湖山第１遺跡』鳥取県教育委員会・財団法人鳥取県教育文化財団
牧本哲雄　1994　「第５章　遺構・遺物の検討　第１節土器編年について」『南谷大山遺跡Ⅱ・南谷29号墳』財団法人鳥取県教育文化財団
牧本哲雄　1999　『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
牧本哲雄ほか　2004　『笠見第３遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
馬渕義則・根鈴智津子　1984　『向野遺跡・後ろ谷遺跡発掘調査報告書』鳥取県大栄町教育委員会
馬渕義則・根鈴智津子　1985a　『上種第５遺跡発掘調査報告』鳥取県大栄町教育委員会
馬渕義則・根鈴智津子　1985b　『上種第６遺跡発掘調査報告』鳥取県大栄町教育委員会
森下哲哉　1998　『福田寺遺跡発掘調査報告書（２次調査）』鳥取県倉吉市教育委員会
山本　清　1960　「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』人文科学編、島根大学

第２節　八橋第８・９遺跡の形成過程と周辺遺跡群

小口英一郎　　北島大輔　　原あづさ

１．はじめに

八橋第８・９遺跡において、６～７世紀代に帰属する遺構として、竪穴住居跡23棟、掘立柱建物跡８棟、土坑10基が検出されている。その他、時期特定はできないものの、ほぼ同時代と想定される柵列・ピット列も認められる。それらは遺構同士の重複関係や土器型式のあり方から数段階の変遷を追うことが可能である。ここでは、各遺構群の変遷と一時期における集落景観を明らかにし、さらに周辺遺跡や古墳群との関係から東伯耆における八橋第８・９遺跡の性格を考察したい。　（小口）

２．八橋第８・９遺跡における古墳時代の集落構成

（１）竪穴住居跡の検討

a. 竪穴住居跡の分類

６～７世紀に位置付けられる竪穴住居跡は23棟検出されているが、その形態や住居構成要素はさまざまである。まず住居の規模について長軸と短軸の長さの比率をみてみると、大きく３つのグループが抽出できた（表79）。最大規模を誇るSI20の床面積は36.9㎡である。これをＡグループとする。次に20～25㎡の床面積にまとまるSI１・２・３・14・15・18・19をＢグループとしたい。19㎡以下のSI５・10・13・21・25がＣグループに該当する。

さらにＡ～Ｃグループのなかで、平面形態、柱穴配置、その他ピットや焼土面といった構成要素から以下の4類の細分が可能である。

１（１）類：平面形態は方形、４本の主柱穴があり、その他に特殊ピット、壁周溝、床溝、焼土面などもみられるもの

１（２）類：上記の属性に加え、主柱穴間に大形のピットを有するもの

２類：平面形態は方形、１～２本の主柱穴があり、その他に壁周溝、床溝、焼土面などもみられるもの

３類：平面形態は方形、主柱穴は不明であり、その他に壁周溝、焼土面などを有するもの

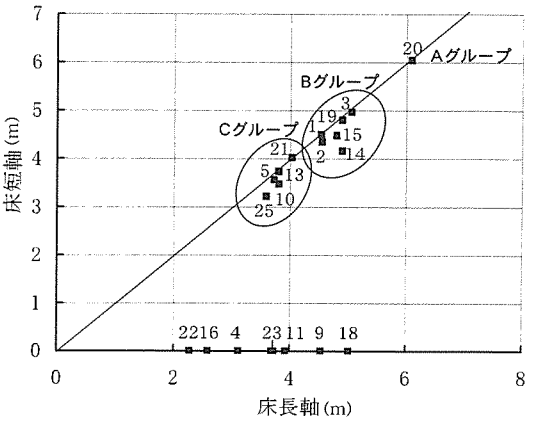
b. 竪穴住居の構造

Ａ１（１）類のSI20の特色として一辺が6.4m×6.3mを有し、本遺跡のなかで最大の床面積を誇る。西壁からＰ３・４に向かって仕切溝が延び、南壁中央に幅１mの床溝が配置され、その間隙に径30cmほどの焼土面を形成している。本遺跡のなかでは、通常南・南西壁中央に浅い皿状ピット、すなわち「特殊ピット」を有する住居跡が多かったが、SI20では特殊ピットは確認できなかった。また、径30cmの焼土面は中心部が橙色、外縁部が赤褐色を帯びる同心円状を呈し、焼土断面においても７cmほどの被熱部が認められたことから、長時間にわたって安定的に火床として使用されたことがわかる。他の住居においても２～３ヶ所の焼土面が確認されているものもみられるが、本住居ほど安定的で、その拡がりが均一であるものは認められない。また、住居の規模に比例して主柱穴の深さが床面から60cm弱と深いことも上屋構造を支える意味で対応関係を示している。本住居からの出土遺物は少ないが、他の住居とは異なった性格の違いを暗示させる。

Ｂ１（１）類は、SI１・２を除き本遺跡の丘陵部に多くが構築されている。平面形態は方形であり、４本の主柱穴を基本的に有し、床面に少なくとも１ヶ所以上の焼土面がみられる。また、壁周溝

がめぐるものも多く、南～南西側に特殊ピットを有する住居が５棟確認されている。いわゆる特殊ピットの性格については、内部から高坏や特殊遺物が出土する事例がみられることを根拠に屋内祭祀に関わる施設とする説（岩崎1998）と、入口部に伴う施設（馬渕・根鈴1985）の大きく二者に分かれる。本遺跡における特殊ピットの形態は径70～80cmの楕円形が多く、深さ5～30cm、断面形状が擂鉢状を呈している。その配置は、南～南西壁中心部を穿つものが多く、仕切溝を伴うものは存在しなかった。遺物の出土状況は、SI15・19で埋土中から土器や砥石などが出土しているが、その他の住居においてピット底面での出土はみられなかった。また、両住居では特殊ピットに続くように硬化面が検出されていることから、居住者の頻繁な移動に繋がりがあるものと思われ、祭祀関係施設とするよりも入口部に伴う施設構造の一部と考えたい。

表79　竪穴住居の長軸・短軸比



Ｂ１（２）類は主柱穴間に大型のピットを配置するSI14・19が該当する。ピットの平面形態は概ね楕円形で径0.7～1.0m、深さ0.4～0.5mと土坑に近い。埋土のあり方も、主柱穴が柱痕を残す状況が確認されるものが多いのに対して、レンズ状の自然堆積が一般的であった。したがって、住居の上屋構造に関するものとするよりも、貯蔵穴などの性格を有するものとして捉えたい。類例として泊村

表80　竪穴住居計測表

住居名	分類	時期	位置(床面標高)	主　軸	平面形態	規　模		主柱穴	焼土面	硬化面	貼床	壁周溝	特殊ピット	仕切溝	備考
						床面積	床長軸×床短軸								
SI1	B1(1)	Ⅷ・Ⅸ	J－9 49.0m	N－30°－W	正方形	20.4㎡	4.53m ×4.50m	4本柱？	床面北寄・北壁に各１個所	なし	あり	なし	なし	なし	須恵器（坏蓋・坏身・高坏・壺・甕・甕）、土師器（脚付埦・甕・甑・竈）、鉄製品、鉄滓、土玉、石玉
SI2	B1(1)	Ⅴ	J－9 48.7m	N－36°－E	正方形	19.8㎡	4.55m ×4.35m	4本柱	床面中央～東寄に７個所	なし	あり	北壁・東壁・南壁（一部）	あり	なし	須恵器（坏蓋・坏身）、土師器（高坏・甕）
SI3	B1(1)	Ⅳ	G－12 50.9m	N－42°－W	正方形	20.4㎡	4.90m ×4.16m	4本柱	なし	なし	なし	東隅	あり	なし	須恵器（坏蓋・坏身・甕）、土師器（甕・高坏・脚付埦・坏・甑・竈）
SI4	C3	Ⅹ	J－12 49.9m	N－36°－W	方形	(6.7㎡)	2.58m ×— m	不明	なし	なし	なし	なし	なし	なし	須恵器（坏蓋・蓋・坏身・高台坏・高坏・壺）、土師器（坏・脚付埦・甕）
SI5	C2	Ⅶ	I－12 51.4m	N－31°－E	正方形	13.2㎡	3.72m ×3.56m	2本柱	床面中央	なし	なし	北・西・南壁（東壁は不明）	なし	なし	須恵器（坏蓋）、土師器（甕・埦）
SI6	C3	Ⅶ	K－13 50.5m	N－40°－E	方形	— ㎡	— m ×— m	不明	なし	なし	なし	東壁	なし	なし	須恵器（坏蓋・坏身・高坏・甑）、土師器（坏・甕・高坏・竈）
SI7	C3	Ⅶ	J－13 51.6m	N－34°－E	方形	(15.4㎡)	3.92m ×— m	4本柱	床面中央	なし	あり	北・西・南壁（東壁は不明）	なし	あり	須恵器（高坏）、土師器（甕） ただしSI26に帰属する可能性あり
SI8	C3	Ⅳ	K－13 50.4m	N－41°－E	方形	— ㎡	— m ×— m	不明	床面中央	なし	なし	なし	なし	なし	土師器（甕）
SI9	C3	Ⅶ	I－13 51.3m	N－41°－W	方形	(20.6㎡)	4.54m ×— m	不明	床面中央	なし	あり	北・西・東壁（南壁は不明）	なし	なし	須恵器（坏蓋・坏身・高坏）、土師器（坏・高坏・甕・竈）
SI10	C3	Ⅷ・Ⅸ	H－9 50.2m	N－31°－W	隅丸方形	13.2㎡	3.80m ×3.48m	不明	なし	なし	なし	北・東・西壁	なし	なし	須恵器（坏蓋・坏身・高坏）、土師器（甕）
SI11	－	Ⅰ	F－14 50.2m	N－40°－W	隅丸方形	(16.5㎡)	4.06m ×— m	4本柱	なし	なし	なし	なし	なし	なし	弥生土器（甕）
SI12	－	Ⅰ	H－8 49.7m	－	円形	9.2㎡	3.52m ×3.30m	不明	床面東寄・西寄の各１個所	なし	あり	北・東・南壁	なし	なし	弥生土器（甕・器台）
SI13	C2	Ⅵ	I－14 52.1m	N－24°－E	正方形	(13.8㎡)	3.72m ×— m	2本柱	床面中央に３個所	あり	なし	西・東・南壁（北壁は不明）	なし	なし	須恵器（坏蓋）、土師器（甕・甑）
SI14	B1(2)	Ⅴ	G－13・14 51.3m	N－21°－E	正方形	23.5㎡	4.90m ×4.80m	4本柱	床面中央と北寄に計６個所	なし	なし	全周（北西隅は間欠）	あり（３個所）	あり	須恵器（坏蓋・坏身・甕・甑・横瓶）、土師器（甕・壺・高坏・甑・竈）
SI15	B1(2)	Ⅴ	G－13 51.4m	N－25°－E	正方形	21.5㎡	4.80m ×4.48m	4本柱	床面中央	なし	なし	北壁	あり	なし	須恵器（坏蓋）、土師器（坏）
SI16	C3	Ⅹ	J－14 52.2m	N－39°－E	方形	(9.7㎡)	3.11m ×— m	不明	なし	なし	あり	西壁	なし	なし	須恵器（高台坏）
SI17	－	Ⅱ	I－14 51.9m	N－26°－E	隅丸方形	26.6㎡	5.18m ×5.14m	4本柱	床面北寄に１個所	なし	あり	全周（北東隅・南東隅間欠）	なし	なし	弥生土器（甕）
SI18	B1(1)	Ⅵ	G－14 51.3m	N－41°－E	正方形	(25.2㎡)	5.02m ×— m	4本柱	なし	なし	なし	北・東・南壁（西壁は不明）	なし	なし	土師器（高坏）
SI19	B1(1)	Ⅳ	G－15 51.2m	N－23°－E	隅丸方形	25.2㎡	5.06m ×4.97m	4本柱	床面中央	あり	なし	南壁のみ	あり	なし	須恵器（坏身・甑）、土師器（埦・甕）
SI20	A1(1)	Ⅴ	H－14 51.7m	N－31°－E	正方形	36.8㎡	6.09m ×6.05m	4本柱	床面中央・東寄・南壁各１個所	なし	なし	ほぼ全周（南壁・東壁間欠）	なし	あり	須恵器（坏蓋・坏身・甕）、土師器（甕）
SI21	C2	Ⅶ	L－8・9 48.1m	N－32°－W	正方形	16.2㎡	4.03m ×4.02m	2本柱	床面中央	なし	あり	北西隅	なし	なし	須恵器（甑）、土師器（埦・甕）
SI22	C3	Ⅹ	J－11・12 49.8m	N－35°－W	方形	(5.2㎡)	2.27m ×— m	不明	なし	なし	あり	なし	なし	なし	須恵器（坏蓋・坏身・高台坏・高坏）、土師器（甕・高坏）
SI23	C3	不明	J－13 51.3m	N－18°－W	方形	(13.54㎡)	3.68m ×— m	不明	なし	なし	なし	北・東・南壁（西壁は不明）	なし	なし	－
SI24	C3	不明	J－13 51.6m	N－40°－W	方形	— ㎡	— m ×— m	不明	なし	なし	なし	北・東壁（南・西壁は不明）	なし	なし	－
SI25	C3	Ⅶ	E－12 49.7m	N－19°－E	正方形	11.5㎡	3.58m ×3.22m	2本柱	床面中央	あり	なし	全周	なし	なし	須恵器（横瓶）、土師器（甕・脚付埦）
SI26	C3	不明	J－13 51.7m	N－25°－E	方形	—㎡	— m ×— m	4本柱	なし	なし	なし	東壁	なし	なし	－

石脇第３遺跡森末地区SI02があり、その性格について埋土や形状から屋内貯蔵穴の可能性が指摘されている（牧本1998）。

Ｃグループは、斜面上の立地や撹乱などにより一部壁が削平され、正確な面積や形態が不明なものも含んでいる。また明確に１類といえるものは検出されなかった。Ｃ２類はSI５・13・21・25が該当し、主柱穴が１～２本のものが多いことが特徴の１つとなっている。床面中心部には焼土面がみられ、SI13・25では硬化面を形成していることから、使用頻度が高く、比較的長期間の居住活動を伴った結果によるものと思われる。SI６・８・22のなかで、被熱痕跡が認められたのはSI８のみであり、いずれも柱穴として捉えられるピットは検出されなかった。

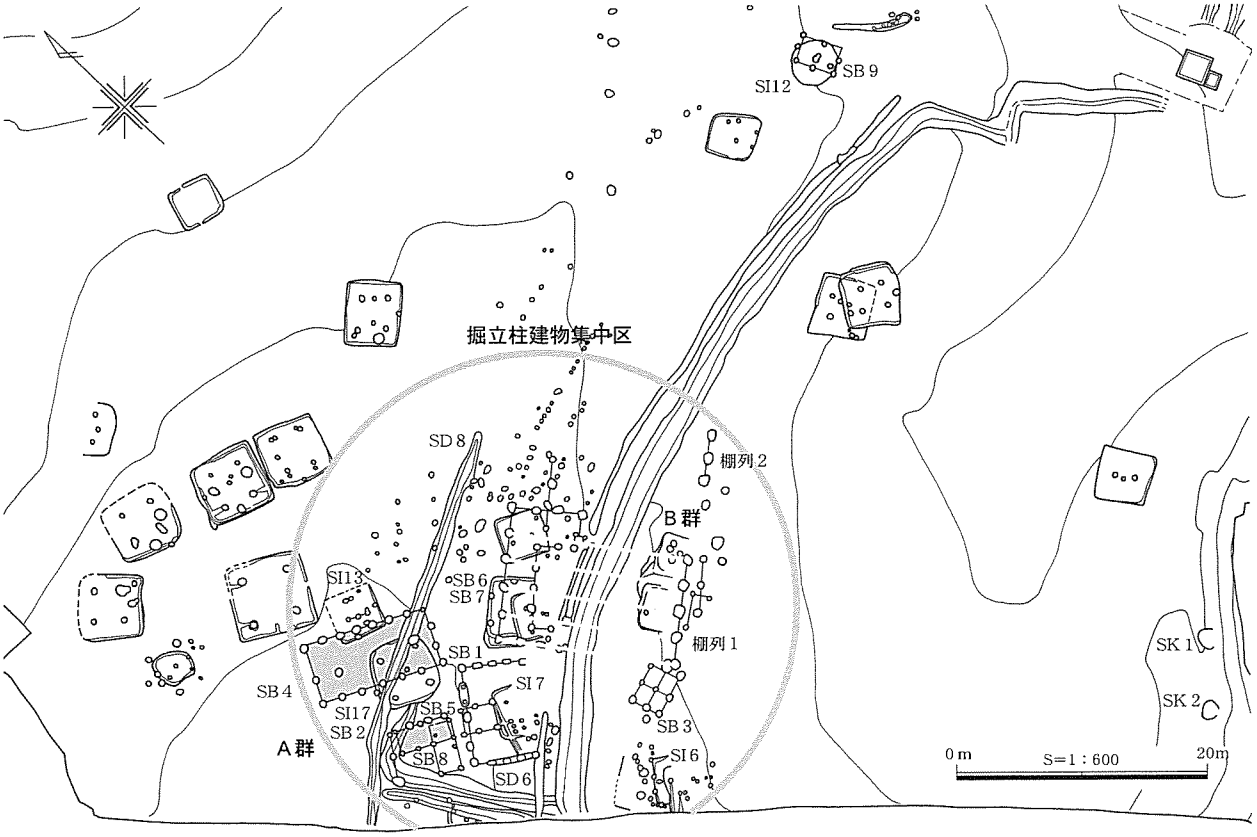
大型住居であるＡ類を除き、本遺跡においてはＢ・Ｃ類がその主要な構造物となる。このなかで、Ｂ類は丘陵北西部にほぼ主軸を同じくしてまとまりを呈している。さらに、丘陵部と斜面部に構築されるＢ類とＣ類が対となっている時期もみられ、集落における集団構成を考える上で興味深い現象である。（小口）

（２）掘立柱建物跡の検討

a. 掘立柱建物の分類

ここでは、八橋第８・９遺跡における古墳時代以降の掘立柱建物について検討してみたい。

弥生時代後期のSB９を除く８棟の掘立柱建物が築かれた範囲はSB４を北端に調査区西側の丘陵上の直径約40mの円内に納まる。掘立柱建物の集中区域（以降　集中区）内には異なった主軸方向を持つものや、住居跡の重複関係を有するものがあり、いくつかの時期・グループに分けることができる。そこで集中区において検出した掘立柱建物と、それらに関係があると推測される柵列などについて、重複関係や建物の方向を考慮しながら検討していくこととする。



第150図　八橋第８・９遺跡の掘立柱建物群

まず、集中区内の掘立柱建物は主軸方向からＡ・Ｂ群とその他の建物の3つに大別できる。

Ａ群：主軸方向がＮ－62～65°－Ｗ、丘陵上で最も高い平坦部に位置し、SB２・４が該当する。

Ｂ群：主軸方向がＮ－50～55°－Ｅ、Ａ群よりも東側の緩斜面上に位置する。SB６・７と柵列１・２は主軸をほぼ同じくしていることから一連のものと推定される。

その他の建物：SB１・３・５・８・９が該当する。SB３は南谷部に面する緩斜面上に位置する。Ａ・Ｂ群に属さない建物でSB１・３・５・８・９が該当する。SB３は丘陵よりも南西に下がる谷に面した緩斜面上に位置し、集中区から50m東にはSB９がある。

b. 掘立柱建物の構造

Ａ群　SB４は床面積が46㎡あり、本遺跡における大型建物に属する。隣接するSB２は床面積が7.6㎡の小型建物である。SB４は、SI17（弥生時代終末～古墳時代初期：八橋Ⅱ期）とSI13（古墳時代後期：八橋Ⅵ期）の埋土を削って構築されている。SB４ピット内からは、肩部にカキメが入る須恵器の瓶などもあるが混入の可能性が強い。また、SB４－SK１出土遺物には、車輪状当て具痕のある須恵器甕のように古墳時代後期～平安時代にあたると推定される遺物もあり、周辺住居跡との切り合い関係から見ても構築時期は古墳時代後期以降の遺構と想定されよう。また、Ａ群の建物はSI13・17廃絶後からSD６・８が作られる以前の間に存続していたと推定される。

SB４とSB２は、桁行の一方（北東辺）に柱数が多く、それぞれ同様の配列となっている。類例は東伯町森藤第１・２遺跡（大賀1987）の掘立柱建物30号（北西辺の柱穴が１基多い）にも認められる（第151図①）。このような構造を持つ原因として、自然環境や建物利用などの理由があげられる。前者の場合、丘陵上に立地する集中区は海からの風を強く受けるため、風が当たる面を補強する目的があったと想定される。後者は、柱穴が多い側に出入口があり、人が移動する重圧を支えるために一部が束柱として機能した可能性が推測される。そのほかに、SB４は他の掘立柱建物にはない特徴が見られる。北東辺に沿って直線的に並ぶ３つの柱穴列は、建物に構造物（部分的な庇・階段・縁など）が付属する可能性があろう。SK１・２は大きな面積の床を支える束柱か、もしくは屋根を支える屋内棟持柱になる可能性が想定される。このような身舎内に２本の柱穴を持つプランは倉吉市不入岡遺跡群（根鈴1996）のSB36にもみられる（第151図②）。

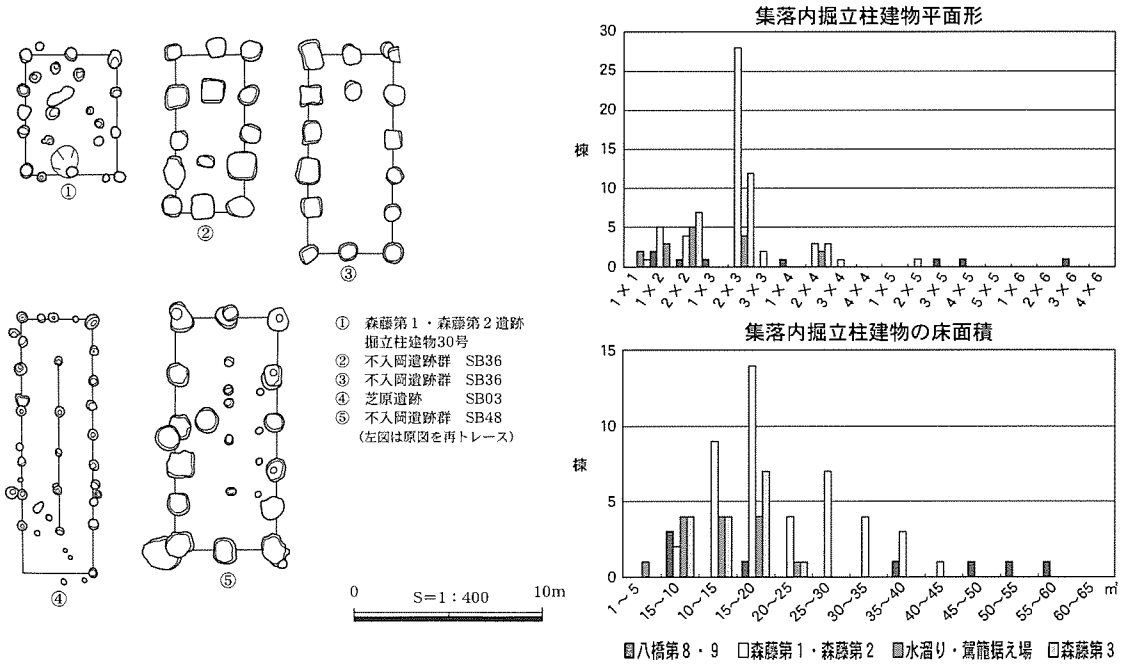
Ｂ群　SB６は南東辺が一部削平を受けており、床面積が57.5㎡の本遺跡で最も大きな建物である。SB７は現状ではコの字状を呈しており南東辺は削平されているが、SB６と柱筋を同じくしていた可能性が想定される。１間×４間の場合は床面積10.4㎡、南東辺をSB６と同じくした２間×４間の場合は床面積19.5㎡となる。SB６・７の構築時期はSI５とSI９・23・24を掘り込んで構築されているため古墳時代後期以降、さらにSB６と主軸・柱穴間距離が近似する柵列１は、古墳時代終末期の遺構とみられるSI４・22を壊して構築されていることから、これらＢ群は古墳時代終末期以降に建てられたと推定される。存続期間・廃絶時期を知る資料は確認されなかった。

SB６・７は柱穴の平面形・大きさ・中心間の距離が違うため、それぞれ独立した建物のようにも見える。両者は一定期間内に拡張・建替が行われた新旧関係にあった可能性が推測される。また、SB６・７を１つの建物とするのも一案であろう。SB６・７は主軸を同じくして「入れ子」状になっており、①SB７を身舎または建物本体として外周柱穴列（SB６）が巡っていたと推定すると、庇・軒支柱・階段・縁などの構造を持つ建物、②SB６を建物本体としてSB７が床を支える機能の柱穴列であったとすると束柱・床束建物、③屋根を支える機能の柱穴列であったとするならば、島根県芝

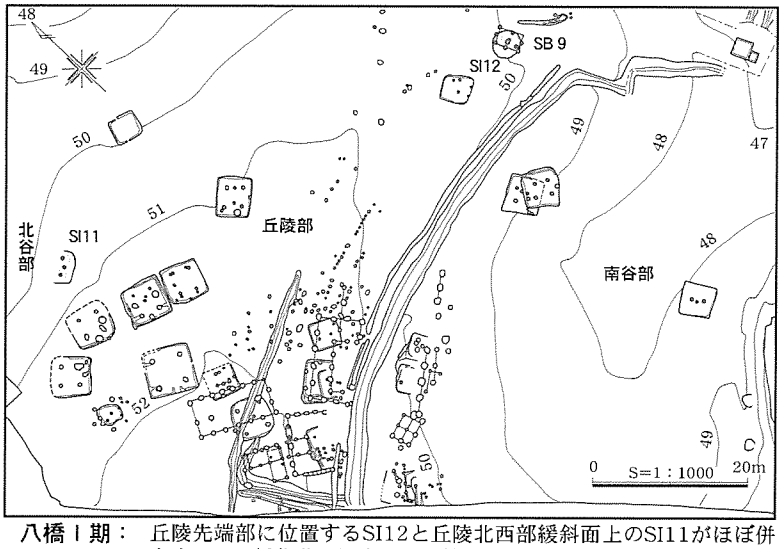
原遺跡（吾郷ほか1989）SB３（第151図④）にもみられるような屋内棟持柱を持った建物の可能性もあろう。ただし、外側にあるSB６の柱穴の方がしっかりとした掘り方を持つことに留意したい。①の構造を持つ場合、多くの外周柱穴列は身舎・建物本体の柱穴と比べて小規模もしくは同規模であり（山中2003）構造的に矛盾する。束柱建物の場合はさらにその差が大きくなる。②・③においては柱筋と柱穴の並びが沿わない。特に③の屋内棟持柱は梁方向の柱筋からほぼ等間隔に配置されることが多く、SB６・７の場合はその可能性が低いといえよう。また柵列１・２とSB６・７とは主軸方向をほぼ同じくし、SB６の桁行方向と柵列１の柱穴中心間の距離は約２ｍと近似することから、関連のある遺構と推測される。

その他の建物　SB１は床面積57.5㎡を測り、本遺跡の中で３番目に大きな建物である。一部の柱穴は布堀りで、現状ではコの字状を呈しているが、南東辺は削平を受けた可能性が想定される。SB３は床面積7.5㎡の小型の総柱建物である。SB５は床面積5.3㎡、SB８は床面積5.8㎡である。これらは主軸方向が異なり柱穴の配列にも統一性がなく、関連するとは想定できない。

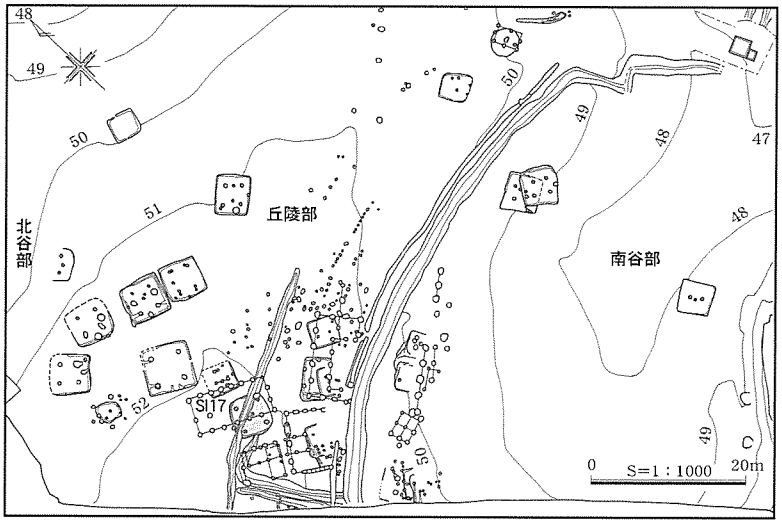
SB１はSI26の遺構を壊して構築されている。布掘りの柱穴から出土した甑の把手は混入の可能性もあるため、遺物から建物の時期やSI７・26との関係は判断しがたい。布掘り柱穴は建物の北側に１ヶ所、西側に１ヶ所ある。どちらも布掘り下底面から更に柱据付穴を１段掘り下げる形態をとり、中山分類Ⅱ類もしくはⅢ類に該当しよう（中山2003）。北側は２ヶ所の柱据付穴があり西側は３ヶ所の柱据付穴がある。部分的な布堀り柱穴であること、建物内部に上部を支えるような柱穴が見られないことなどから壁立建物の可能性が想定されよう。また、北側の柱穴列の一部に柱間隔が若干広くなっており、これが出入口に当たると推測すると平入りの構造であった可能性もあろう。SB３は２間×２間の高床倉庫的な建物と推定される。その理由として柱穴中心間の距離が約1.4mと本遺跡内では柱間隔が狭い建物であること、建物の中心に位置する柱穴は他よりも若干浅く小型であることから、束柱の可能性が挙げられる。柱穴出土の須恵器の坏身からSI６とほぼ同時期の可能性が窺える。SB



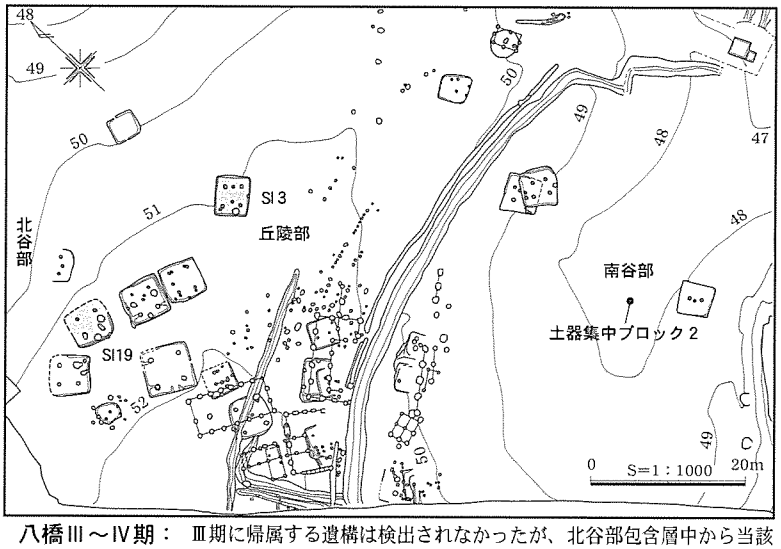
第151図　周辺地域の掘立柱建物集成



八橋Ⅰ期： 丘陵先端部に位置するSI12と丘陵北西部緩斜面上のSI11がほぼ併存する。八橋集落の居住活動が始まる時期である。



八橋Ⅱ期： 丘陵平坦部のほぼ中心に位置するSI17が該当する。本期をもって八橋集落はしばらくの間、断絶する。



八橋Ⅲ～Ⅳ期： Ⅲ期に帰属する遺構は検出されなかったが、北谷部包含層中から当該期の土器が散見される。Ⅳ期に至り、丘陵平坦面に位置するSI３・19が構築される。八橋集落において居住活動が再開された時期である。

第152図　八橋第８・９遺跡における遺構変遷図（１）

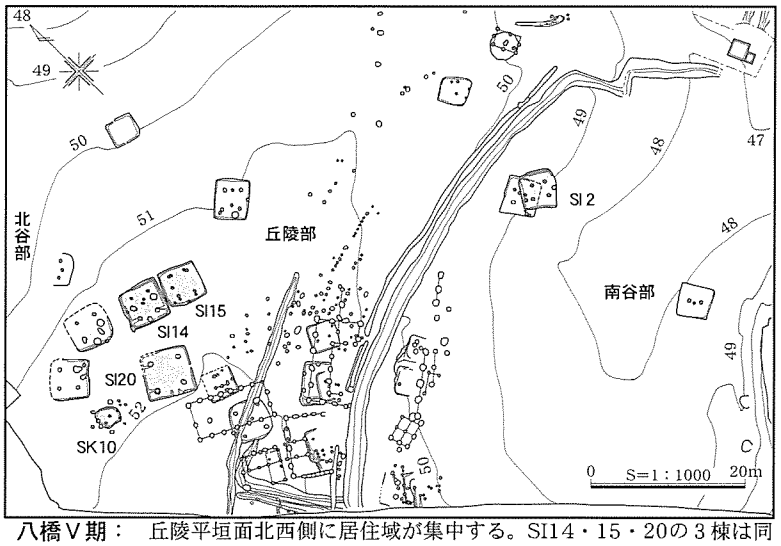
５はSB１の北辺と交わり、SB８もSB２とほぼ直交するが、出土遺物や住居跡など時期の目安になる遺構との切り合い関係がないため、時期や性格は判断しがたい。

c. 周辺遺跡との比較

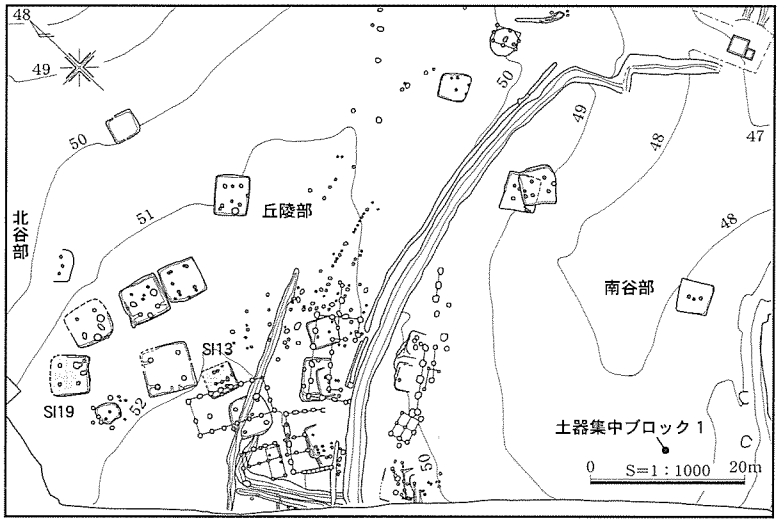
本遺跡の掘立柱建物の性格について、出土遺物、主軸、周辺遺跡の掘立柱建物との比較しながら若干の検討を行いたい。まず、掘立柱建物からの出土遺物は合計８点とわずかである。その中から言えることは、①墨書土器や円面硯など官衙的色彩を見せる遺物が出土していない。②瓦など寺院的な色彩を見せるものは出土していない。③遺物出土量から見て大勢の人が生活をしていたとは推定しがたい。主軸方向については、Ａ・Ｂ・Ｃ群とも真北は意識していない。主軸方向が分かれる理由として、①各群が構築された時期ごとに意識する方向が違っていた、②緩斜面上という地形的原因から等高線に沿うような形で構築した、が推測される。

周辺遺跡の掘立柱建物との関係については、森藤第１・２・３遺跡、水溜り・駕籠据え場遺跡（大賀1988）などの東伯町内の古墳時代から７世紀末～９世紀の掘立柱建物とを比較した（第151図）。

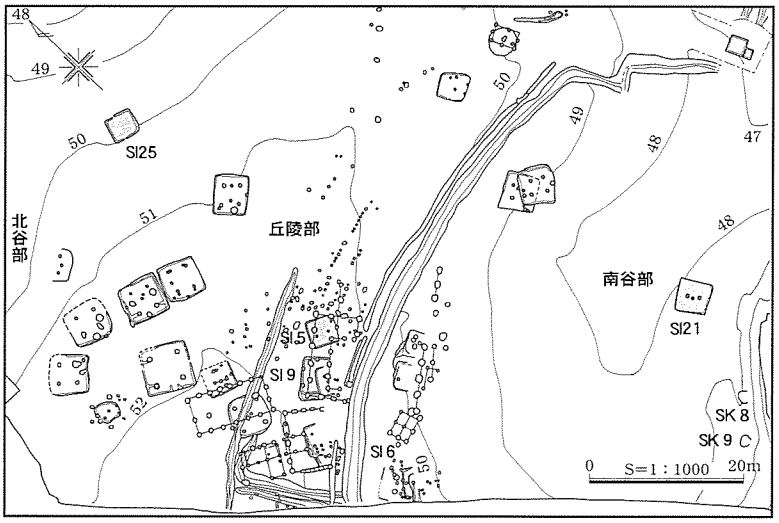
建物の規模は、森藤第１・２遺跡では１間×２間や２間×２間よりも２間×３間の建物が著しく多い。床面積は15～20㎡が最も多く、最大床面積は40～45㎡である。森藤第３遺跡の場合も同様の傾向がみられ、２間×２間以上に２間×３間



八橋Ⅴ期：　丘陵平垣面北西側に居住域が集中する。SI14・15・20の３棟は同時併存したのではなく、出土土器の検討や住居の立地から、SI15→SI14→SI20と変遷していったものと考えられる。
また、南谷部を望むSI２がSI20と併存する。



八橋Ⅵ期：　引き続き丘陵平垣面に住居址SI13・19が構築される。住居形態Ａ・Ｂ類に加え、新たにＣ類が出現し、Ｂ類とＣ類が共存関係を示している。



八橋Ⅶ期：　Ⅶに至り、居住域に変化が生じる。SI５・６・９・21は、南谷部を望む緩斜面に位置し、南谷部の利用が密接に関わっていたことを推測させる。

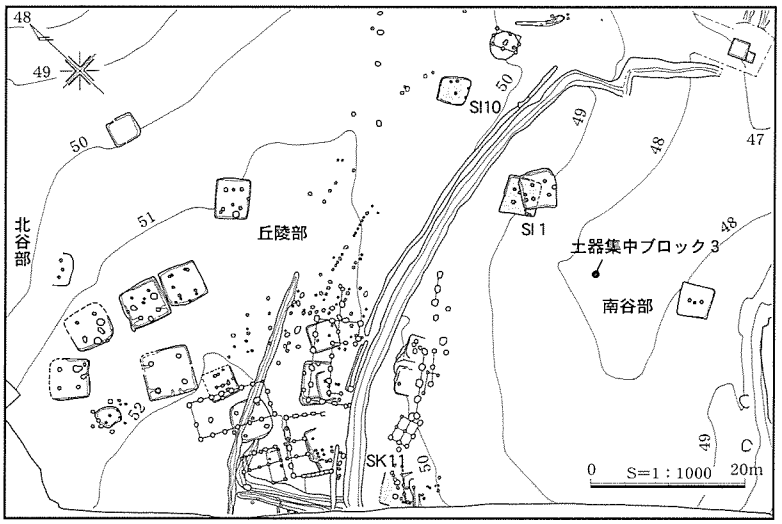
第153図　八橋第８・９遺跡における遺構変遷図（２）

が多く見られる。床面積も15～20㎡多く、最大床面積は25～30㎡である。水溜り・駕籠据え場遺跡は小規模な建物が多く、床面積も30㎡を超えるものはない。八橋第８・９遺跡の場合は、平面形では３間×５間、４間×５間、３間×６間、床面積では45～60㎡の他の遺跡にはみられない規模の建物である。そして、これらの建物は比較的に柱筋の通りがよく、柱の掘り方の形状が大きく異なるものはない。したがって、本遺跡の掘立柱建物は古墳時代後期以降、大きく２時期に分かれて構築されており、Ａ群とＢ群との時期は、重複する住居跡との比較から若干Ｂ群が新しいと思われる。それまでの竪穴住居を中心とした集落とは異なった性格を有した可能性が窺えるのである。　（原）

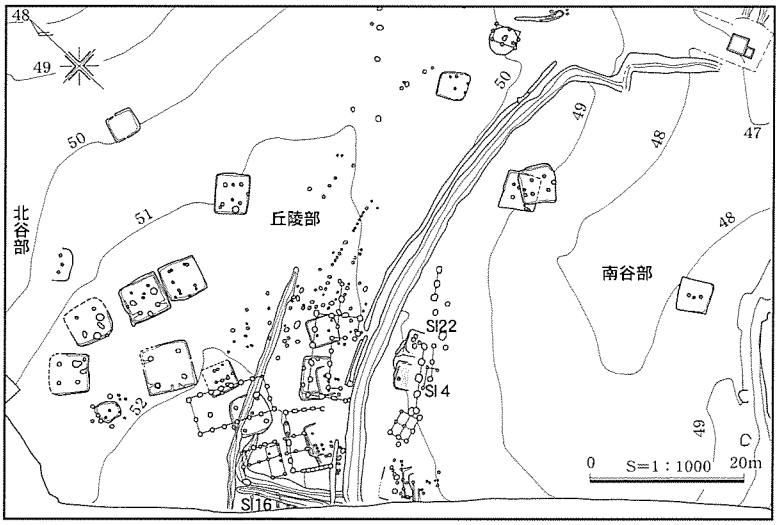
３．遺構群の変遷

八橋第８・９遺跡の遺構群は、丘陵部を主要な居住域として分布しているが、さらに細かくみていくと、①丘陵平坦面、②北西緩斜面、③南緩斜面、④南谷部南側の斜面の大きく４ブロックに分けることができる。住居跡群と掘立柱建物跡群の検討と、前節の土器編年を踏まえ同時存在が予想される遺構群の変遷を追ってみたい。

Ⅰ期　丘陵北西部と先端部に位置するSI11・12によって、本遺跡の居住活動と北谷部の包含層が形成され始める。SI11は隅丸方形、SI12は円形を呈し、いずれも弥生時代後期後葉（清水編年Ⅴ－３様式）に比



八橋Ⅷ～Ⅸ期：　丘陵平坦部から丘陵先端と南谷部を望む緩斜面へ居住域が変化している。SI１はⅤ期に帰属するSI２の埋土上に貼床を施して構築。住居形態Ｂ類とＣ類が一定の距離を置きながら併存する。



八橋Ⅹ期：　Ⅹ期は古・新期の２細分が可能であり、SI22は古期、SI４・16は新期に帰属する。以後、八橋集落の構成は掘立柱建物群へと変化し、丘陵平坦部の土地利用が再開されるのである。

第154図　八橋第８・９遺跡における遺構変遷図（３）

定される。ただし、出土土器と住居形態から後者がやや古相を帯びるかもしれない。

また、棟持柱を特徴とするSB９がSI12廃絶後に構築される。

Ⅱ期　丘陵平坦面に位置するSI17が該当する。平面形態は隅丸方形を呈し、主柱穴は４本、中央ピットがみられる。古墳時代前期初頭に該当し、この住居が廃絶されてから、古墳時代中期末までしばらくの間八橋集落は途絶える。

Ⅲ～Ⅳ期　Ⅲ期に伴う遺構は確認されていないが、南谷部L10cグリッドからまとまって遺物が出土している。Ⅳ期にはSI３・19が該当しよう。八橋集落の居住活動が再開する時期である。

Ⅴ期　本格的な居住活動が丘陵平坦面において認められる第１の画期である。土器編年に基づけば、古段階にSI15、SK10、中段階にSI14、新段階にSI２・20が該当する。SI20は住居形態Ａ１（１）類、SI２・15はＢ１（１）類、SI14はＢ１（２）類となり、一時期１棟の単位として消費活動を行っていた様相が窺える。ところで、SI14の埋土上層から多量の遺物が出土しているが、住居廃絶後に周辺の居住集団が廃棄したことが予測され、その有力候補としてSI20の居住者が考えられよう。また、SI20周辺の住居は軸線をほぼ同じくしている点も興味深い。いずれにしても、八橋集落の営まれた継続時期の中でも１つの画期として位置付けられる。

Ⅵ期　丘陵北西部に位置するSI13・18が該当する。いずれも撹乱により平面形態が不明瞭で、遺物も少ないが、引き続き丘陵平坦面を占地している。当該期の特色として、Ｃ類に帰属するSI13が現れること、一時期にＢ１（１）類とＣ類が居住単位となって消費活動を行っていた可能性があろう。一方、南谷部では土器集中ブロック１が形成され、谷部の底面付近に活動が及んでいたことを窺わせる。

Ⅶ期　丘陵南側のSI５・６・９、南谷部の南側斜面にみられるSI21、さらに丘陵北部の緩斜面上に単独に位置するSI25が帰属しよう。SI25を除き、南谷部を望む場所が選地され、生産活動や消費活動を行う上で谷部の利用が顕著になったことを示す。本時期の特色として住居形態Ｃ類が多くなることであり、家屋構造の小型化は、掘立柱建物の構築や居住世帯の変化なども含めて検討が必要に

なろう。また、本遺跡の中で唯一谷部の南斜面に位置するSI21は、比較的急斜面上に貼床を施して構築されている。本住居に関連して15～17m南西に２基の袋状土坑がみられるが、丘陵部には掘立柱建物が配置されるのに対し、本住居周辺には掘立柱建物が存在しないことも貯蔵施設と居住施設の構造と立地を示す事例として興味深い。

Ⅷ～Ⅸ期　南谷部に面するSI１・10、SK11が該当する。前者はSI２の埋土上に部分的な貼床を施して上屋を構築していることから、埋土形成途中である窪地を利用したことが窺える。また、本遺跡で重複関係を有する他の住居としてSI６・８、SI９・23・24があるが、住居跡総体としてみれば少数派である。あえて、構築場所を重ねる背景として、同系居住集団の可能性が指摘できよう。ところで、SI１・10は約15mの距離を置いて立地するが、Ⅵ期からみられる住居構造の異なるＢ類とＣ類が併存する点は注目される。

Ⅹ期　南谷部に面するSI４・22、丘陵平坦面のSI16が認められる。前節の編年案から本期は古段階のSI22と新段階のSI４・16に分かれる。SI４・22は斜面部に立地しているため、南壁が流出・削平されてしまい住居構造は不明な点が多い。しかしながら、北側の壁などの残存状況から考えるとＣ類の小型住居に帰属するものと思われる。谷部の利用が顕著になることは、ほぼ同時期に比定される土器集中ブロック３の存在からも窺うことができる。

その後、八橋集落ではSI13・17とSI４・22を切っている掘立柱建物や柵列などの存在から、Ａ群、Ｂ群と主軸を異にした大型掘立柱建物群が構築された可能性が高い。７世紀後半代の竪穴住居の構築時期とほぼ入れ替わる点から、律令期において八橋集落の性格が大きく変化した第2の画期となった可能性が想定されるのである。　（小口）

表81　東伯耆における古墳時代後期～終末期の遺跡動向

土器編年			八橋第８・９遺跡				東伯耆西部（旧八橋郡）		東伯耆中部（旧久米郡）		東伯耆西部（旧河村郡）
八橋編年		陶邑編年	住居跡群	掘立柱建物	南谷部包含層	北谷部包含層	赤碕町・東伯町	大栄町・北条町	倉吉市	関金町・三朝町	泊村・羽合町・東郷町
八橋Ⅲ期		TK47					※町名を付さない場合は東伯町 赤碕町別所５号墳周溝Ａ地点	※町名を付さない場合は大栄町 上種第６遺跡６号住居 上種第６遺跡７号住居	夏谷１号大壁住居状遺構	※町名を付さない場合は関金町 三朝町丸山遺跡SX06（Ⅳ期？）	東郷町埴見中ノ谷窯跡群（～Ⅵ期）
八橋Ⅳ期		MT15					赤碕町別所19号墳第２埋葬施設	上種第５遺跡土器溜 上種第６遺跡12号住居	夏谷18号住居	三朝町丸山遺跡４号墳内土壙 三朝町丸山遺跡SX02	東郷町片平４号墳（～Ⅴ期中）
八橋Ⅴ期	古	TK10					赤碕町別所15号墳主体部 赤碕町別所15号墳周溝内埋葬施設 赤崎町福留２号墳周溝		（中尾１号墳周溝内埋葬）		羽合町長瀬高浜SX02第５埋葬施設 東郷町片平２号墳
	中						井図地中ソネ遺跡SI18		（芝栗２号墳）	三朝町丸山２号墳周溝内埋葬	
	新	MT85					（三保６号墳）	上種東３号墳石室内 上種西14号墳第２主体部	家ノ後口１号墳（～Ⅵ期）	鳥越山１号窯跡（～Ⅵ期）	羽合町長瀬高浜SX68
八橋Ⅵ期		TK43					大高野５号墳墳丘内	上種第６遺跡20号住居 上種西14号墳第１主体部Ｂ群 上種西15号墳（～Ⅶ期） 大谷11号墳（～Ⅷ期）	後口野１号墳１号主体部 後口野１号墳２号主体部 後口野１号墳３号埋葬施設 （効家平２号墳）	（鳥越山４号窯跡）	羽合町長瀬高浜11BSK01 東郷町片平５号墳（～Ⅶ期） 羽合町長瀬高浜10ESK10（～Ⅶ期）
八橋Ⅶ期		TK209					大高野３号墳西側周溝	上種第６遺跡25号住居 北条町曲岡遺跡（～Ⅹ期） 北条町殿屋敷遺跡（～Ⅹ期）	野口１号墳・服部11号墳 東烏ヶ尾古墳玄室内 山際１号墳（～Ⅷ期）・同２号竇棺 服部36号墳（～Ⅷ期）	鳥越山３号窯跡（～Ⅶ期） 大坪塚古墳（～Ⅶ期）	羽合町長瀬高浜24号墳第２埋葬 同第２埋葬施設・第５埋葬施設 羽合町長瀬高浜SX02第２埋葬施設 羽合町長瀬高浜８号墳（～Ⅶ期）
八橋Ⅷ期		TK217					笠見第２遺跡１号墳石室内 大高野２号墳墳丘 下斎尾１号遺跡第３トレンチ （大高野１号墳・塚本７号墳）	上種第６遺跡22号住居 大谷３号墳（～Ⅸ期）	一反半田２号墳・大宮古墳石室内 長谷２号墳２号埋葬施設 効家平１号墳（～Ⅸ期） 家ノ後口２号墳（～Ⅸ期）		羽合町橋津25号墳 羽合町長瀬高浜81号墳第２埋葬施設
八橋Ⅸ期	古	TK46					代代１号墳周溝・第２土壙墓 塚本８号墳土坑・（同前提部）		両長谷８号墳結合須恵器 （家ノ後口２号墳） 山際２号墳・一反半田３号墳		泊村石脇第３遺跡繰り地区SX06
	新	TK48		Ⅹ期の遺構埋没後か			井図地頭遺跡SK33 井図地頭遺跡SI３	上種第５遺跡SI９ 向野遺跡・大谷10号墳（～Ⅹ期） 北条町曲宮前遺跡（～Ⅹ期）	取木３号墳 大御堂廃寺SE01（～Ⅹ期古）		羽合町長瀬高16HSWGSK01 泊村石脇第３遺跡森末地区SS05 （～Ⅹ期古）
八橋Ⅹ期	古	MT21					井図地頭遺跡SI４ 井図地頭遺跡SD４		福田寺遺跡２次１号土坑		羽合町長瀬高浜SXA07木棺墓 （園３号墳） 泊村石脇第３遺跡森末地区SK13
	新						大高野遺跡 下斎尾１号遺跡以後遺物・遺構増加		（両長谷３号墳）		東郷町別所22号墳

４．八橋第８・９遺跡と周辺遺跡群（予察）

第１節で提示した八橋編年をもとに、東伯耆における各種遺跡の動向を表81に示した。

八橋第８・９遺跡と同じ丘陵の先端部には、全長62mの八橋狐塚古墳（前方後円墳）が前方部を日本海に向けて築造されている。隣接する別所古墳群（赤碕町）と同じく、周辺には十分な可耕地に乏しいため、むしろ海上交通や漁労活動を多分に意識した立地とみてよい。築造年代の詳細は不明だが、著しく小型化・変容した竪穴系横口式石室が前方部に構築されていることや、東くびれ部出土の高坏から、八橋Ⅶ～Ⅷ期の築造を想定しておきたい。そうすると、八橋第８・９遺跡の存続時期と重複した公算が高い。八橋第８・９遺跡は１時期に数棟の竪穴住居しか存在しなかったとみられ、少なくとも古墳時代の段階では首長居館とは考えにくく、小規模な一般集落と推定される。八橋狐塚古墳の築造に同集落の人々が動員された可能性も十分にあろう。その一方で、遺跡の近隣には後期古墳の存在は知られていない。自らは古墳を築かなかったのだろうか。この問いに迫るためにも、南谷部の鉄鏃や円筒埴輪片、あるいは北谷部の子持壺など、集落での出土例に乏しい特殊遺物の評価が今後の課題となろう。

さて、八橋Ⅸ～Ⅹ期（７世紀後半～末）になると、地域社会は大きく変貌を遂げる。①須恵器に新たな律令的器種（高台坏など）が参入する、②一部の遺跡で近畿系の暗文精製土師器が局地的に流入する、③郡衙と目される大高野遺跡や斎尾廃寺など東伯町斎尾・大高野地区での遺構整備が活発化する、④竪穴住居主体の遺跡のほか、大栄町向野遺跡のように掘立柱建物主体の遺跡が現れる（君嶋2003)、などの点である。また、国府・国分寺が設置される東伯耆中部（旧久米郡）の倉吉市では、新来文物の受容がさらにドラスティックに進行する。例えば、倉吉市福田寺遺跡２次調査１号土坑は八橋Ⅹ期古段階の良好な一括資料だが、藤原宮西方官衙井戸 SE8470（飛鳥Ⅳ）のものに酷似した近畿系土師器がまとまって共伴した（森下1997)。年輪年代測定の結果、SE8470の井戸枠の伐採年代682年と測定され、飛鳥Ⅳの年代はA.D.680～690年を中心とすると考えられる（相原1997)。そうすると、八橋Ⅹ期古段階の暦年代も７世紀後葉を中心とすると考えてよかろう。いずれにせよ、Ⅹ期以降顕著となる地域社会の変貌やそこにみられる新来文物の受容格差は、それ以前の首長層の政治的動向とも密接に関わっていたに違いない。

また、第４章第４節でも述べたように、遺跡の周辺では八橋Ⅹ期、すなわち７世紀後半以降に遺跡周辺で鉄生産活動が活発化した可能性がある。そうして考えると、八橋Ⅹ期以降、生産面においても新たな画期を設定できるかもしれない。基礎的データの蓄積と生産システムの解明を待ちたい。（北島）

５．おわりに

以上、八橋集落の構成と変遷を概観し、周辺遺跡群との関わりについて予察を行った。本集落の特色として、①丘陵部の北西斜面側から始まった居住活動が、時期が下るにつれ南谷部への進出が著しくなること、②住居形態もＢ類からＣ類といった小型化への変化がみられること、③一時期にほぼ２～４棟の居住集団が５～20mの距離を置きながら居住域を形成・移動していったこと、④8世紀に至り大型の掘立柱建物群が構築される、にまとめることができる。

当該期の集落として、東伯耆では、上種第５・６遺跡、西伯耆では百塚第１遺跡や青木遺跡、因幡では湖山第１遺跡、秋里遺跡が知られている。この中で、比較的集落の全体像が把握されている西伯耆の百塚第１遺跡においては、細分された土器編年に基づき集落構成の変遷が検討されている（中山

1989)。そこでは、19棟の竪穴住居が一時期４～５棟単位に分かれ同一場所に占地し、広場を囲みながら４期にわたって継続的な居住活動を行っている。つまり、占地場所の固定性が百塚第１遺跡では強く認められるのであるが、逆に八橋集落においては２～４棟の単位集団が居住域を固定するのではなく、丘陵平坦面や緩斜面といった場所に移動を繰り返しながら集落経営を行っていた状況を読みとることができる。

両者の性格の違いは、百塚遺跡群と近接する後期の群集墳である百塚古墳群とを総体として捉える必要がある。100基以上を数える群集墳の被葬者集落である百塚遺跡群はむしろ、当該地域における拠点的集落の位置付けができよう。一方、八橋集落の周辺地域では、むしろ全長62mの前方後円墳である八橋狐塚古墳や別所古墳群といった首長層レベルの古墳が分布しているのみである。したがって、７世紀代までの本遺跡の特色として比較的均質な集団が営んだ一般的な集落として捉えることができるのである。

７世紀末以降に構築されたと思われる掘立柱建物の性格については、官衙や寺院に伴う出土遺物、関連施設としての工房や厨、さらにそこに暮らした人々が使用した日常道具などもみられない。また、これらに関連する施設では主軸方向を真北にとる傾向があるが、本遺跡では認められなかった。しかしながら、一定の主軸方向を共有するＡ群・Ｂ群とSB１の規模は大きく、当該期の一般集落にみられる通常の掘立柱建物とは性格を異にしていたのかもしれない。８世紀代に至り、それまでの八橋集落の性格が大きく変化した可能性が想定されるのである。

八橋第８・９遺跡に代表される丘陵上に立地する集落が、７世紀後半代に八橋郡の中心地となる加勢蛇川流域の遺跡群とどのような関わりを持ち、また相違が認められるのか、今後取り組まなければならない課題である。　（小口・原）

【引用・参考文献】
相原嘉之　1997「Ⅰ大和　飛鳥・藤原地域の土器」『７世紀の土器』（近畿東部・東海編）古代の土器研究会
岩崎康子　1998「第２節　古墳時代集落の様相」『石脇第３遺跡・石脇８・９遺跡・寺戸第１遺跡・寺戸第２遺跡・石脇第1遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
植野浩三　1981『三保遺跡発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
大賀靖浩　1987『森藤第１・森藤第２遺跡発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
大賀靖浩　1988『水溜り・駕籠据場遺跡、森藤第３遺跡発掘調査報告書』鳥取県東伯町教育委員会
君嶋俊行　2003「井図地頭遺跡における７世紀代の集落について」『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
絹見安明・森脇廣行・原田雅弘　1989『湖山第１遺跡』鳥取県教育委員会・財団法人鳥取県教育文化財団
清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄編、木耳社
山中敏史編　2003『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
都出比呂志　1998「平地住居・高床建物と竪穴住居」『先史日本の住居とその周辺』浅川滋男編　同成社
中山和之　1989a『百塚53・105・106・107号墳・百塚第１遺跡・原田遺跡発掘調査報告書』鳥取県淀江町教育委員会
中山和之　1989b「Ⅳ．小結」『百塚第１遺跡』鳥取県淀江町教育委員会
中山和之　1992『百塚古墳群発掘調査報告書Ⅰ』鳥取県淀江町教育委員会
名越　勉　1981『大高野遺跡発掘調査概報』東伯町教育委員会
根鈴輝雄ほか　1996『不入岡遺跡群発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
牧本哲雄ほか　1998『石脇第３遺跡、石脇８・９号墳、寺戸第１遺跡、寺戸第２遺跡、石脇第１遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
馬渕義則・根鈴智津子　1978『由良遺跡発掘調査報告書』鳥取県大栄町教育委員会
馬渕義則・根鈴智津子　1984『向野遺跡・後ろ谷遺跡発掘調査報告書』鳥取県大栄町教育委員会
馬渕義則・根鈴智津子　1985a『上種第５遺跡発掘調査報告書』鳥取県大栄町教育委員会
馬渕義則・根鈴智津子　1985b『上種第６遺跡発掘調査報告書』鳥取県大栄町教育委員会
森下哲哉　1998『福田寺遺跡発掘調査報告書（２次調査）』倉吉市教育委員会
山中敏史編　2000『郡衙正倉の成立と変遷』奈良国立文化財研究所
鳥取県埋蔵文化財センター　1990『鳥取県埋蔵文化財シリーズ４　歴史時代の鳥取県』

第6章　総　　括

東伯耆における６～７世紀の集落の実態は、西伯耆や因幡地域に比べ未解明な部分が多かった。しかしながら今回の調査によって、その空白期に新たな成果と課題を投げかけることになった。そこで、本章では今回の調査成果をまとめ、今後の展望と課題について簡単な所見を述べたい。

土器編年と地域色　八橋第８・９遺跡から出土した土器は、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭のものを除いて、その主体は６～７世紀後半に該当する。今回は型式学的検討によって、須恵器・土師器のⅢ～Ｘ期変遷を提示した（第５章第１節）。これは住居跡出土資料を基準として、包含層および周辺遺跡の資料に基づく試案であるが、その結果、近畿の生産窯との違い、西伯耆と因幡地方との地域差が確認され、天神川編年Ｘ期（牧本1999）以降を補充する１つの叩き台が提示できた。今後は、増加する資料を補足しながら編年整備を継続していく必要があり、またその成果に基づいた集落論や地域間交流といった課題に向けた分析が求められよう。

物資の流通と谷部の景観　本遺跡からは、生産活動に伴うさまざまな道具や廃材が出土し（第155図）、その中には遺跡周辺では入手できないものが含まれている。また、谷部をとりまく遺跡周辺の自然環境はどのような景観を呈していたか興味深い問題でもある。その点を明らかにするため考古学的分析に加え自然科学的分析を援用した。その成果は下記のようにまとめることができる。

①須恵器については、型式学的分類に基づき50点の試料について胎土分析を実施した（第４章第４節）。当該期の最も近距離に位置している関金町の鳥越山窯跡群とやや距離を置くが島根県松江市大井窯跡群試料との比較を試みている。その結果、胎土の違いからは大きく３グループに分かれることが明らかとなり、その上で９点が鳥越山窯跡群に属する可能性が示されている。逆に、いずれにも属さなかった多くの試料がどこの生産地によるものなのか、未発見の窯跡も視野に入れた基礎データの集積が今後の課題となろう。

②石器については、その主体が周辺地域で採取可能な安山岩であるが、一方で砥石のような特定の器種については花崗岩や流紋岩といった石材が選択されていることが多い。これらは約10～15kmの距離を有する倉吉方面や、約30～40km離れた米子方面において獲得可能である。その入手方法が、どのような経過を辿ったのか、古墳時代における石材の流通構造を解明していく必要がある。

③鉄関連遺物は64点出土している。そのなかで鉄製品は15点あり、その多くが鍛造品である。また、鉄滓は椀形鍛冶滓・流動滓・鍛冶滓・含鉄鉄滓・鉄滓から構成され、精錬鍛冶に伴う流動滓や椀形鍛冶滓など鍛錬鍛冶で生成されたものが含まれていることは注目される（第４章第１節）。しかしながら、鍛冶遺構・鍛冶炉など製鉄関連遺構や羽口などの遺物が検出されていないことから、調査区外にそれらに関する遺構が存在するか、別所中峯遺跡（大野2004）のような遺跡から搬入されたか課題となる。

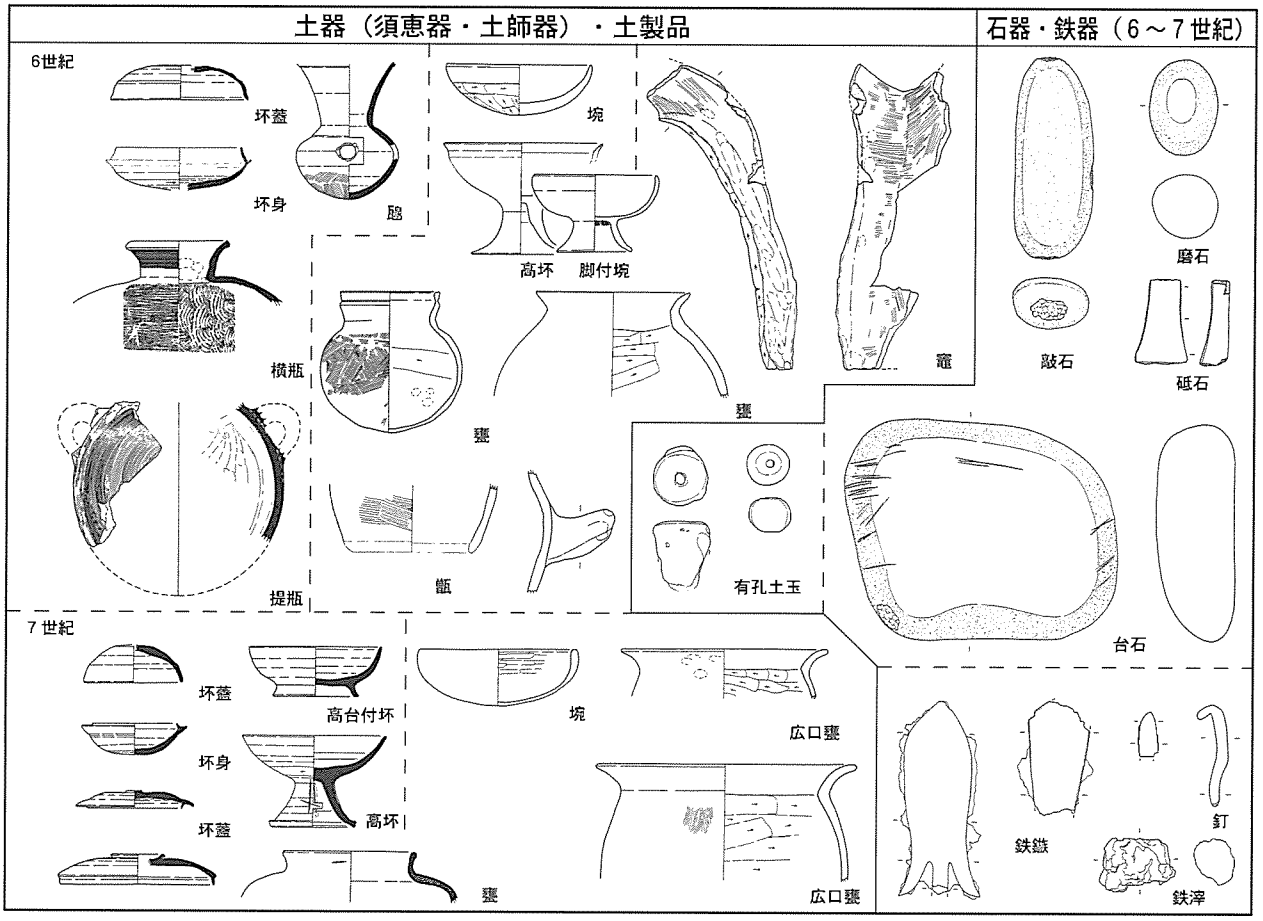
④生産活動に伴い大きな役割を担ったと想定される谷部の景観は、どうであったのか。南谷部中心部の植物珪酸体と花粉分析を実施した（第４章第２・３節）。その結果、古墳時代における谷部の自然環境はイネ科植生であり、日当たりの良い比較的乾燥した環境であったことが推定された。

八橋第８・９遺跡の成り立ちと周辺遺跡群　八橋第８・９遺跡は、２世紀後葉に居住活動が始まるが、その後３世紀～５世紀末までの間にわたって活動の痕跡が途絶えてしまう。居住活動が再開されるのは６世紀代の古墳時代後期からであり、終末期まで継続される。当該期に帰属する竪穴住居は23棟、

掘立柱建物は８棟、土坑11基である。

本遺跡は、丘陵部に主要な居住域を設け、眼前に拡がる浅い谷部を利用した集落景観を呈している。土器編年の検討に基づいた各時期の遺構の構成と変遷では、２～３棟の大小の竪穴住居が一定のエリアのなかで消費単位となって居住活動を行っていることが推測された。竪穴住居とともに主軸を異にした２ブロックの掘立柱建物群も検出され、７世紀後半代に至り大栄町向野遺跡のような掘立柱建物を中心とする遺構群が現れる現象にも符合している（君嶋2002）。

東伯耆地域の特色として、古墳時代後期の古墳群が多いという現象は先学によって指摘されてきたが、一方でそれらを築造した集団の居住地としての集落が少ないという事実とどう整合性を持たせるか大きな課題であった。周辺の丘陵上を概観すると、笠見第３遺跡、三林遺跡、久蔵峰北遺跡といった弥生時代後期後半を最盛期として、断絶期を挟みつつ古墳時代中期まで継続する集落と入れ替わるように八橋集落は登場するのである。このような解釈の１つとして、丘陵上から低地へ居住活動が変化したという見解があるが、今回の調査によってその可能性は捨てきれないものの、７世紀代の周辺遺跡として約2.5km南東に位置する井図地頭遺跡や三保遺跡といった、その後も丘陵上を選択して居住活動を行った集団が存在した事実は重要であろう。八橋集落の営まれる７世紀代は、各地の古墳群が終焉を向かえるとともに、低丘陵上に位置する斎尾廃寺や大高野遺跡といった八橋郡の中心地が確立される時期でもある。このような中で、一時期２～３棟から構成される八橋集落と同規模集落が各丘陵を単位として点々と分布していた可能性が推測され、周辺古墳群や生産遺跡、さらに低丘陵遺跡群との相互関係を今後検討していく必要があろう。　（小口）



第155図　八橋第８・９遺跡における６～７世紀の道具の組成

写真図版
(PLATE)

調査区全景(北が上)

1．調査前の遺跡遠景（東から）

2．丘陵上の遺構検出状況（東から）

1．SI 1 遺物出土状況
（南から）

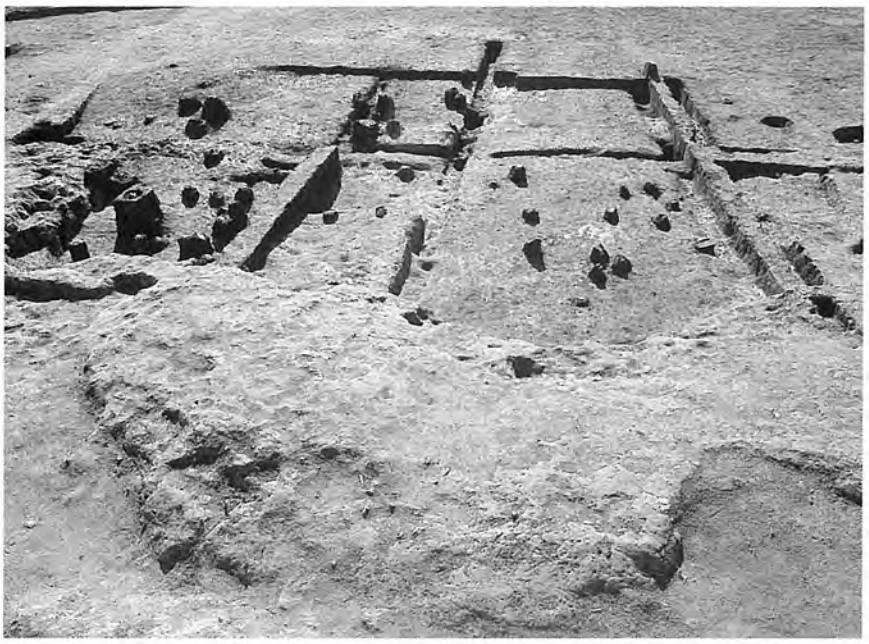
2．SI 1 完掘状況（南から）

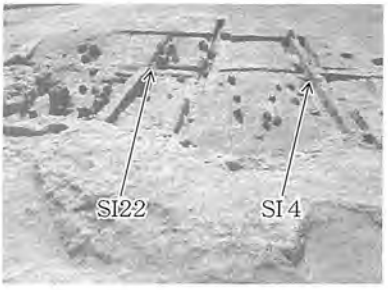
3．SI 2 完掘状況（南から）

1．　SI 3 遺物出土状況
（南から）

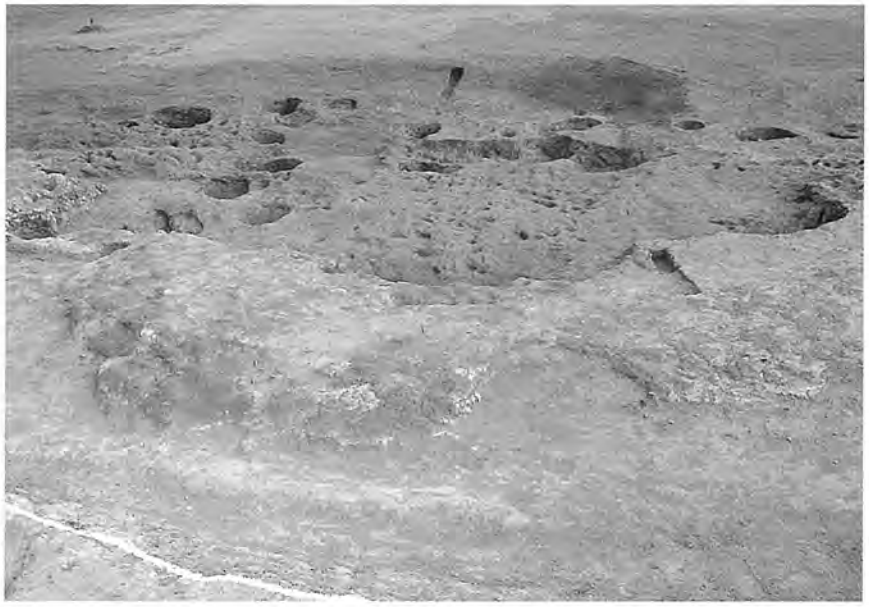
2．　SI 3 遺物出土状況拡大
（北から）

3．　SI 3 完掘状況（南から）



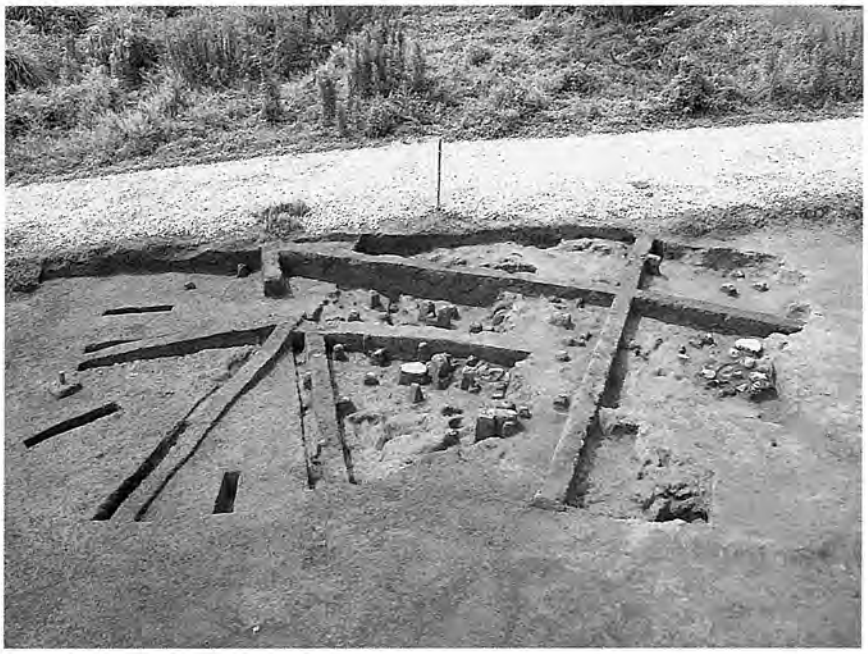


1． SI 4 ・22遺物出土状況
（北から）



2． SI 4 ・22完掘状況
（北から）

3． SI 5 遺物出土状況
（南から）



1． SI6・SK11遺物出土状況
（東から）

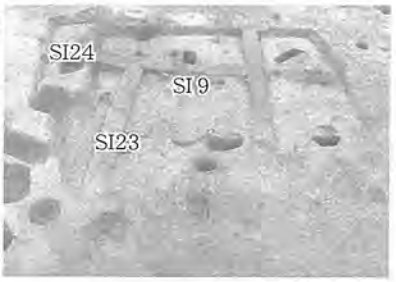
2． SI6完掘状況
（東から）

3． SI6遺物出土状況
（東から）

1． SK11完掘状況（東から）

2． SK11遺物出土状況
（南から）

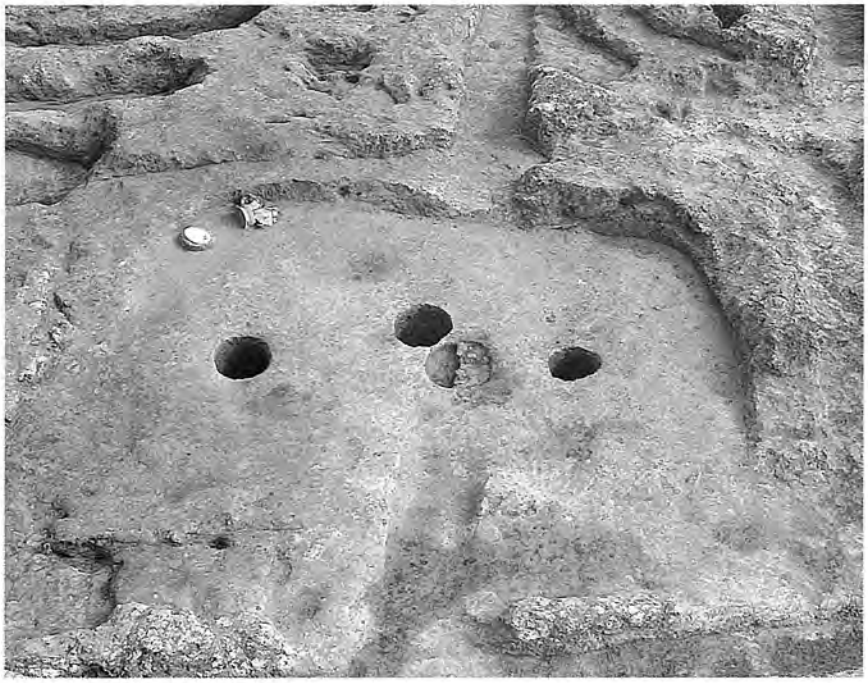
3． SI 7 ・26完掘状況
（南から）



1. SI9・23・24遺物出土状況（南から）

2. SI9－P2土器・鉄滓出土状況（南から）

3. SI10完掘状況（南から）

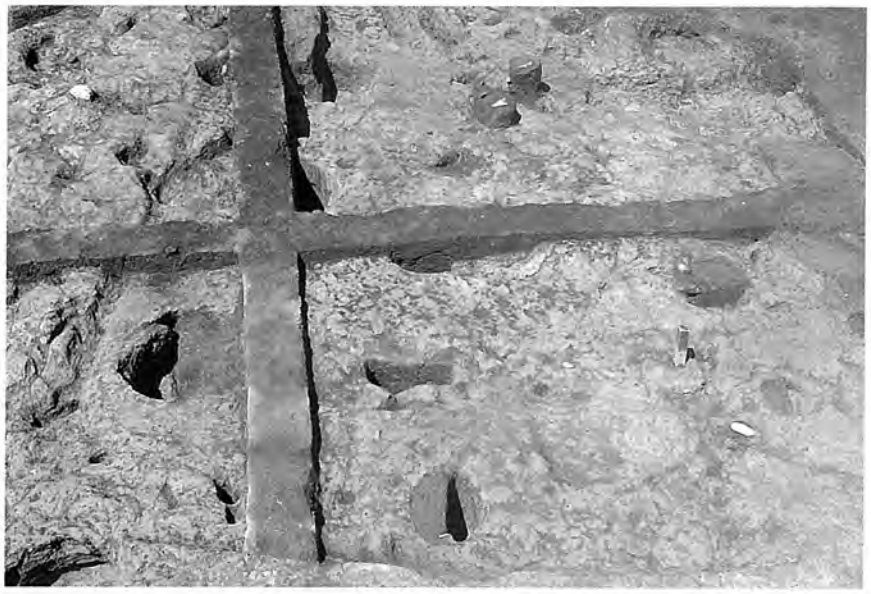


1. SI11完掘状況
（北西から）

2. SI11遺物出土状況
（北西から）

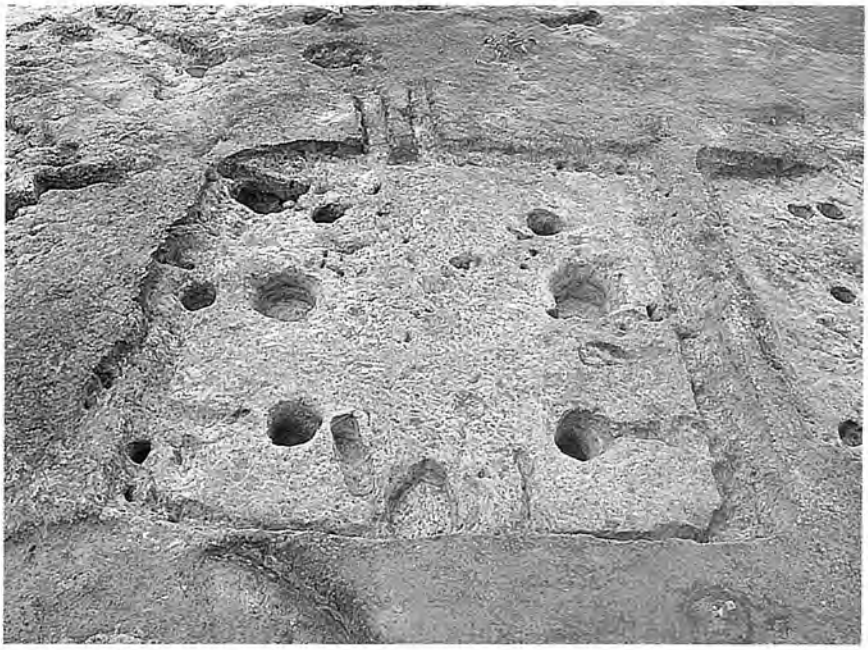
3. SI12遺物出土状況
（南から）

1． SI12遺物出土状況
（西から）



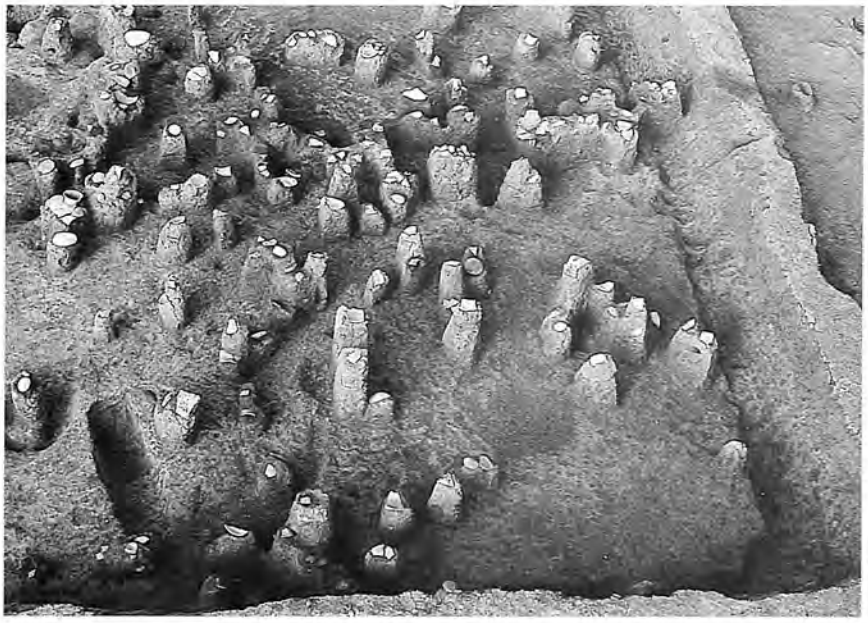
2． SI13遺物出土状況
（東から）

3． SI13遺物出土状況
（東から）



1．SI14完掘状況
（南から）

2．SI14遺物出土状況
（西から）

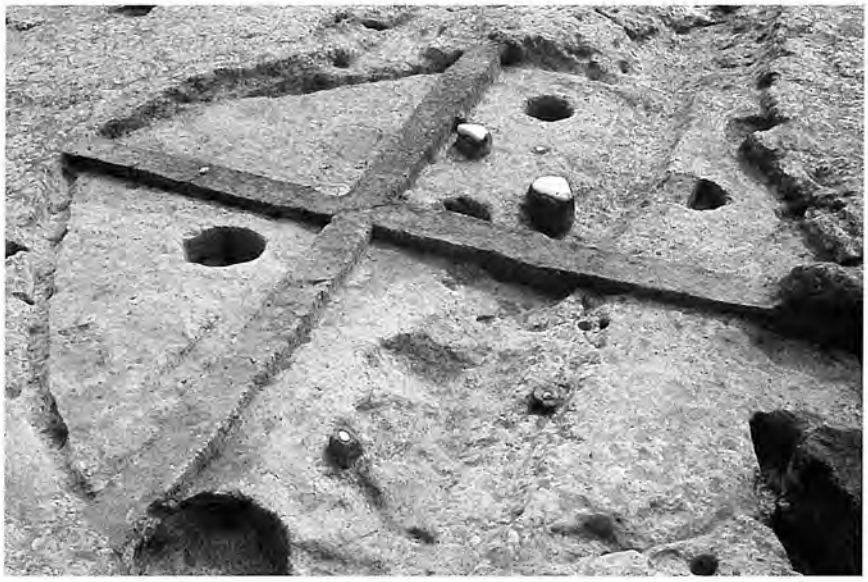


3．SI14遺物出土状況
（南から）

1． SI15遺物出土状況
（南から）

2． SI16完掘状況（東から）

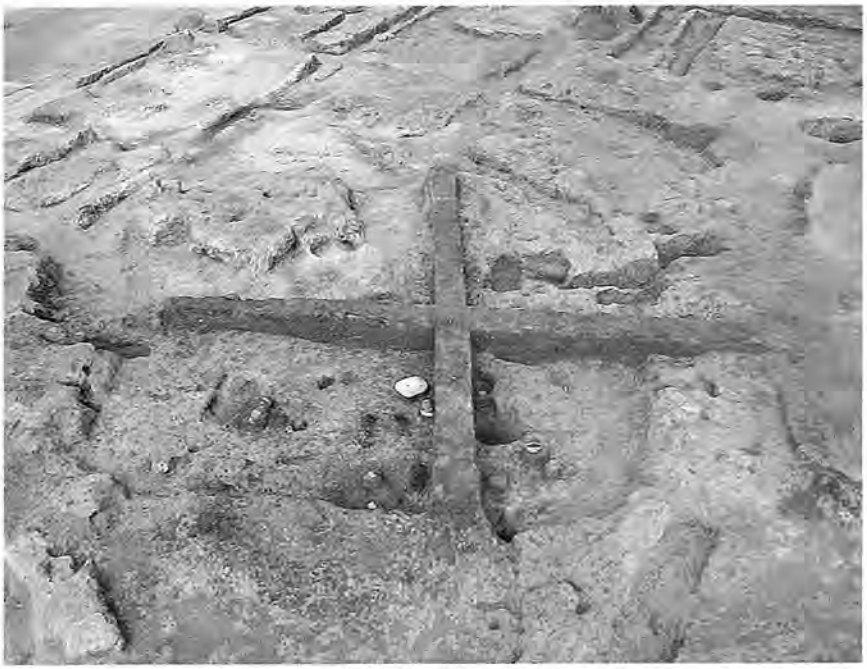
3． SI16遺物出土状況
（北から）



1．　SI17遺物出土状況
（北から）

2．　SI17遺物出土状況
（西から）

3．　SI18完掘状況
（北西から）

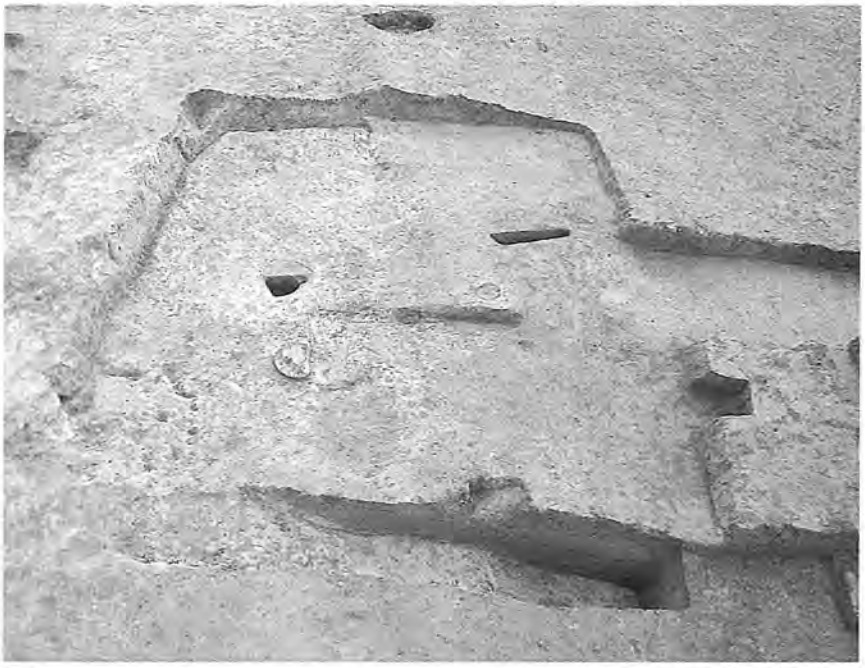


1．　SI19遺物出土状況
（西から）

2．　SI19遺物出土状況
（北西から）

3．　SI19遺物出土状況
（南西から）

1． SI20完掘状況（北から）



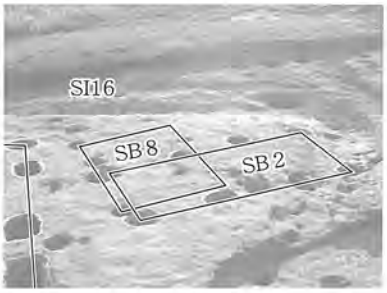
2． SI21完掘状況（東から）

3． SI25完掘状況（北から）

1．SB１・２・５・８完掘状況（東から）

2．SB１布堀状ピット完掘状況
（左からP11・12・13、西から）

3．SB１布堀状ピット完掘状況
（左からP７・P６、東から）

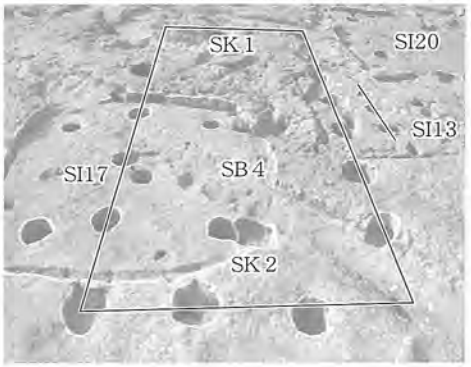


1． SB 2 ・ 8 完掘状況
（北東から）

2． SB 3 完掘状況
（南東から）

3． SB 5 完掘状況（東から）

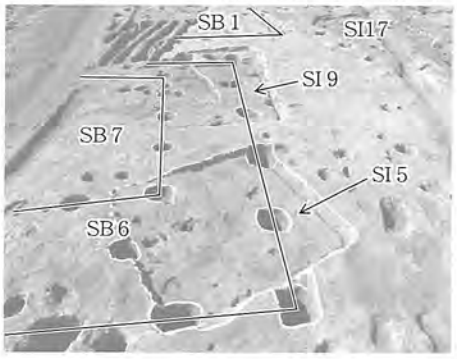
1．SB４完掘状況（南から）

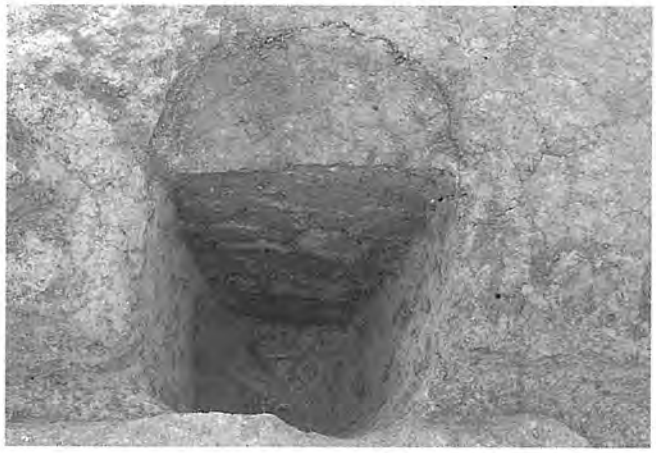


2．SB４－SK１遺物出土状況（北から）

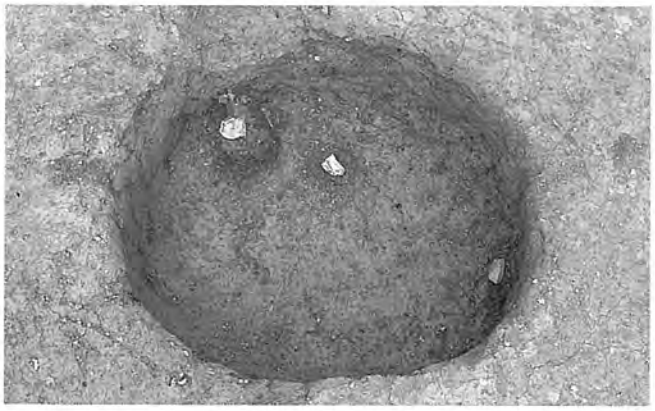
3．SB４－P７土層堆積状況（南から）

1．SB６・７完掘状況（東から）





2．SB６－P10土層堆積状況（東から）



3．SB６－P２遺物出土状況（南から）

1．ピット列４完掘状況（西から）

2．SK８完掘状況（北から）

3．SK９完掘状況（北から）

4．SK10完掘状況（南東から）

1． SD１完掘状況（東から）

2． SD１完掘状況（西から）

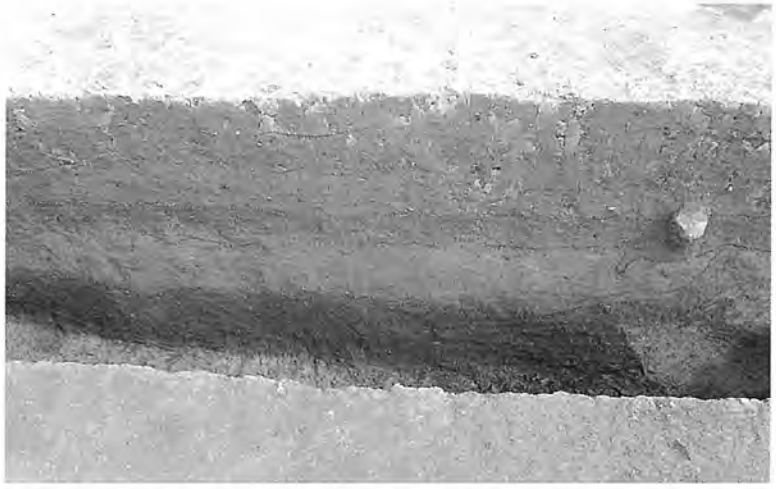
3． SD４土層堆積状況（東から）

4． SD９土層堆積状況（北から）

1． 南谷部西半完掘状況（北東から）

2． 南谷部東半完掘状況（北西から）

1．南谷部土層堆積状況（西から）



2．南谷部土層堆積状況拡大
（西から）

3．南谷部土器集中ブロック2
（南から）

1． 北谷部遺物出土状況（南東から）

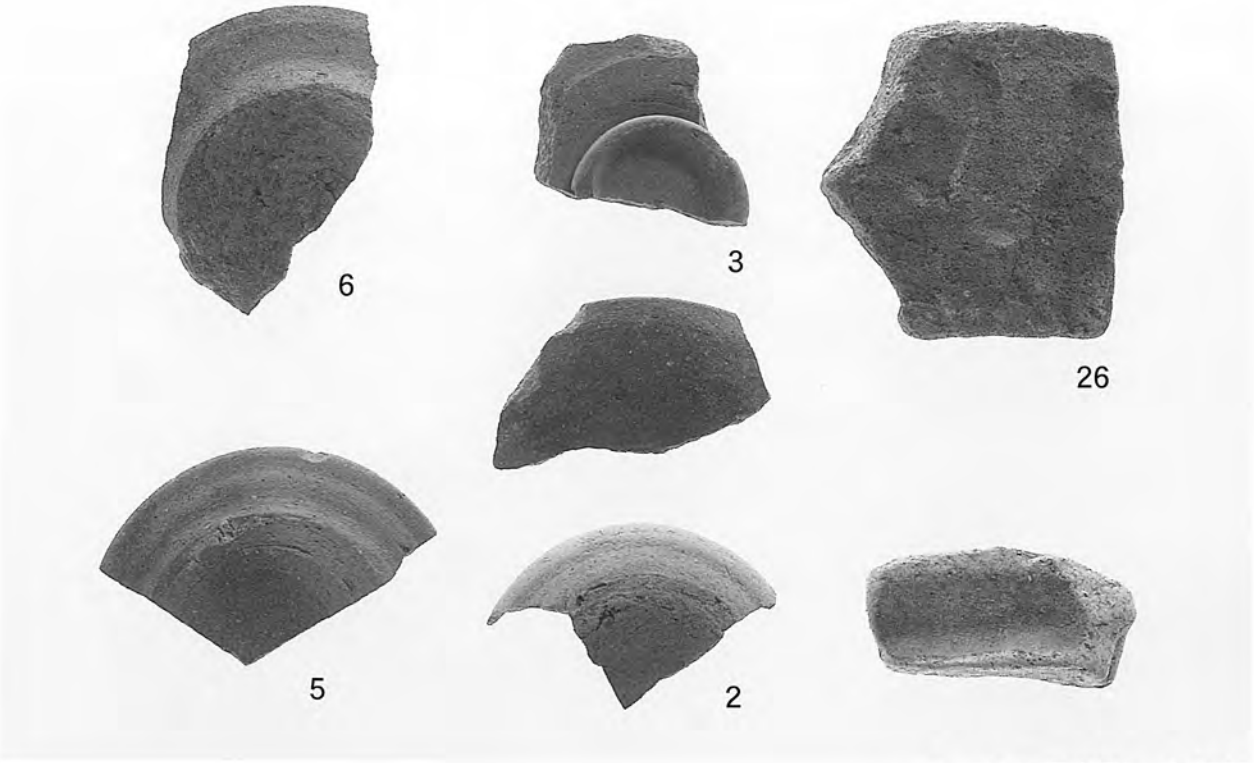
2． 北谷部遺物出土状況（西から）

3． 北谷部遺物出土状況（南から）

1．　調査区南東部完掘状況（南から）

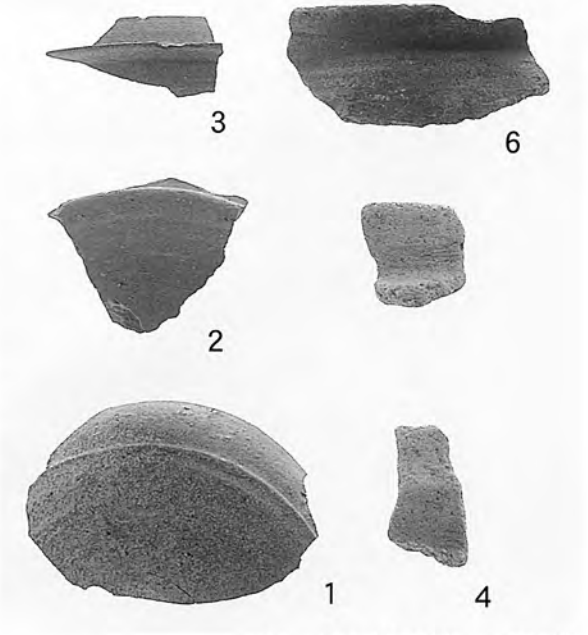
2．　八橋第８・９遺跡から別所中峯遺跡を望む（南から）

1．SI 1 須恵器



1． SI 1 須恵器・土師器

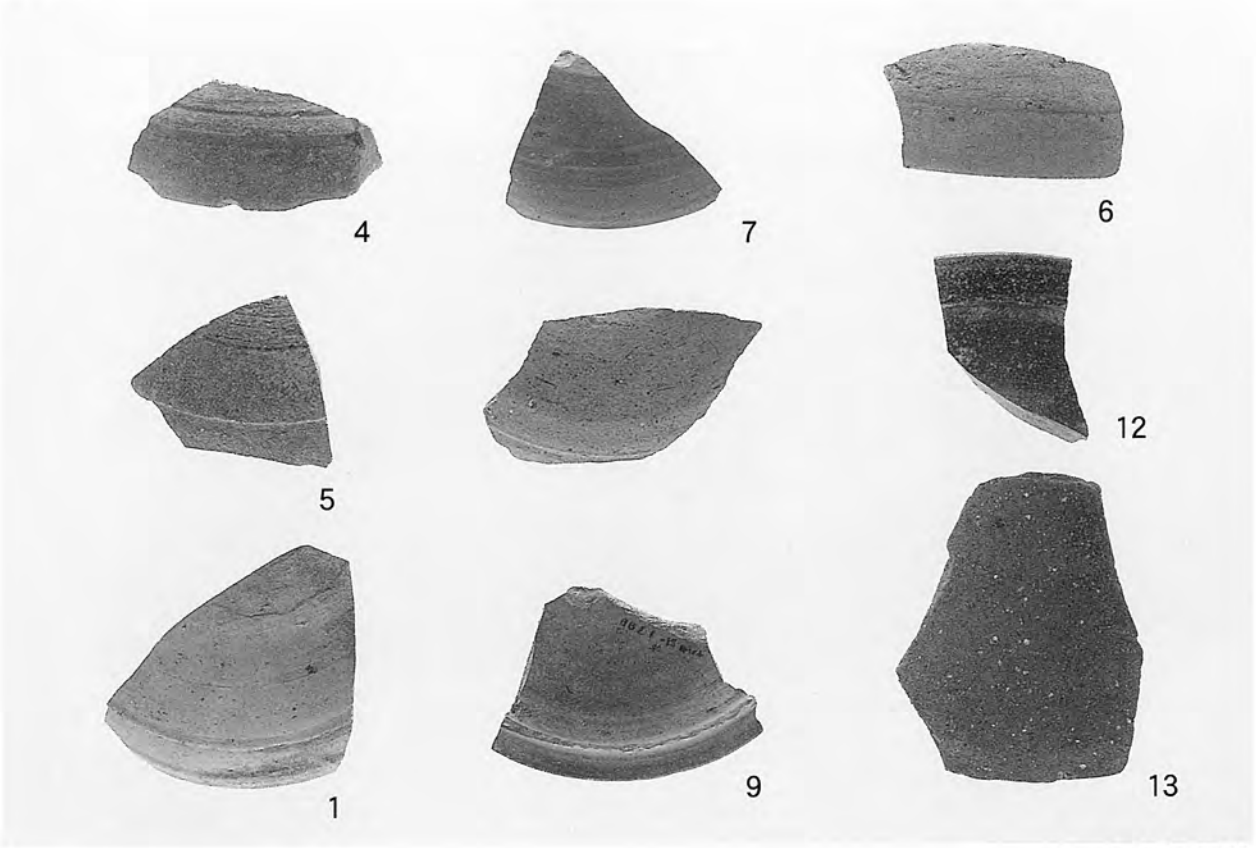
2． SI 1 土師器



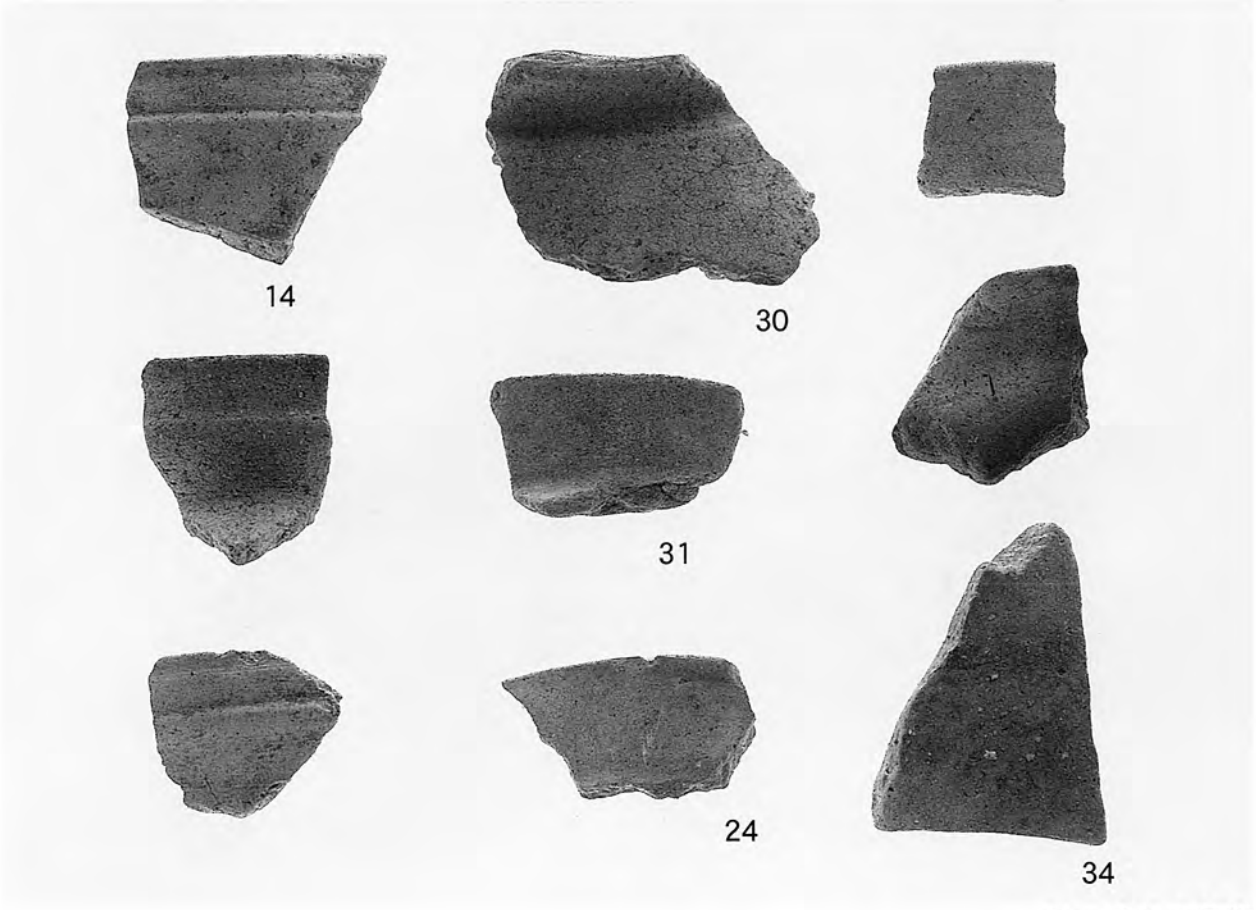
3． SI 2 須恵器・土師器

4． SI 3 土師器

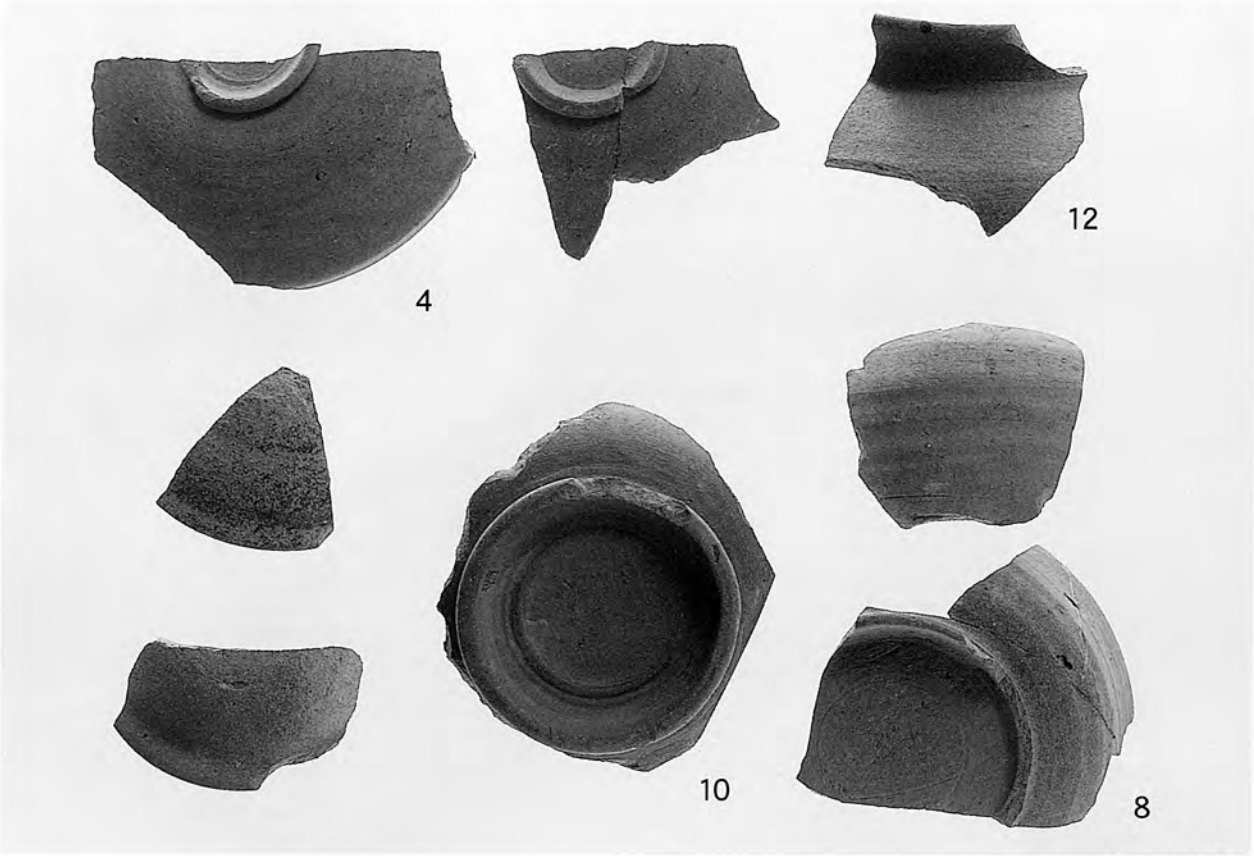
5． SI 3 須恵器



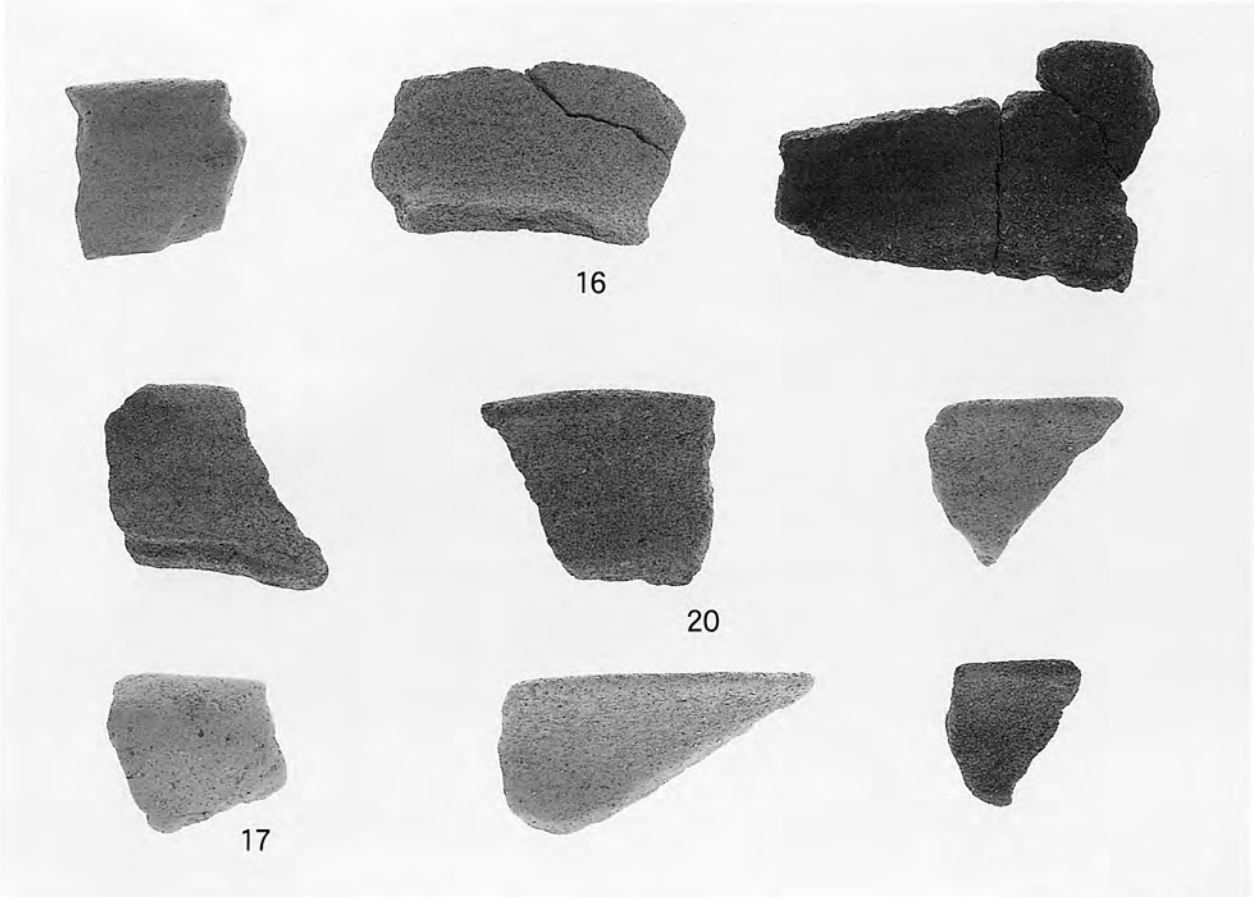
1． SI 3 須恵器



2． SI 3 土師器



1． SI 4 須恵器



2． SI 4 土師器

2

9

1． SI４須恵器

2

3

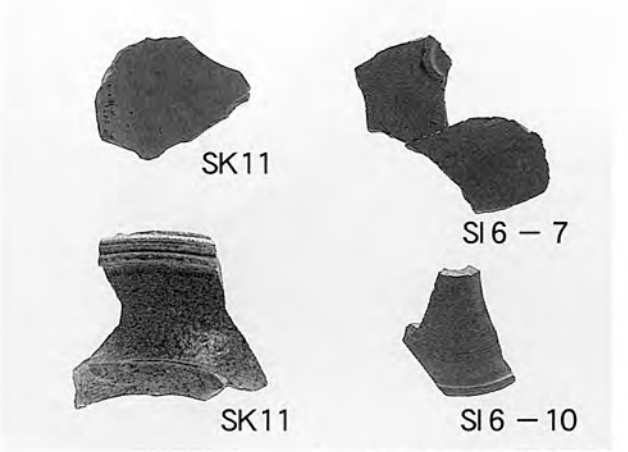
5

8

2． SI22須恵器

13

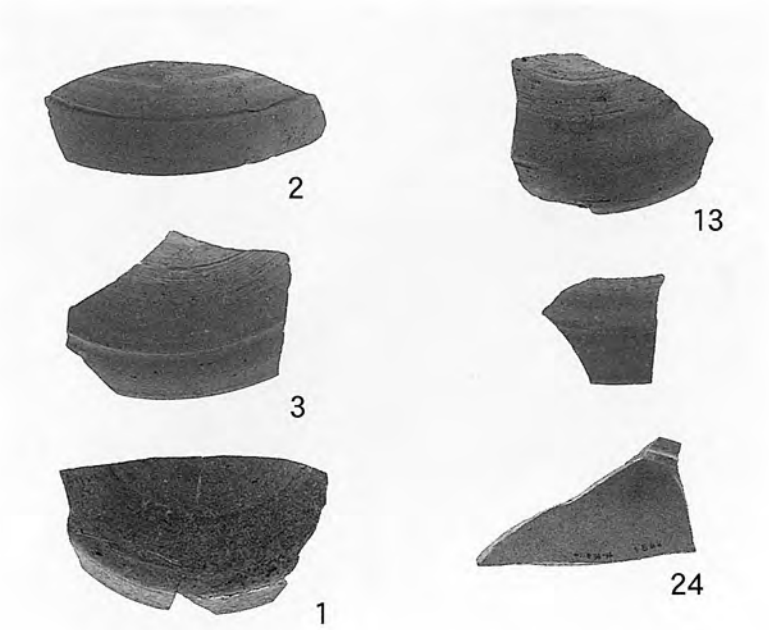
3． SI22土師器



1．SK11・SI6 須恵器

2．SI6 土師器

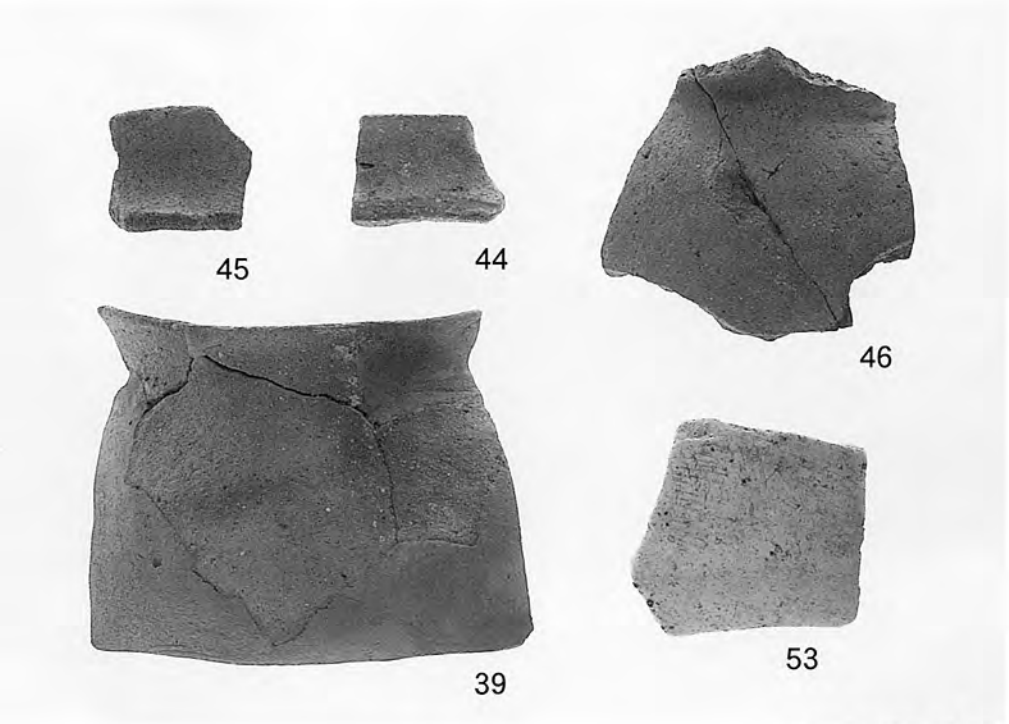
3．SI11弥生土器



1．SI14須恵器（1）

1． 南谷部（黒褐色土層）須恵器

2． SI14須恵器（2）



3． SI14土師器

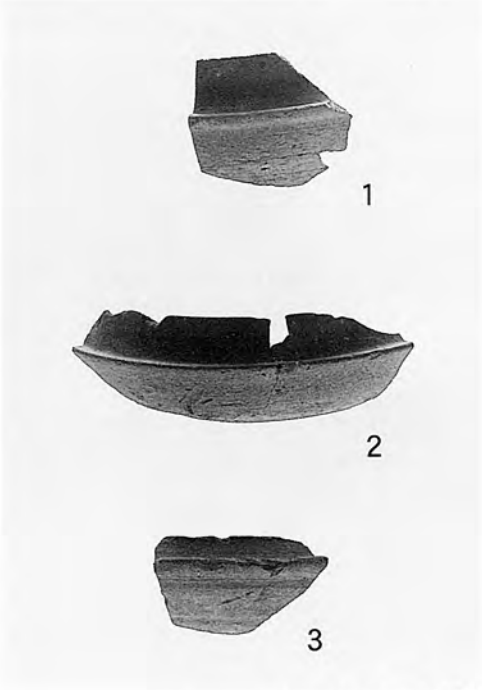
1． SI15土師器

2． SI16須恵器

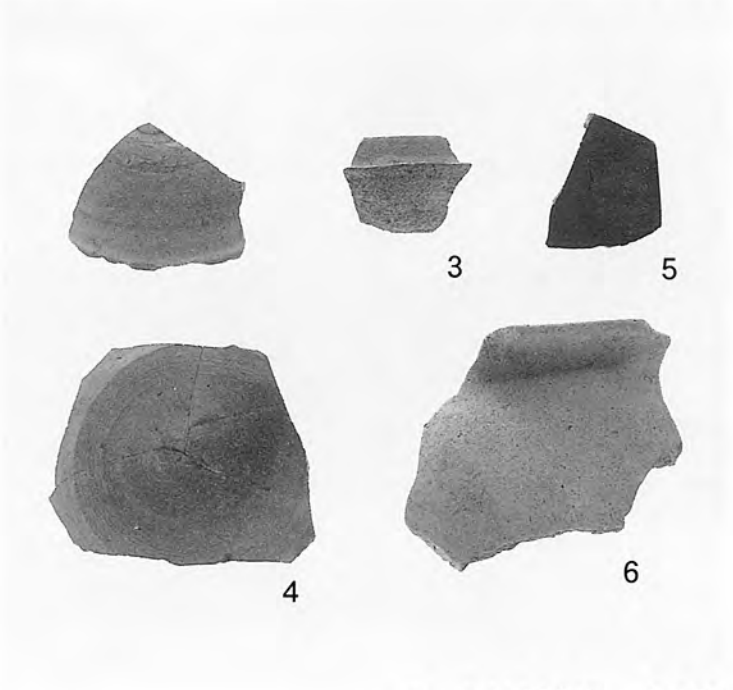
3． SI17土師器

4． SI19土師器

6. SI20須恵器



5. SI19須恵器

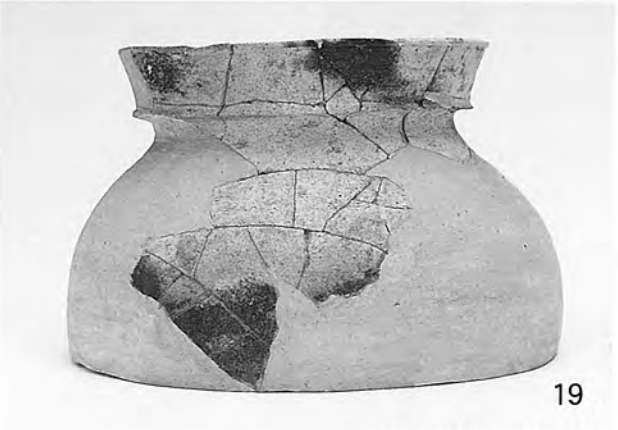


7. SI20須恵器・土師器

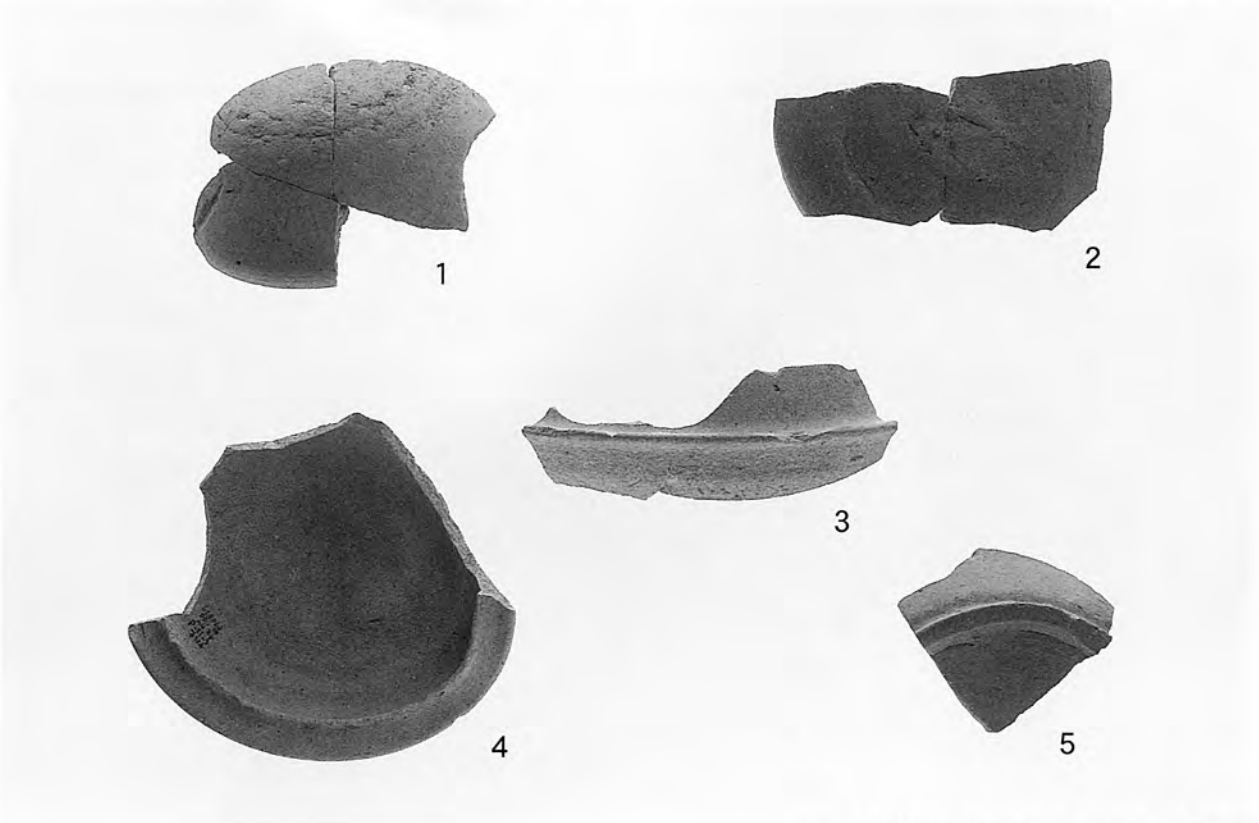
1． SI21土師器

3． 北谷部須恵器

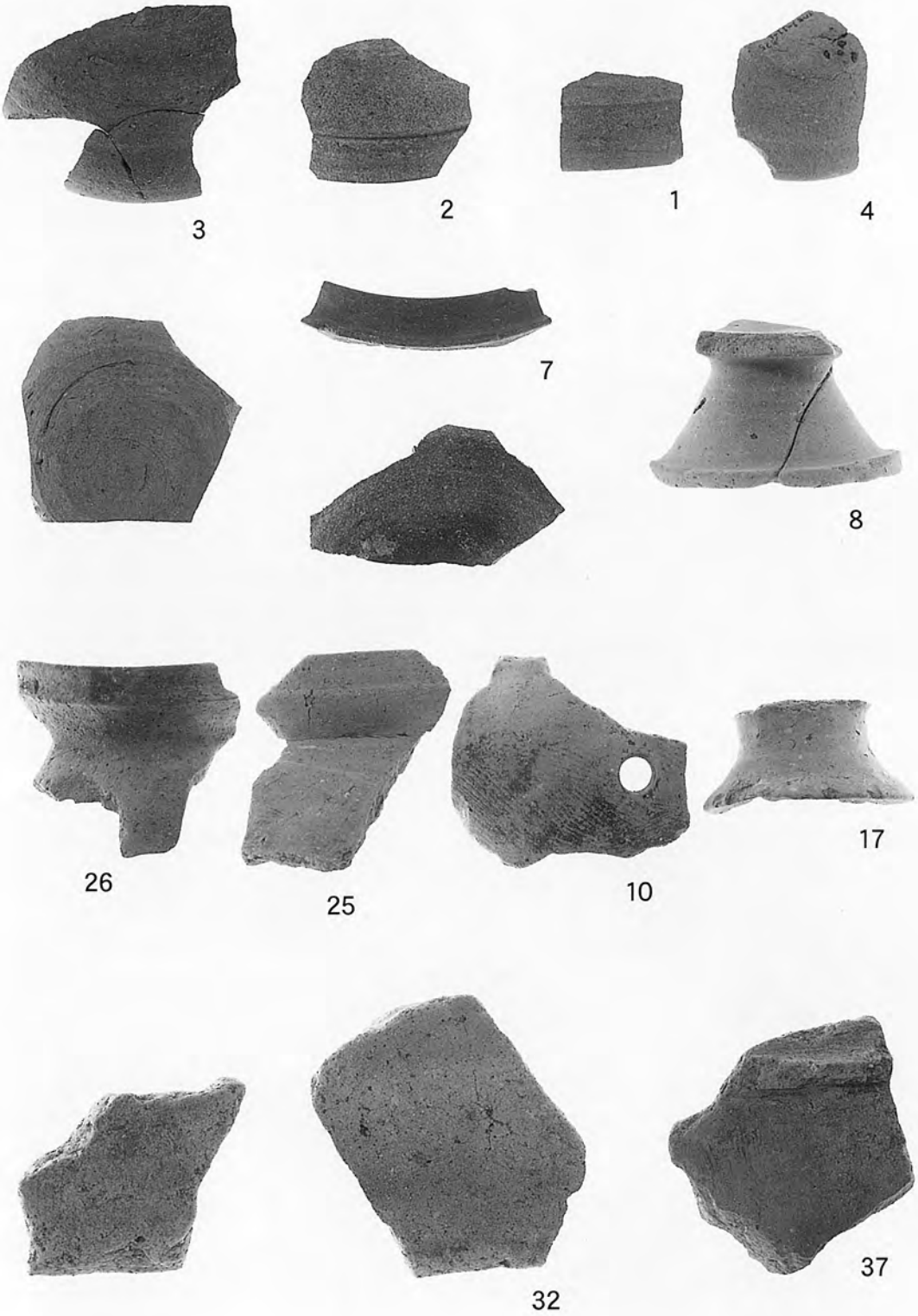
2． SI25土師器



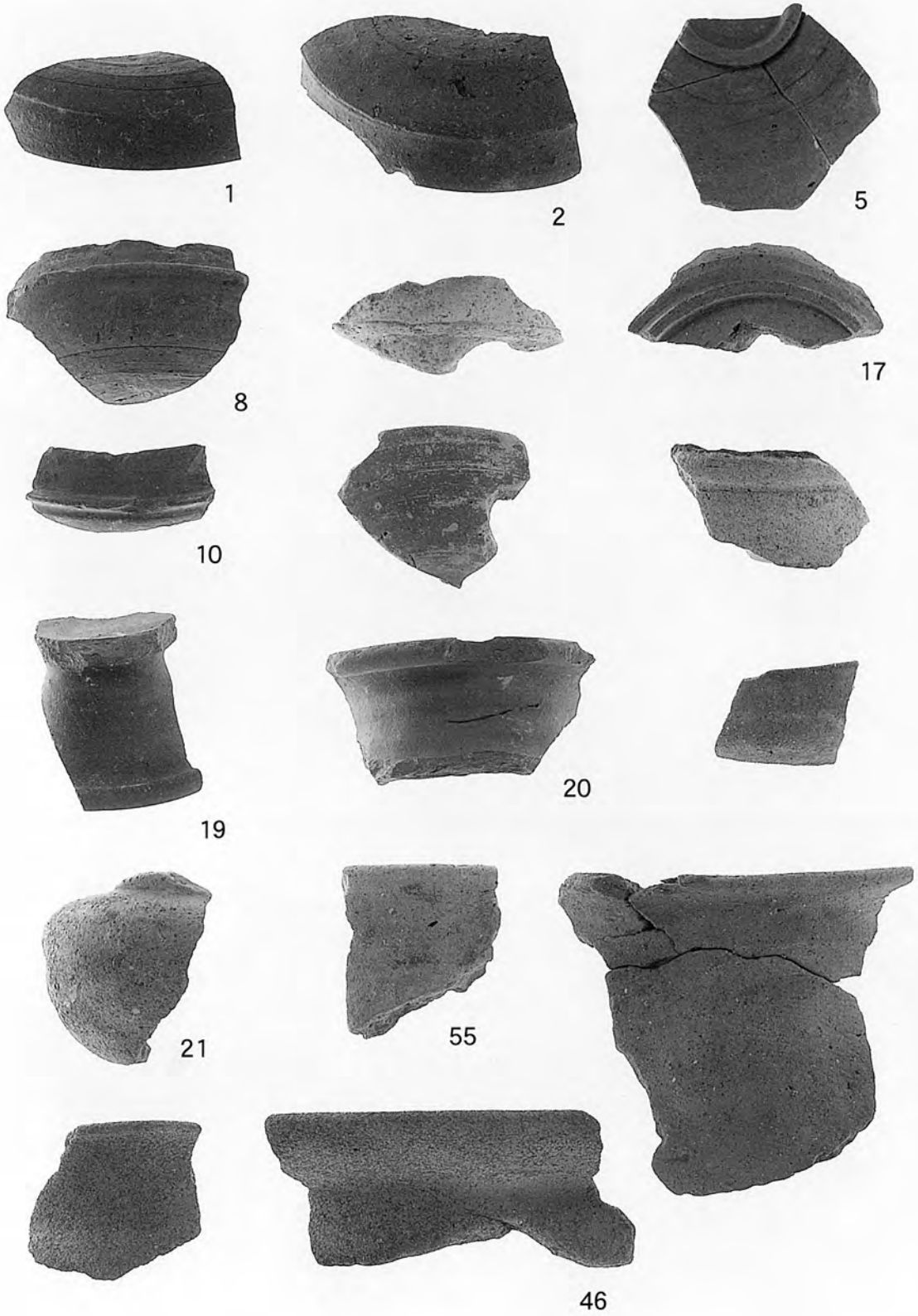
4． 北谷部土師器



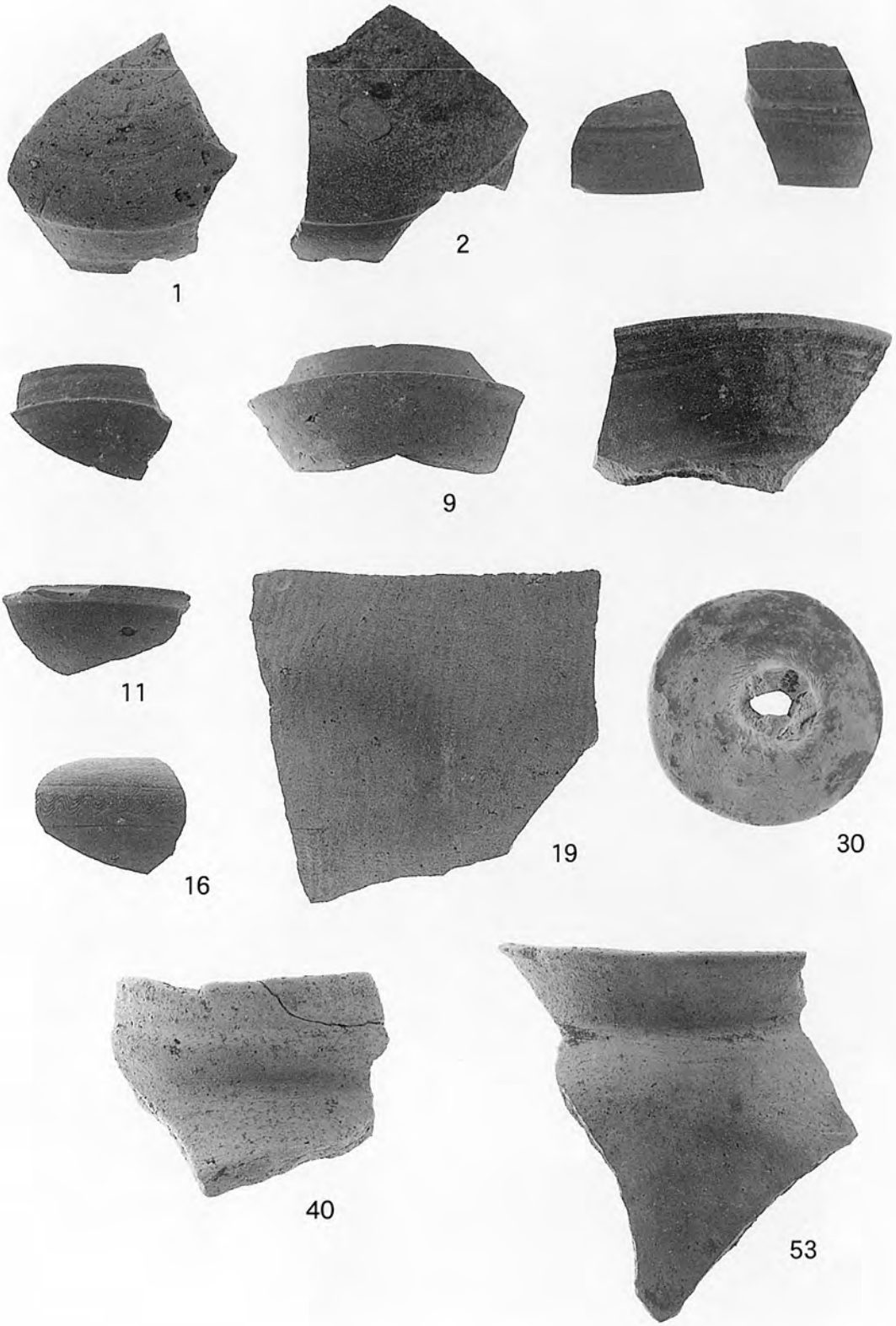
5． 南谷部（茶褐色土層）須恵器



1．南谷部（暗褐色土ａ層）須恵器・土師器



1．南谷部（暗褐色土ｂ層）須恵器・土師器



1．南谷部（黒褐色土層）須恵器・土師器

1

2

5

6

7

10

12

1．南谷部土器集中ブロック１土師器

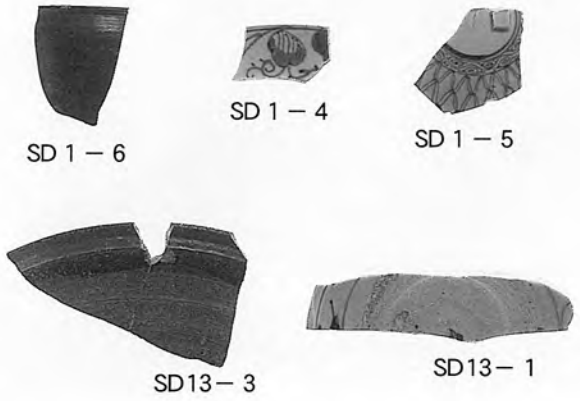
1

2．南谷部土器集中ブロック２土師器

1．南谷部土器集中ブロック３須恵器

2．北谷部撹乱土土師器

3．南谷部（黒褐色土層）須恵器・土師器



4．陶磁器

1

4

3

5

7

6

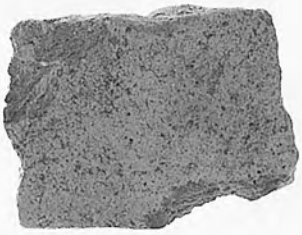
9

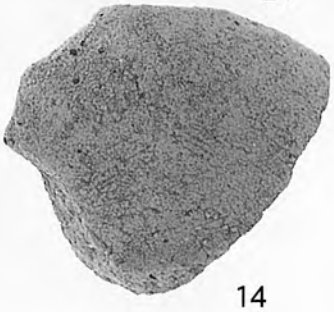
11

10

21

8

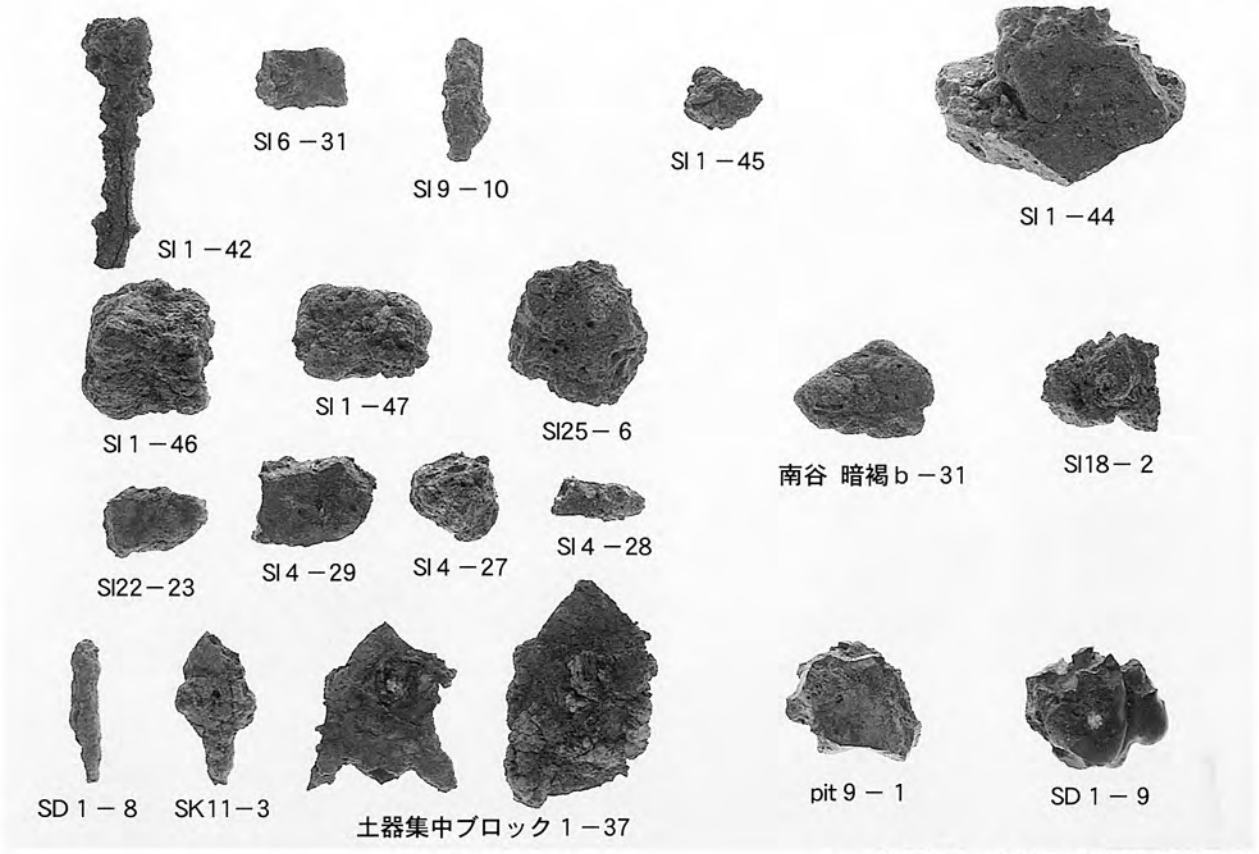



14

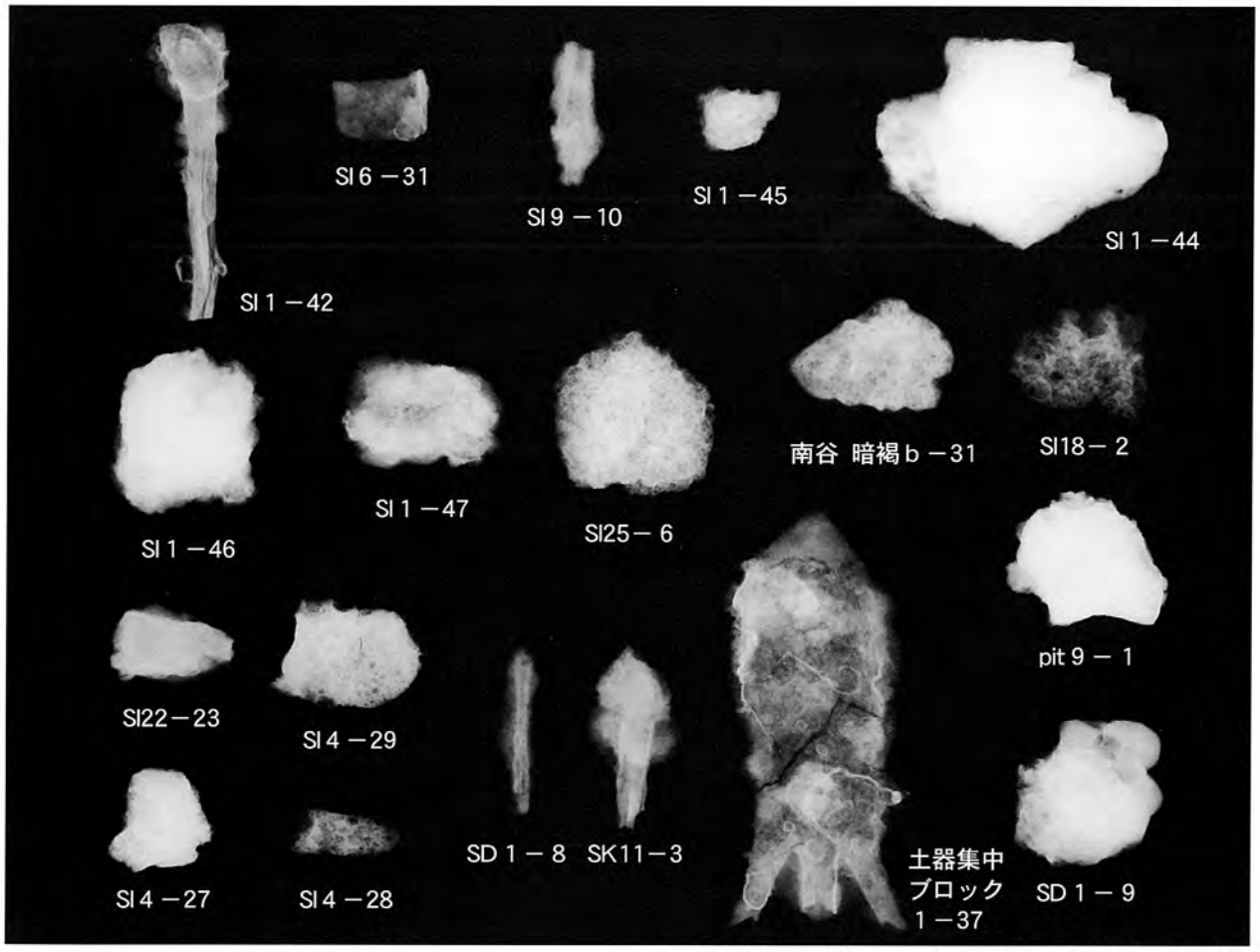
北谷部（暗褐色土層）須恵器・土師器

1．甑把手

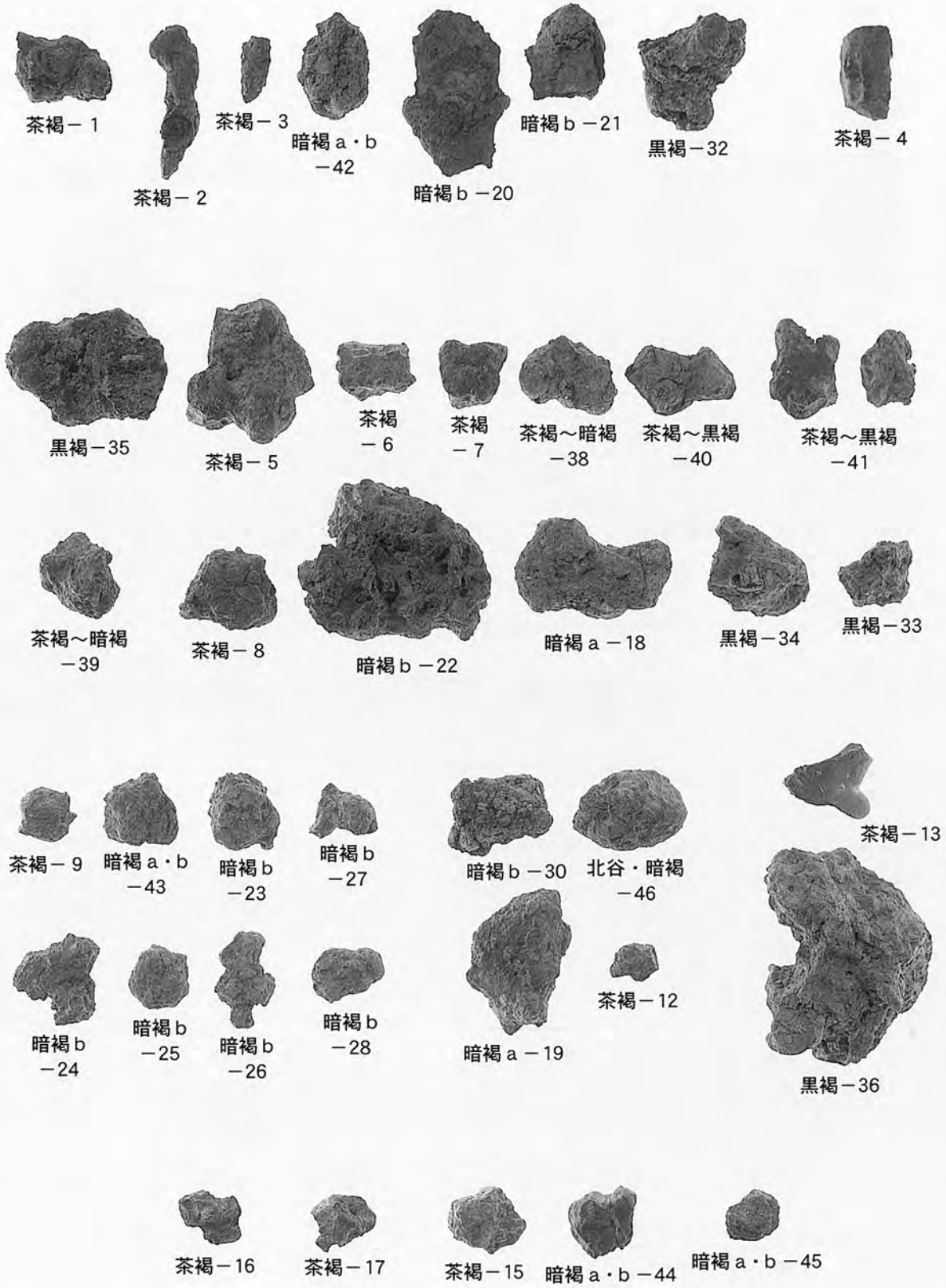
2．有孔土玉



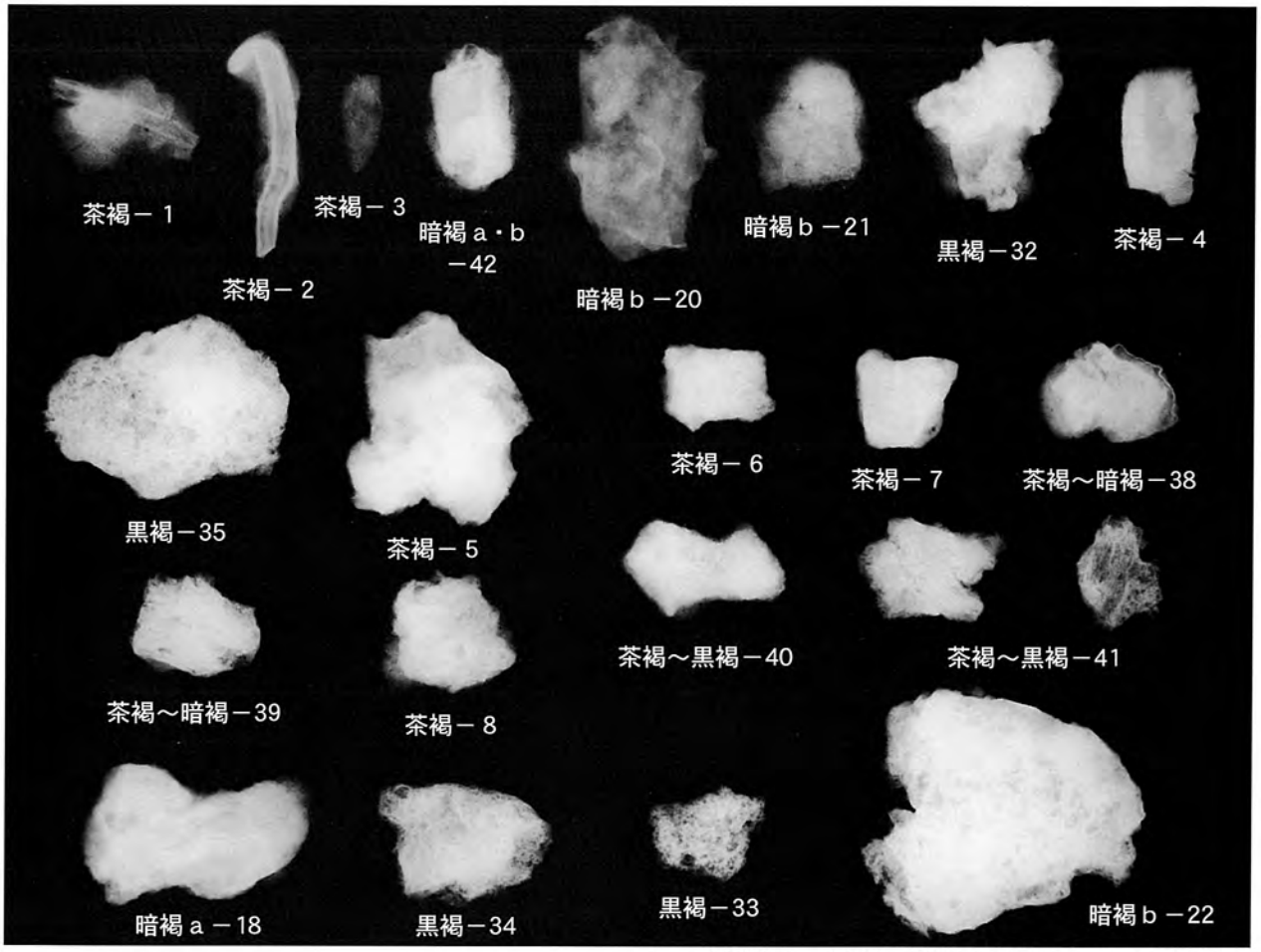
1． 鉄製品・鉄滓（遺構内出土）



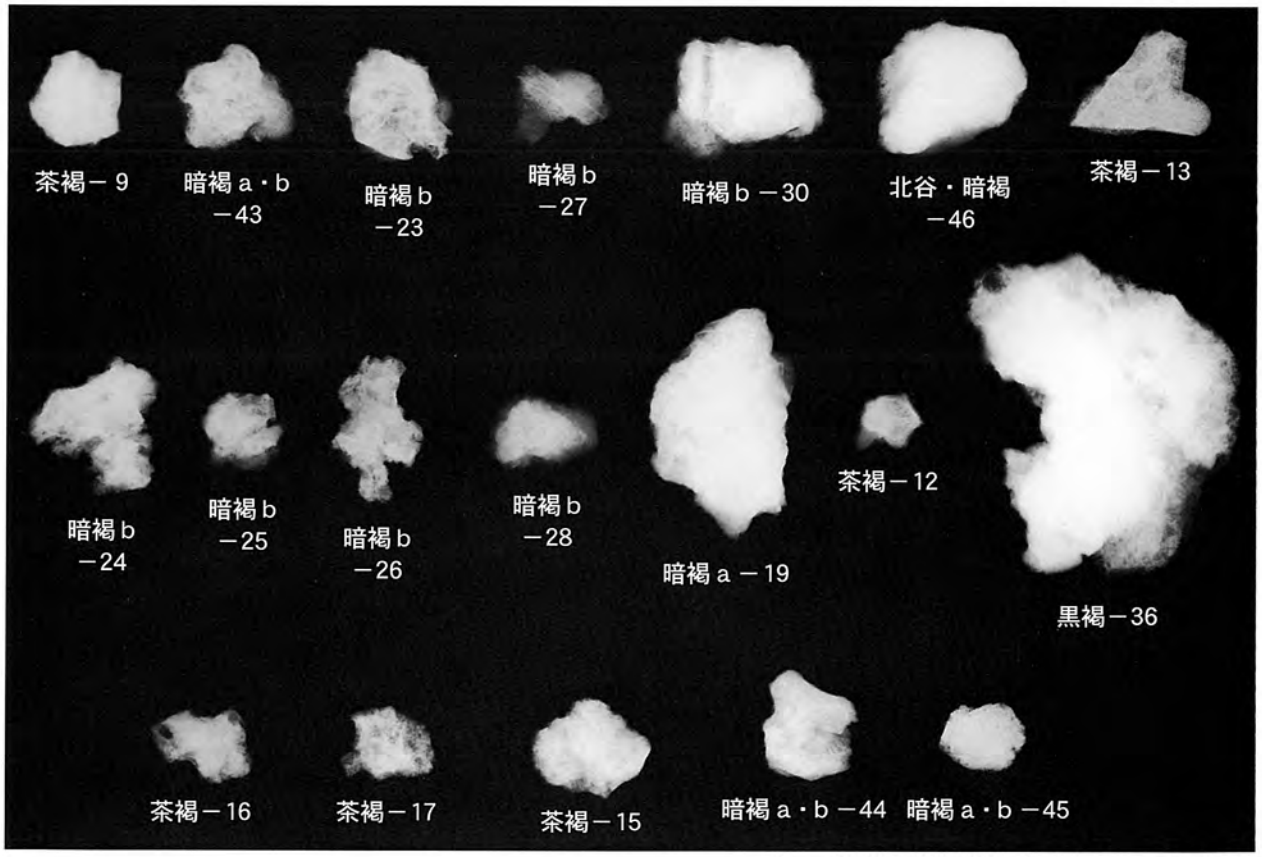
2． 鉄製品・鉄滓（遺構内出土）レントゲン


茶褐－1
茶褐－2
茶褐－3
暗褐a・b－42
暗褐b－20
暗褐b－21
黒褐－32
茶褐－4
黒褐－35
茶褐－5
茶褐－6
茶褐－7
茶褐～暗褐－38
茶褐～黒褐－40
茶褐～黒褐－41
茶褐～暗褐－39
茶褐－8
暗褐b－22
暗褐a－18
黒褐－34
黒褐－33
茶褐－9
暗褐a・b－43
暗褐b－23
暗褐b－27
暗褐b－30
北谷・暗褐－46
茶褐－13
暗褐b－24
暗褐b－25
暗褐b－26
暗褐b－28
暗褐a－19
茶褐－12
黒褐－36
茶褐－16
茶褐－17
茶褐－15
暗褐a・b－44
暗褐a・b－45

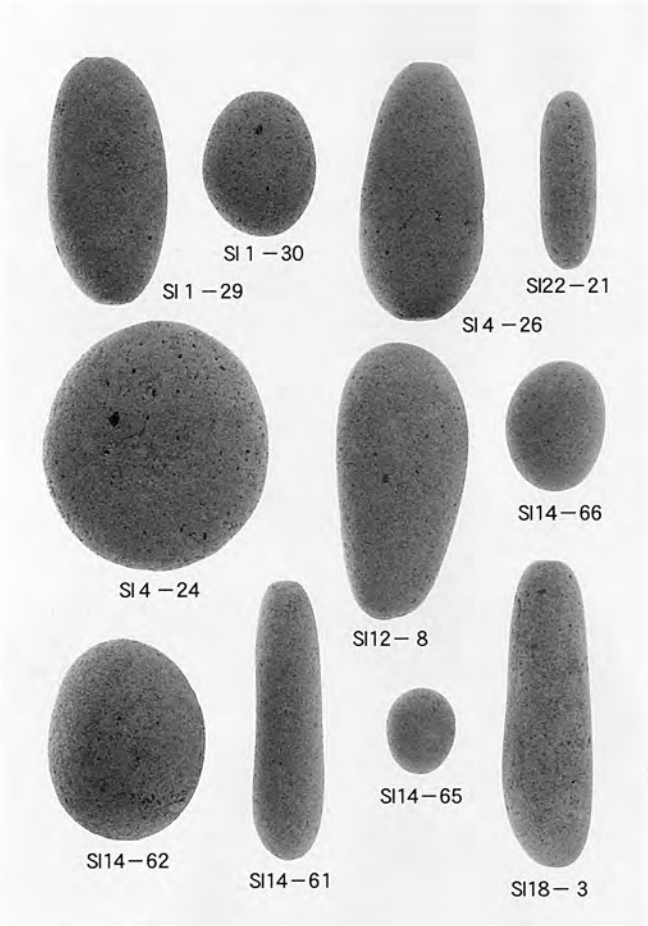
鉄製品・鉄滓（遺構外出土）

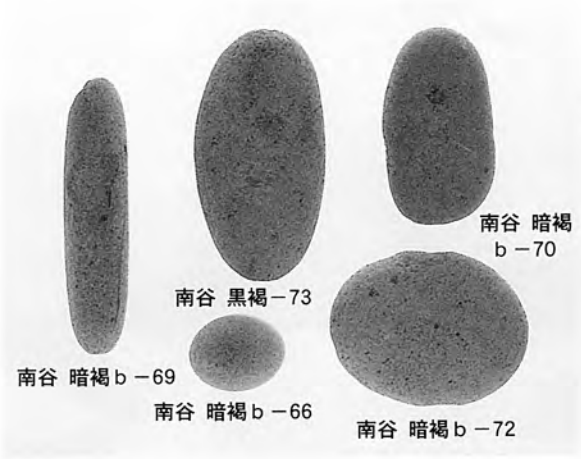


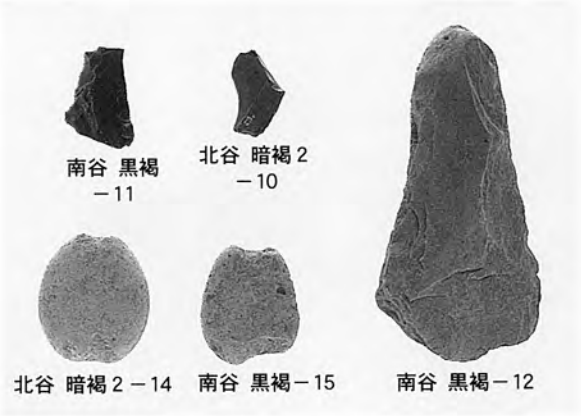
1．鉄製品・鉄滓（遺構外出土）レントゲン



2．鉄滓（遺構外出土）レントゲン


SI 1 －30
SI 1 －29
SI22－21
SI 4 －26
SI 4 －24
SI14－66
SI12－ 8
SI14－62
SI14－61
SI14－65
SI18－ 3


南谷 暗褐
b －70
南谷 黒褐－73
南谷 暗褐b －69
南谷 暗褐b －66
南谷 暗褐b －72


南谷 黒褐
－11
北谷 暗褐2
－10
北谷 暗褐2－14
南谷 黒褐－15
南谷 黒褐－12

南谷
黒褐（95）
北谷 暗褐2（31）
南谷
暗褐a（44）
SI19（12）
SI 3（40）
SI14（58）
南谷 黒褐（96）

1．石器

抄　録

ふりがな	やばせだいはち・きゅういせき
書名	八橋第８・９遺跡
副書名	一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	87
編著者名	小口　英一郎　　北島　大輔　　原　あづさ
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒680－0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260　Tel. 0857－27－6717
発行年月日	西暦2004年（平成16年）３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やばせだいはち・きゅういせき 八橋第８・９遺跡	とうはくぐんとうはくちょうおおあざやばせ 東伯郡東伯町大字八橋 あざにしにほんまつ 字西二本松2263ほか	31368	273	35°29′ 53.9687″	133°39′ 41.4261″	20030512 ～ 20031113	11,732㎡	一般国道９号 東伯中山道路 改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八橋第８・９遺跡	集落	弥生時代後期～ 古墳時代前期	竪穴住居跡３ 掘立柱建物跡１	弥生土器、石器	
		古墳時代後期～終末期	竪穴住居跡23 掘立柱建物跡８ 柵列３、ピット列５ 土坑８、袋状土坑３	須恵器、土師器、石器 土玉、鉄製品・鉄滓	
		時期不明	溝状遺構	陶磁器、土錘	古墳時代以降

鳥取県教育文化財団調査報告書87

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県東伯郡東伯町

八橋第８・９遺跡

発　行　2004年３月31日
編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団
埋蔵文化財センター
〒680－0151　岩美郡国府町宮下1260
電話（0857）27－6717
発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団
印　刷　株式会社　鳥取平版社